

通類編

卷之九

九月



明治二年十月廿五日
明治四年八月一日印刷
「通類編」第四卷九月號

秋のお仕度は

お早く、お手軽に

便利に、お買物の調ふ...

高島屋で

◆地方よりの御注文は通信販賣部へ...



高島屋

大阪・長堀橋

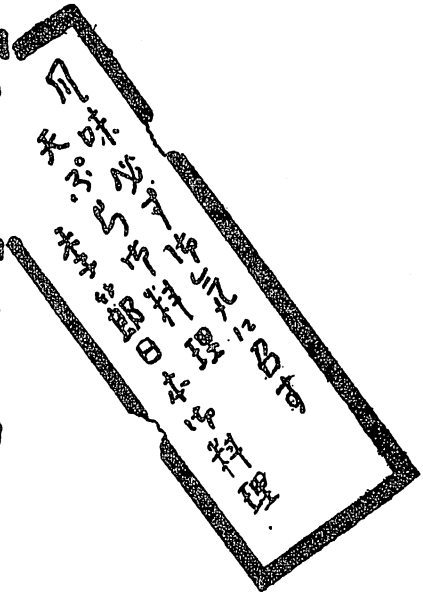


御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



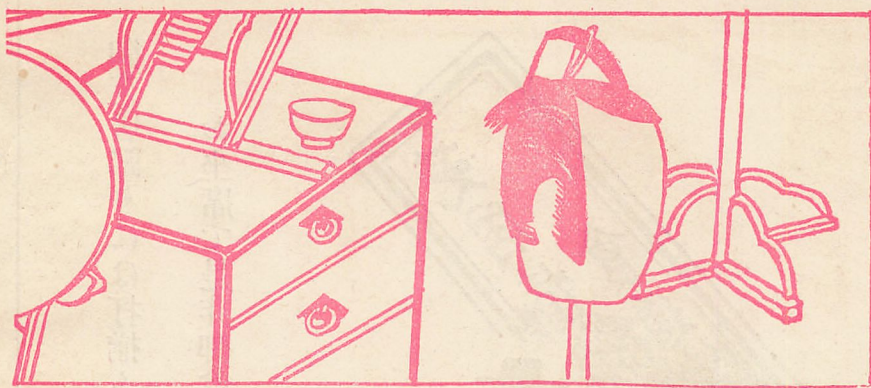
吉屋食堂



道頓堀戎げし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドンブリ橋



道頓堀

昭和四年九月號

第三十六輯

◆表紙(和田合戦女舞鶴).....大塚克三畫

口 繪

◆中座の大歌舞伎「うばたま草紙」中村魁車の河内山宗俊「我童の片岡直次郎、蝦十郎の依田彌右衛門」「浅茅ヶ宿」舅雀の妻宮木、長三郎の勝四郎、成太郎のお郷、升藏の雀部會次」「和田合戦女舞鶴」福助の板額、政次郎の藤澤四郎、我童の淺利與市、義直の市若丸」「壇の浦」蝦十郎の唐笠法橋、我童の息小藤次と平知盛、魁車の娘やどり木と二位尼◆浪花座の第一劇場「マツ」三好のトナミイ夫人、藤村のガンゾオ夫人、壽三郎のマツオオ、山口のゲムバ◆高田の阿呆、三好のトナミイ夫人、石河のチエオオ夫人、首實驗の場「痕」山口の蝙蝠の安藏、長二郎の切られ與三郎、石河のお富「林長二郎の切られ與三郎」「母」丘の上と朝子等の部屋の舞台面、石河の朝子、山口の大河澄男「横濱埠頭と大詰病室の舞台面、石河の朝子」「船」壽三郎の海賊颶風の源十郎、若月の女房お藤、高田の美濃屋清七◆角座の新聲劇「銀蛇番十郎」中田の銀蛇番十郎、辻野の隼亮三郎「中田の銀蛇番十郎、富士野のお緋紗、辻野の隼亮三郎、名越の佐分利玄之丞「伊川の綱打幸助、金剛の娘お里中田の番十郎、辻野の隼亮三郎、和歌浦の羽津吾◆モダーン姿の辨天座

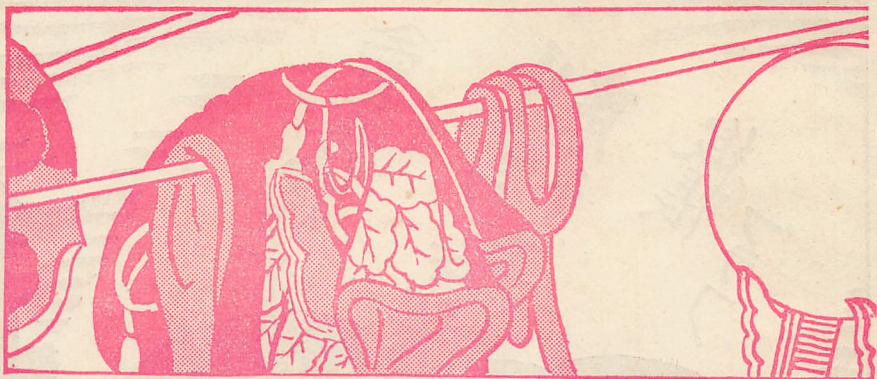
◆扉(マツ).....森 亶次郎畫

◆新装の辨天座.....福井福三郎(二)
◆外國人は歌舞伎劇を如何に觀るか.....林 久男(四)

浪 花 座

◆船.....(大西利夫作).....村田和緒(八)
◆母.....(鶴見祐輔作).....(八)
◆痕.....(村井富男作).....(九)

▽「マツ」の演出に就て.....野淵 昶(一六)
▽「船」について.....大西利夫(二〇)



▽壇の浦について……………高安月郊（一二）
 ▼秋のくせ……………食満南北（二三）

浪花座上演脚本

マツ……………田中總一郎（五〇）

中座上演脚本

浅茅ヶ宿……………食満南北（六一）

▽我童の口もと……………中井浩水（三七）

▽板額と舶來寺小屋……………高谷伸（三四）

▽板額の芝居……………森ほのほ（三八）

中座……………森英昭（二六）

◇壇の浦……………（高安月郊作）

◇和田合戦女舞鶴……………（三〇）

◇うばたま草紙……………（二六）

◆僕のペエヂ……………田中總一郎（三二）

▽『切られの與三』と長二郎……………樋口二葉（四〇）

▽時計直しの英ちゃん……………新谷誠太郎（四二）

▽山口俊雄を見る……………岡島眞藏（四四）

▽大衆に呼びかける……………京谷三八（四五）

▽自己を語る……………坂東壽三郎（二五）

▽劇壇その日……………（四八）

▽右團次等の東海道四ッ谷怪談……………（五一）

□編輯後記……………松本泰三（六六）

□挿繪カッタ……………大塚克三

留旗仁勝旗

劇坊草織

殺帳
フミ

梅原商店

神戸市

楠社西門

番 五 一 六 一 町 元

電話



お芝居の幕間と

お歸りにはお揃で

食慾をそゝる新秋のお献立が

お待ち申してゐます



梅園

お芝居でのお食堂にて……

お歸りには白鷹にて一寸一ぷく江戸すしを……

中座食堂

本店 太左衛門橋北一丁
電話 南六二二七番

お芝居の
あいまには
高尚で趣味深い
寫眞のお道樂が
いッちよろしい！

寫眞機は

リリーカメラ
パールカメラ
アイデアカメラ
パーレットカメラ

(カタログ進早)

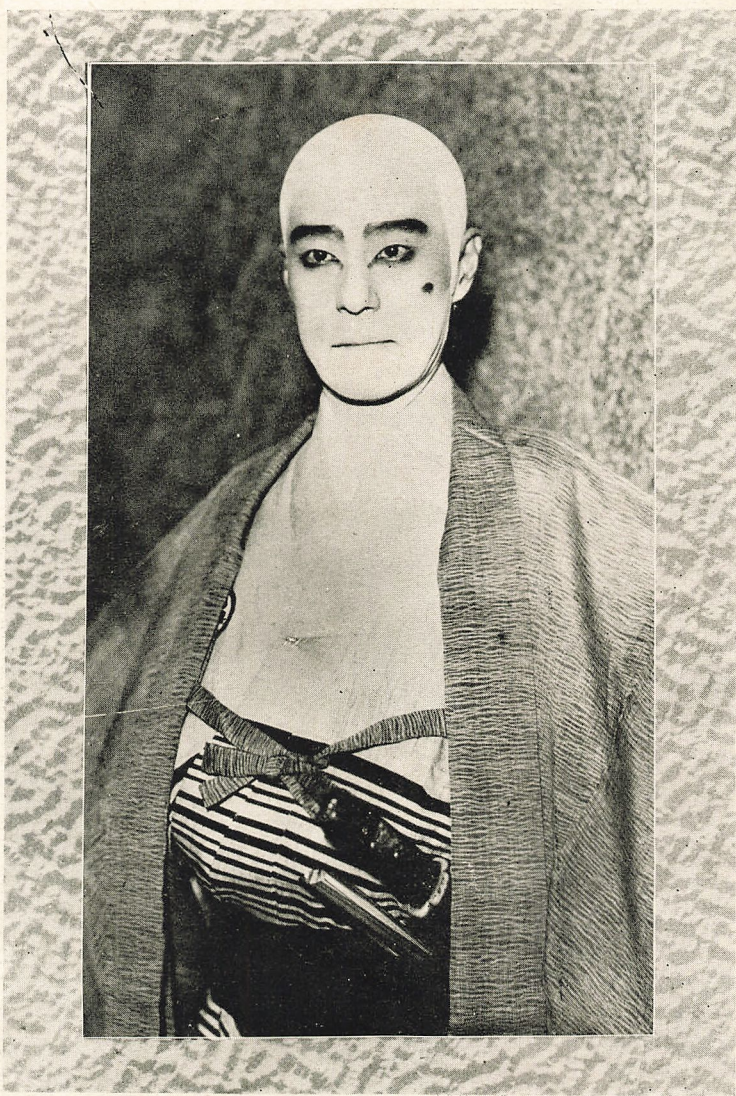


大阪市南區長堀橋筋一丁目

小西六大阪支店

本店

電話 南 (三二六九三番)
東京 本町二丁目



中座九月興行

二番目「紙草またばう」三幕

河内山宗俊……………中村魁車



中座九月興行

二番目「うばたま草紙」三幕

(下) 片岡直次郎……片岡我童
(上) 依田彌右衛門宅の舞臺面

右 彌右衛門……市川殿十郎
左 直次郎……片岡我童

ルースベルト

ルースベルト號
ハ當今タクシー
用ニ最モ適當ナ
車デアリマス

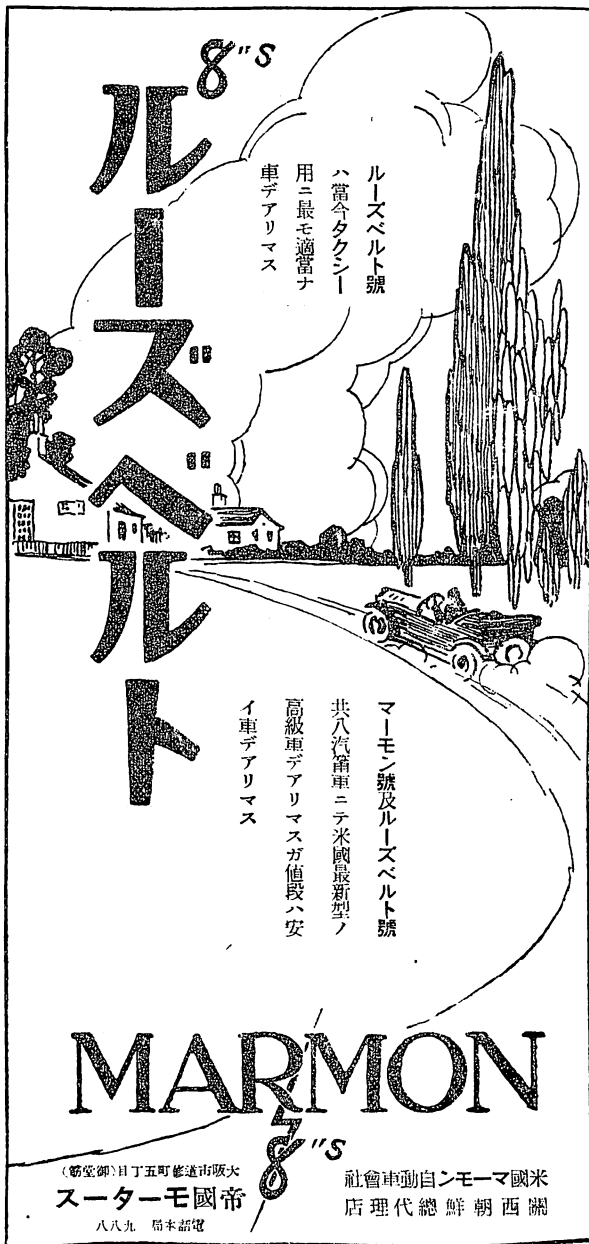
マーモン號及ルースベルト號
共ハ汽桶車ニテ米國最新型ノ
高級車デアリマスガ値段ハ安
イ車デアリマス

MARMON

（勤室御）目丁五町修達市阪大
スターモ國帝

八八九 局末話電

社會車動自ンモマ國米
店理代總鮮朝西關



營業科目

公社債引受募集
公社債賣買
手形金融
保護預り及運用預り

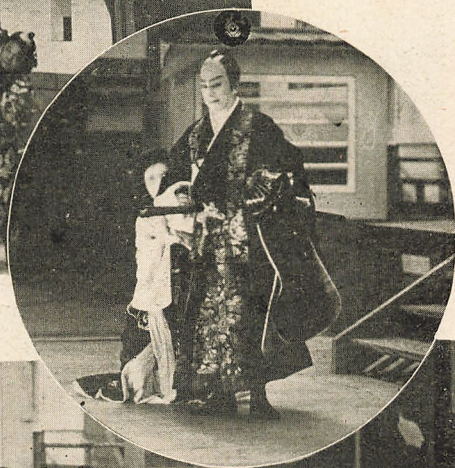
安土町二丁目

大阪東區

野村證券株式會社

電話本町一五九〇至一五九四 • 振替大阪一七四八

東京 京都 神戶 名古屋 岡山 福岡 金澤 廣島 紐約
出張所

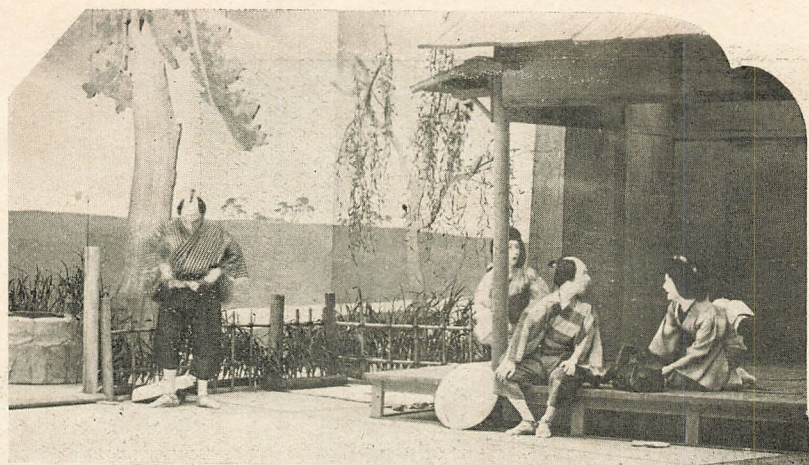


幕二「鶴舞女戦合田和」幕中 行興月九座中

郎四澤藤の郎治政 女額板の助福……場のり破門……(上)

遠藏市與利浅の童我……………館の公尼倉鎌……(中)

女額板の助福 丸若市の直義……場の腹切丸若市……(下)



中座九月興行

新舞踊「浅茅が宿」三場

(上) 第一場 右より 屈雀の妻宮木 長三郎の勝四郎
成太郎のお郷 升藏の雀部の曾次

(中) 第二場 真間の勝四郎……長三郎
妻宮木の亡霊……屈雀

(下) 真間の勝四郎……林 長三郎

寝る前の服

くや月

流経専門剤

朝の満足



◇最も信頼ある

流経薬中の權威◇

(本劑の實行と信頼は忽ち大評判となる)

閉止五六ヶ月以内にありては僅かの服用にて害なく安全迅速に平常の月經時の如く見事に流経の目的を達する効力を有す

- 他薬で少しも効なく煩悶せる方は最後の手當に
- これから初て薬を用ひ度き方は失敗せぬ其前に
- スグ來談あれ又遠方の方は本舗へお手紙で申込んで下さい詳しく知らす
- 代引小包は送料切手三十錢封入して下さい送る

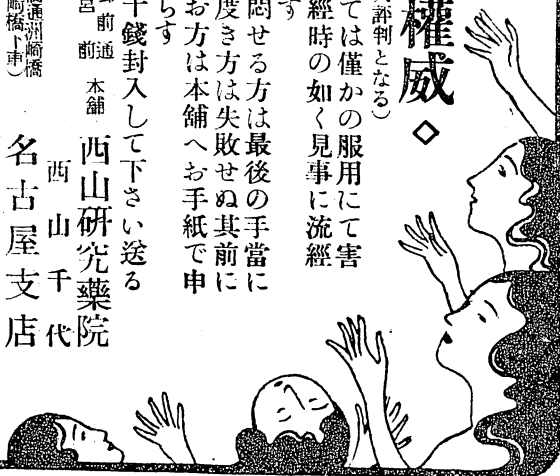
京都市上京區御前通 本舗 西山研究藥院

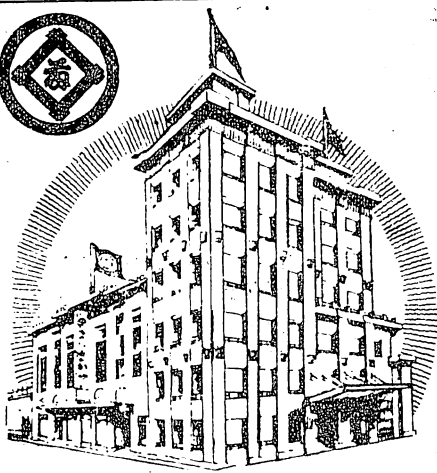
名古屋市中區洲崎通洲崎橋 東二丁目南入 (市電洲崎橋下車)

福岡市大名町 (市停演人局隣隣)

西山千代
名古屋支店
福岡支店

◇悩める幾多の婦 暗黒より光明へ◇
女はスグ試みて





品質精選

百貨の充實

より御便利

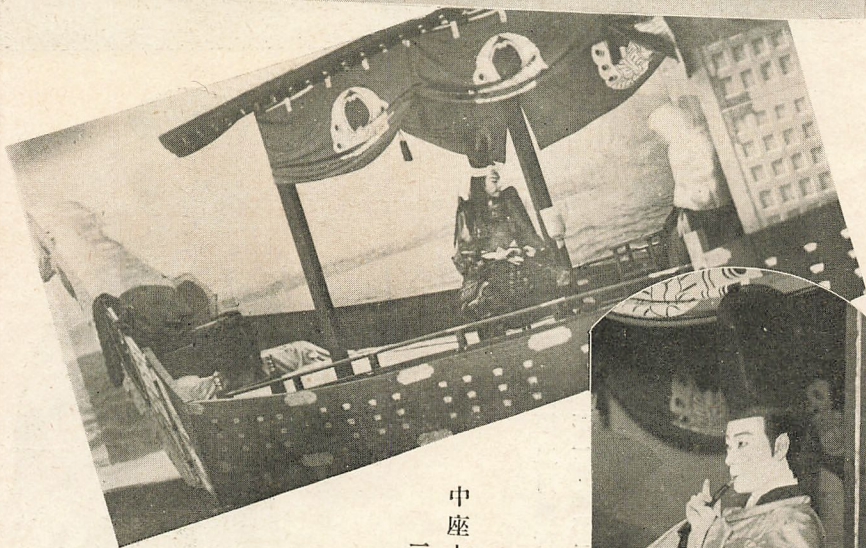
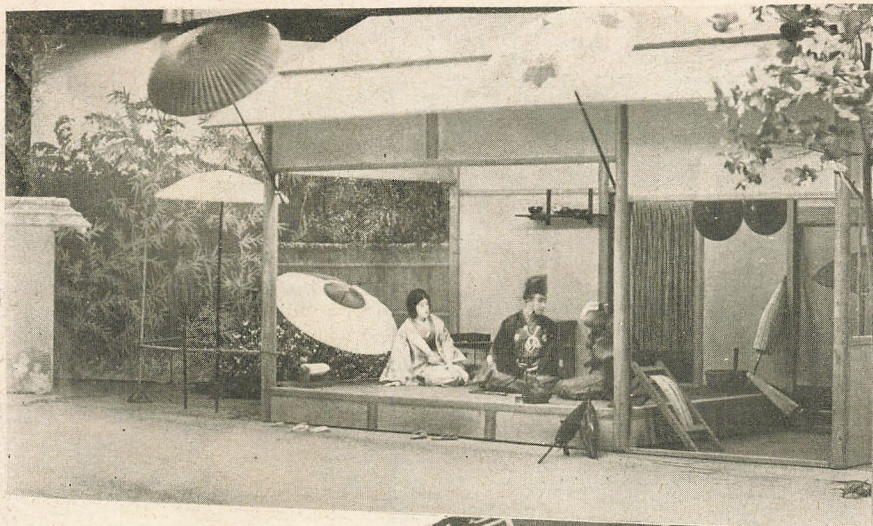
よりお安く

奉仕第一

日本橋

松坂屋

大阪



中座九月興行

一番目「壇の浦」二幕

(上) 唐笠法橋住居の場

右より 唐笠法橋……殿十郎

息小藤次……我童

娘やどり木……魁車

(中) 御座船

二位尼……魁車

平知盛……我童

雀扇……盛有平



坂東壽三郎の

マツオオ

浪花座九月興行

第一劇場第二回開演

(上)「マツ」 右より

トナミイ夫人……三好榮子
 ガンゾオ……藤村秀夫
 マツオオ……坂東壽三郎
 ゲムバ……山口俊雄

温泉料理

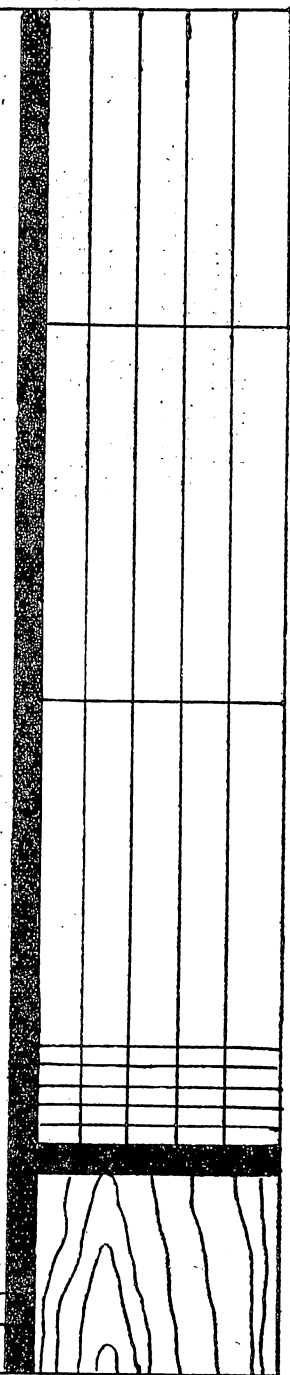
大正昭和

南

一

電話南

七七一〇一
五二九一
番





醬油

賣出

賣出方法

一、賣出數

① 醬油 九升樽詰 壹萬樽
ニリットル樽詰 壹千箱

一、賣出期間

昭和四年九月中 (但シ期間中ト雖賣出豫定數ニ達シタル場合ハ締切可仕候)

景品

一、① 醬油九升樽詰 樽毎に漏れなく

アサヒビール特製大壺貳本宛進呈

一、② 醬油ニリットル樽詰一本毎に漏

れなく京都牡丹堂製品二重ガーゼハ

ンカチ布貳枚宛進呈

日本九天醬油株式會社

大阪市東區高麗橋詰町

發賣元 柿浦佐一郎

電話東 (二五六一)
四八三二





浪花座の第一劇場第二回開演

(上) 「マツ」の舞臺面

マツオオ首實檢のところ

(下) 「マツ」の舞臺面

右 トナミイ夫人……三好榮子
中 阿 杲……高田 亘
チエヨオ夫人……石河 薫



浪花座の第一劇場第二回開演

第四「痕」二幕

(上) 第二場・戸田川原

蝙蝠の安藏…山口俊雄

切られ與三郎…林長二郎

お富…石河 薫

(下) 第一場・品川旅人宿上総屋

お富…石河 薫

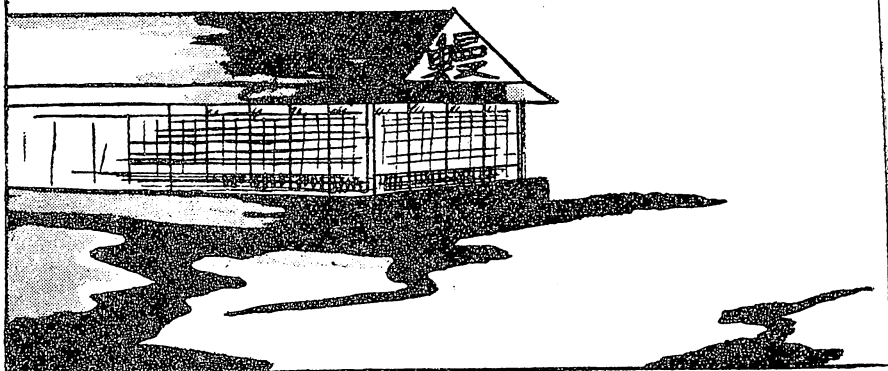
切られ與三郎…林長二郎

大阪名物
船生州



電話南

四八二〇
九五一〇
四八四四



好評 御化粧用 好評

目立って賣れ出す

スキナ

あぶら取り紙

散歩にいやなあぶら
お忘れあるな

各地の化粧品店石鹸
店に於て販賣いたし
て居ります。
尚道頓堀の各座の賣
店にても常備いたし
て居ります。

お買求めの
際はスキナ
と御指定を
乞ふ。

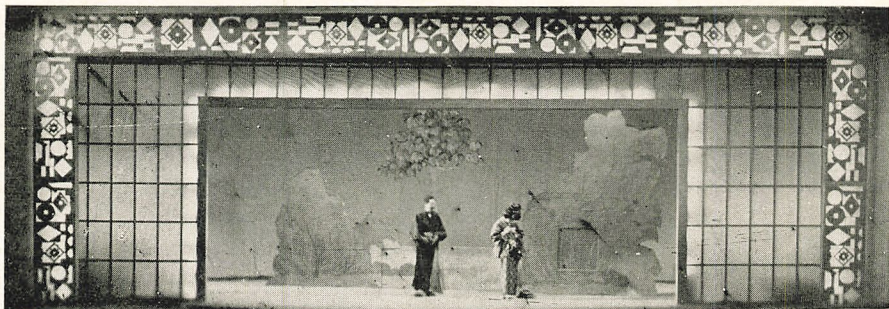
大阪
スキナ屋
謹製



浪花座第一劇場第三回開演

第四「痕」二幕

切られ與三郎……林長二郎



浪花座第一劇一場第二回公演

第二幕七十二場「母」

上……第一幕第一場 丘の上の舞臺面

下……第二幕第二場 朝達子の部屋舞臺面

中……石河薫の子・山口俊雄・大河澄男



LE COURANT DE AUTOMNE

秋が來ました、初秋が—
涼しい風にのせられて
暑い街中そつと抜け
まづ眞先に三越へ—。

×

出揃ひました品々の
色とり／＼に麗しく
こゝにかしこに山のやう
秋のお仕度、三越へ—。

新 涼

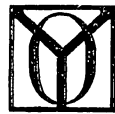
三越



◆ 阪 大 ◆

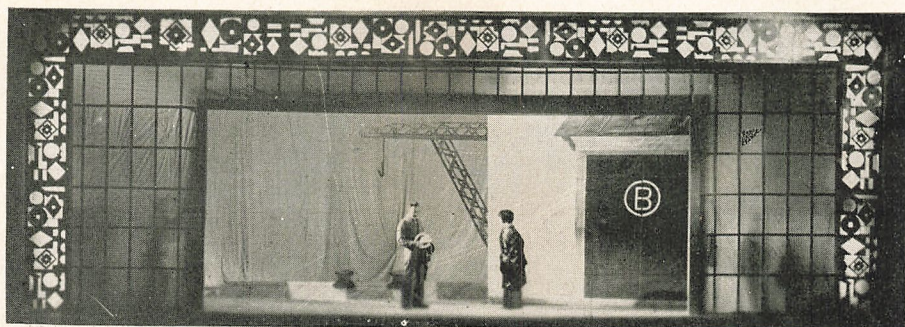
照明機械器具製作
特別電氣工事請負
電飾點滅設計出願建設

トキキ工事専門



岡本電機工業所

大阪市天王寺區生玉町三番地
電話 南 三六九貳番



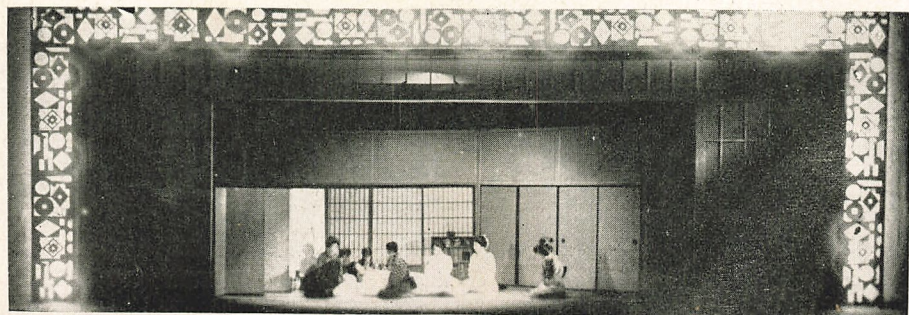
浪花座第一劇二場回開演

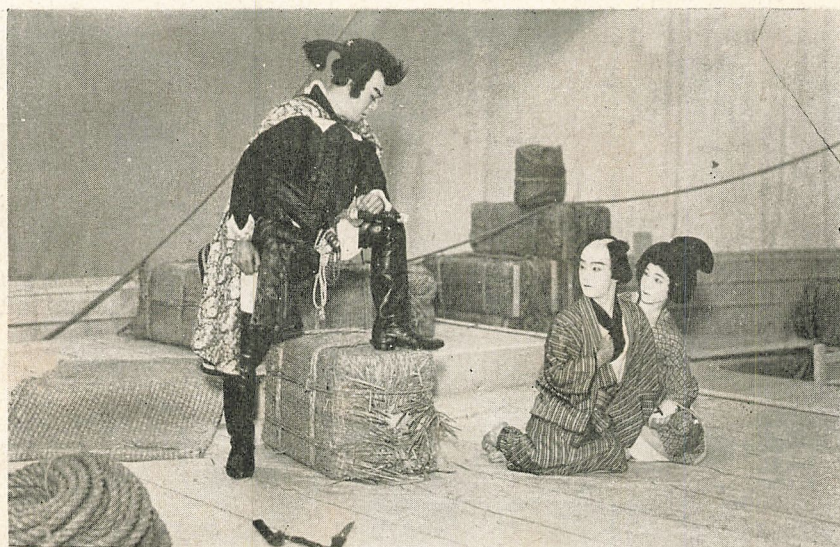
第二幕「母」三幕七十二場

横濱埠頭舞臺面 場四第幕三第……(上)

病室の舞臺面 場八第幕三第……(下)

石河の薫朝子 場大詰朝子臨終の場……(中)





浪花座の第一劇場第二回開演
第一「船」 一幕

(上)……………壽三郎の海賊頭颯風の源十郎
高田亘の美濃屋清七
若月孔雀の女房お藤

郎三壽東坂……………郎十源の風颯頭賊海(下)
雀孔月若……………藤お房女



大 阪 一 番 大 火 災 後 分 情 結 凡 味 割 烹 店

名 代 の 御 料 理 電 氣 旅 館

天 王 寺 公 園

電 氣 式 自 三 三 四 番 五 二 三 七 番

便所の防臭に困る方は今直ぐ

製創氏郎太彪林 士學藥



(錢拾五金小瓶一定價)
(間壹金大)



△使用法

一回十滴乃至十數滴づゝ(場所により多少の加減を要す)一回多量に撒布するは却て効力を減ずる事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

到る處の藥店

各百貨店に販賣す

使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

「アポロ」ハ一つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かすことがありません、にのまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒ではありません。

「アポロ」ハ他の藥(カンアラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など)と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所に「アポロ」の臭ひが残らぬ爲め汲取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かです。から經濟にもなります。

家庭必備品

元 賣 發

番五一一三三局本話電
番七一一三三阪大替振

會 商 榮 光

區東市阪大
目丁町見伏



言狂得見目お劇聲新行興月九座角

場八幕六「**郎十番蛇銀**」

場の藪裏郎井酒場二第幕二第

造 正 田 中…………郎十番蛇銀

一 良 野 辻…………郎三亮隼



角座九月興行新聲劇お目見得狂言

「銀蛇番十郎」六幕八場

(上) 二五幕目駒木根大内記郎の場

駒木根大内記郎……中田 正造

(實は銀蛇番十郎)

女房紅蜘蛛お緋紗……富士野 葛枝

(下) 二幕目 佐分利玄之丞の邸

隼亮 三郎……辻野 良一

佐分利玄之丞……名越仙左衛門

銀蛇番十郎……中田 正造



目 科 業 營

劇場照明配線工事設計
 火力水力電氣工事設計
 架空索道工事設計
 鋼索鐵道化工事設計
 地方鐵道電氣工事設計
 都市電燈配線化工事設計
 發電所變電所機械材料販賣
 電氣鐵道機車材料販賣

バグナル株式會社

大阪市北區天神橋筋六丁目
 (新京阪ビルヂング)

電話區堀川局 35

自〇二三一
 至〇二三八
 〇四四〇番

歐米文房具
事務用品
製圖機械並附屬品
輪轉謄寫機
生々堂謄寫版
各種萬年ペン
諸印刷

黑田生々堂

大阪市南區心齋橋順慶町北入

電話 船場 (四一三六番)
振替 大阪六八七九一番

今秋映画壇の尖端を占む松竹独占文藝映画

林 長二郎主演
菊池 寛原作
冬島泰三監督

時勢は移る

月形龍之介主演
額田六福原作
小石榮一監督

白野辨十郎

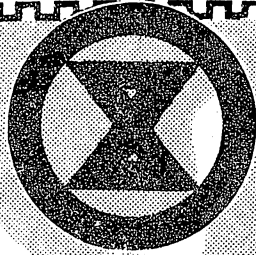
岩田 祐吉 主演
栗島すみ子 監督
その他浦田オールスタースト撮影
野村 昶 脚本
小田 宗務 脚色

今年行

里貝 強原作



公開の日を待たれよ
松竹キネマ株式会社



貨百チタコ

うごそもでんはのものの供子

うろそもでんはのものの供子

橋 辭心 飯大

店服呉合十

角座九月興行新聲劇一派

「銀蛇番十郎」(六幕八場)

(上) 大話柳澤出羽守御金藏前

網打幸助……伊川
同娘お里金剛八郎

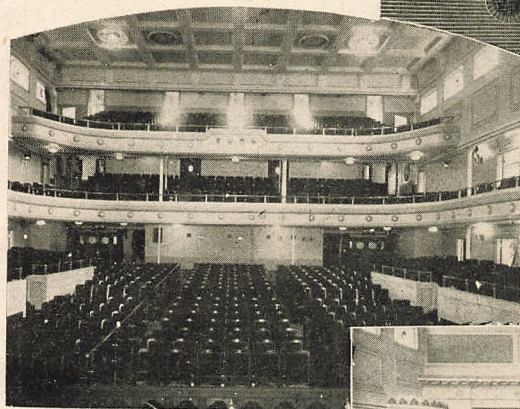
銀蛇番十郎……中田良正
隼亮三郎……辻野良一

(下) 三幕目の二料亭葉月の座敷

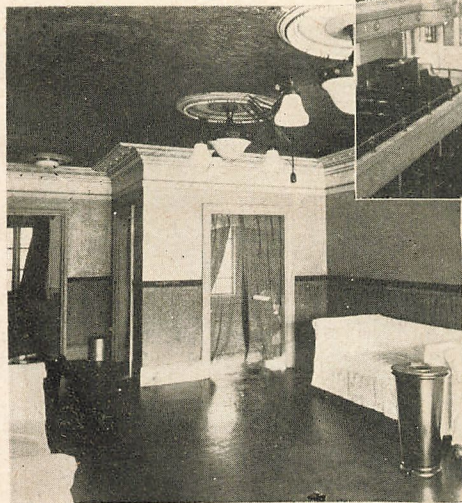
海賊隼亮三郎……辻野良一
藝者羽津音……和歌浦糸子



面全席覧観



部一の室憩休

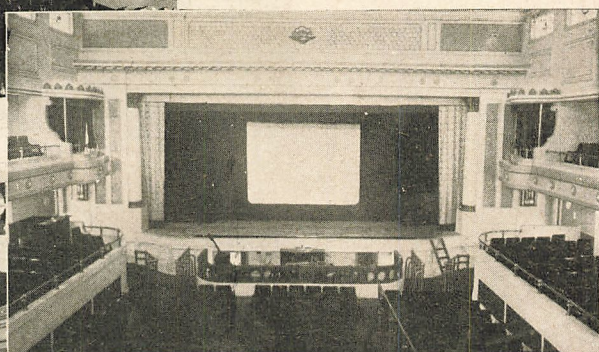


路通の關玄表 →



面正表

スクツボとソーリクス



大阪市東區農人橋二丁目十二番地

合 名
會 社

大 阪 橋 本 組

電 話 東

特 長

一 一 五 五 八 一 〇
二 六 五 五 五 番 番

支 店 東京市麴町區九ノ内二丁目六番地

電 話 九ノ内特長四七八〇・四七八一 番

支 店 小倉市大阪町十丁目（電話四三〇）

帝キネ超特近代劇

鈴木重吉監督新歸朝入社第一回作品

大阪日日新聞連載 桂田曉香原作

恋のダンス

牧 英勝・淺野 節 共演
高津慶子・八島京子

カメラ 塚越成治

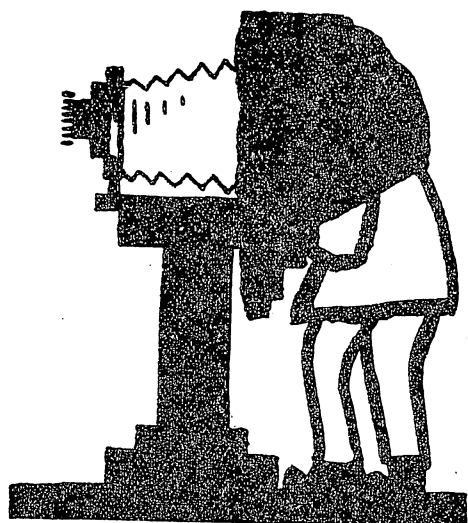
帝キネ提供



日比繁次郎作歌
小松平五郎作曲

恋のダンス

- 1 軽いフェルトさんさふんで見たらさんさふんで見たらあの人来たくツイ 踊り出す
- 2 誰にも云はない今夜の氣持 今夜の氣持 そらく笑顔だツイ 氣よいもの
- 3 風ふきや吹くまゝ 錦紗のたもとぞ 浮氣ぢやないわよツイ ひるがへる
- 4 くるりとおむけて あつち向いたお顔 可愛いやおめがツイ 涙ぐむ
- 5 機織直して さつこつちへおいで さつこつちへおいで 腕をかそうよツイ 夜はける



忍びよる爽涼!!

潑 瀨 の

お 姿 を !

優秀の技術と迅速が

當館の有つ定評です

只今の一葉は後の深き

印象を歡起する。ぜひ。

高津郵便局東

山崎寫眞館

電話南四二四四番



裂 小・具道小

貸衣裳

（其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい）
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます

素人演藝會
宴會の催物
春秋溫習會
婚禮の衣裳

松竹衣裳部

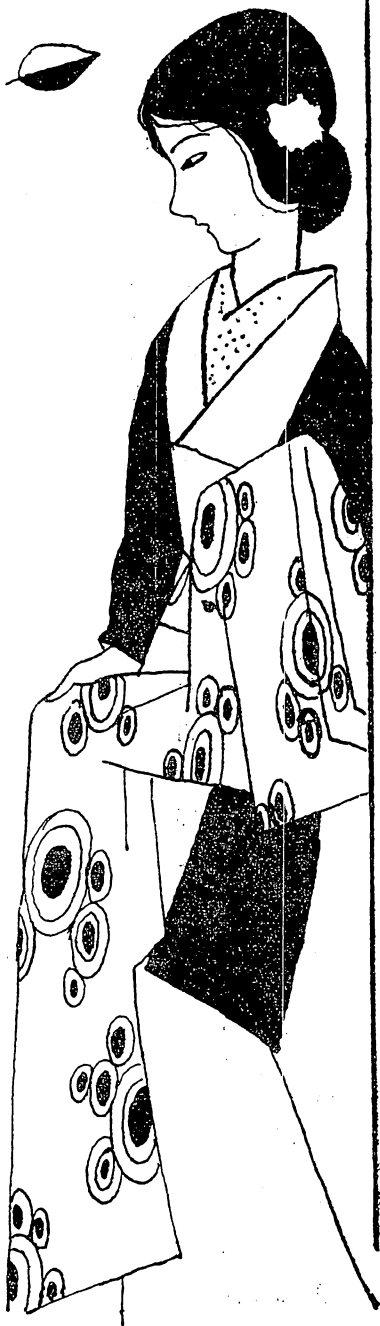
本店

大阪市南區久左衛門町八

電話 南一四七一八番

東京支店

東京市淺草區並木町十五
電話 淺草五五九九番



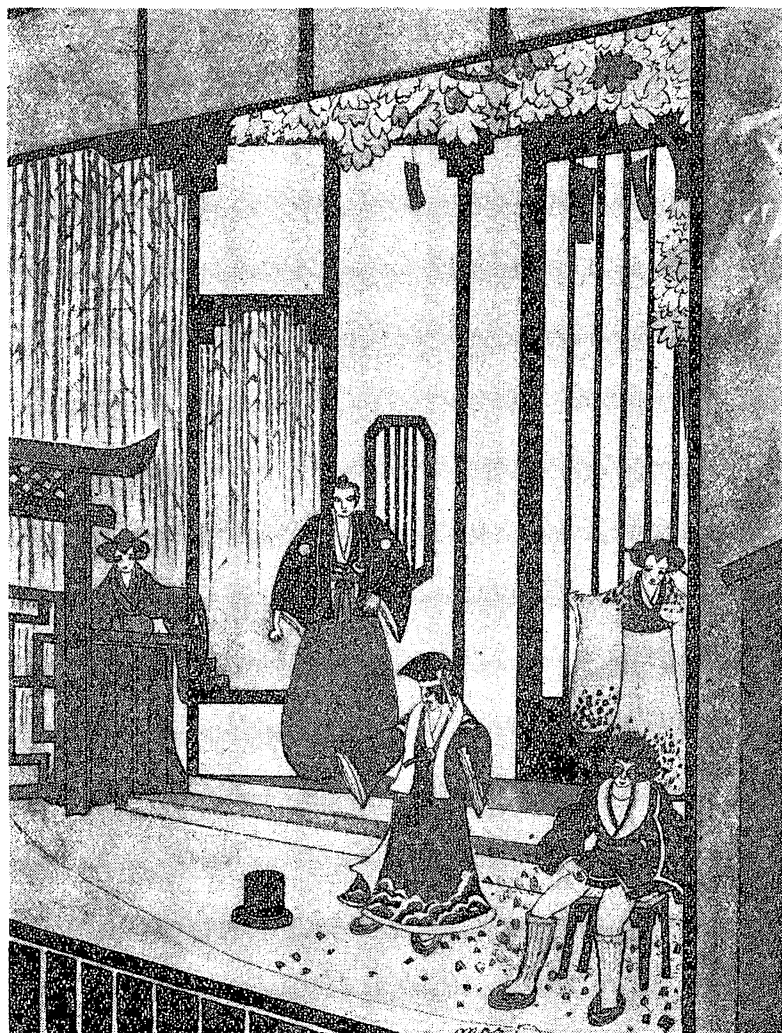
雜誌 · 演劇新報 · 月刊

九
月
號

道 類 稿

第
四
年

第 三 十 六 輯



新装の辨天座

常務取締役

福井福三郎

愈々辨天座も、約二ヶ月間の改築工程を経て、外観の美、内部の善に、萬善を期して、八月三十一日より、華々しく東道頓堀の一偉觀として、其の雄姿を現はす事になりました。

外観正面は破風作りに、竹田の芝居の面影を残し、下部は特別製のタイルを張り詰め、嫌味のない和洋折衷と致しました。

内部は全部洋風で、玄關處は輝くばかりの大理石に眼をうばひ床及階段には研究の結果、劇場として、日本最初の防音装置にゴムマットを、ほどこしました。

内部客席は、一階二階三階共に、椅子席に新装、新調の一人掛四人並びを用ひました。

殊に内部の裝飾には充分なる意を用ひ、モダンな鮮明柔い色調に苦心の跡を残し、二階左右、三階の休憩室は共に入念なる製作の家具調度を整へ、劇場最初の試みとして飲料水を随時提供の設備なども設置致しました。

向、場内の換氣は、數分間に、完全に空氣を一新出来る中島式マルチダレンド・ファンを装置し、扇風機は最新式ローテア・ファンに夏向寒き冷風を送り、冬は米國製アイデアル煖房（温水温風装置）に六十四尺より成る大煙突を使用して地下室よりボイラを焚き烈風の日も春暖の居心地を以つて御觀覽出来得る等の装置をほどこしました。

左右の境界は全部防火壁にして安全第一を期し、化粧室及び便所は階下左右と二階東側に新設し水槽浄化の装置を致しました。東洋一を誇る映寫室は、新興トーキーの時勢に伴ひ、米國製シネ・ホン映寫器を四臺設置し聲と映畫との調整の完全を期する爲に、特に映寫室内に調整室を設けるなど、トーキー常設館として眞に申分のないものに致しました。

みなさまの辨天座として尙一層氣持よく御觀覽して頂ける爲に、サービスに、スマートな洋服姿も感じ好き少女を採用して接客係としての禮儀作法を特別に教育致しました。

歐米映畫の封切を中心として、演劇、舞踊、音樂、レビュー等の素晴らしき陣容のもとに、特に大衆的な事を眼目として、料金の低廉を計り、あくまでも、みなさまがたの辨天座を標語下に營業政策を致して行く所存で御座ります。

此の如き計畫の實現の完全に得ました事は、偏に皆様御援助と御指導を俟つものが多いので御座ります。賢明なる御批評を御漏し願へれば甚だ幸ひで御座ります。終に臨みまして、酷暑の折柄、専心誠意此工事に携つて頂きました建築家諸賢の勞を感謝致します。



モトマダ 姿に變つた辨天座

外國人は歌舞伎劇を如何に觀るか

林 久 男

極めて少數の例外を除いては、我邦固有の歌舞伎劇の本質とか眞の旨味といふものは未だ外國人の多數には全く知られてゐないと云つていゝ。勿論、永く日本にゐて屢々歌舞伎劇を見たり、又外國にゐ乍らも特にその方面を深く研究して居る外人達には、次第に歌舞伎劇の本領といふものが知られつゝあることは事實である。が、それとても、數から云つたらば、極めて少數に限られてゐる。

操人形とか淨瑠璃とか、一種獨特な出處や歴史をもつ我邦の歌舞伎劇が外國の演劇とは本來異つた特質をもつてゐることは言ふまでもない。淨瑠璃といふ地語りを主としてゐる歌舞伎劇の臺本は、外國人の頭に描いてゐる狹義の『戯曲』といふ範疇に篋めるには餘りかけ離れた特徴をもつてゐるのである。希臘の運命悲劇や、それに倣つたシルレルの悲劇などには、所謂『コーラス』といふものが織りこまれてゐるが、それとても嚴密な意味に於ては、我が歌舞伎劇の地語りと其の本來の使命を異にしてゐる。従つて、外國人の多くは、我邦の歌舞伎劇の

丸本を、嚴密な意味の戯曲の中へ入れずに、メロドラマの一種と見なして居る程である。或は愁嘆が主となつて居るものが多いので、これに愁嘆曲の名を冠して居るものもある有様である。

そのむかしピエル・ロタイなどの見聞記にも、チヨボとか下座とかと妙な處から妙な聲を發して來るとか、花道といふ異様な外舞臺が走つてゐるといふやうな點が、事珍しく書いてある單に狹義の演劇とか戯曲とかいふものを考へてゐる外國人にとつては、我が歌舞伎劇が可なり異様な特徴をもてるものとして見えることは否みがたい。

◇

自分はこれまで外國人と一所に歌舞伎劇を見た場合も少ないが、其の時々彼等が發する質問や感想が、自分にとつてはいつも頗る興味あるものである。我が歌舞伎劇が外國人の眼に如何に映ずるものかといふことを、可なり穿つた程度にそれ

が示してくれるのである。

いつぞや獨逸の若い理學博士と、南座に吉右衛門の『石切梶原』を見たことがあつた。その時の質問や感想は如何にも獨逸の學者の面目を躍如たらしめてゐたが、又以つて斯ういふ種類の芝居が外國人の眼にはどう映るものかといふことをよく現はしてゐた。曰く、青具師の六郎太夫は此時何の爲に娘と一緒に連れて來るのか曰く、二つ胴の試し斬りをする以上は、二人を斬りとほさなければ其の目的を達しないではないか。曰く、六郎太夫が死を決する其の動機づけが薄弱である。曰く、梶原自身が其の名刀の斬れ味を信じてゐるならば、何の爲に、大庭と俣野が歸つてしまつたあとで、石の手洗鉢など試して見る必要があらうか。曰く、結局、とやかうして、梶原自身が其の刀を横取りした事になるが、名將として如何か。

等々、なか／＼獨逸人らしい穿つたことも云つて居るが、併し、其の石の手洗鉢が、よし一刀のもとに二つに斬れたとしても、左右兩片があんなにバツと開くのは非科學的であると不思議がつてゐたのには、思はず失笑せざるを得なかつた。吉右衛門の至藝もさう見られては散々である。

其日の中幕、三津五郎と時藏の『連獅子』は大分此先生には目新しいもので大に御意になつたか、頻りに讃嘆の聲をもらしてゐた。やがて二番目物の『隅田川續 倭』、即ち『法界坊』を見てしまふと、その若き博士は首を横に振りながら、

『ナイン、ウンドラマーティツシュー』（いかん、非戲曲的だ）と繰りかへしてゐた。そして、前半に於て破戒無慙な法界坊が

後半に於てあんなに執着的に怨念深いのは、全く性格の不一致であると云つて責めてゐるのであつた。唯だ、あの惡僧に扮した吉右衛門が、大喜利に於て野分姫の亡靈となつて、米吉のおくみと共に手ぶり巧みに踊つてゐた其の器用さを賞めちぎつてゐた。

併し此の博士などは、まだ餘り歌舞伎劇といふものを見て居ないにせよ、流石に日本の古美術を愛し、能樂をもちつと觀る根氣がある程あつて、外國人としては、まだ解かりのいゝ方である。同じ大庭の兄弟でありながら、弟の俣野はなぜあんな眞つ赤に顔を塗つて居るのかなんといふ愚問は流石に發しなかつた。

一體、外國人でも、能樂をちつと觀てゐるだけの修養がつむやうになると、歌舞伎劇の理解も可なり出來て來て居るのが普通である。瑞西から來て居るF嬢などは、まだ滞在二年半位にしかならないが、流石に其の方面の專攻だけあつて、能樂や、歌舞伎劇や、新しい日本の芝居に對しても、可なり深い理解をもつて居る。寧ろ日本在來の、揚足取り風な、こちれた、或はベダンティック一方な劇評家などよりは、純な氣持ちで、劇の本質に鋭い視線をむけてゐる點などは、なか／＼に興味がある。併し二三年前、獨逸から來た婦人記者が、僅か一年足らず日本各地を巡覽して、その印象記を立派な本に書きあけた中に歌舞伎見物の一章があるが、これは餘りに盲蛇に怖ぢず的の妄評なのは寧ろ驚かざるを得なかつた。けれど一方から云へばこれ等が又、普通外國人殊に所謂觀光團などの歐舞伎劇に對す

る見かたの平均を示して居るものと見れば、大に参考にならないことも無い。

或時、アメリカから來た夫婦の人と英國から來た令嬢と共に文樂の操人形を見たことがあるが、初めは彼等は唯だ異様の眼を見はるばかりであつた。『重の井』の子別れの場を見て、どうしてあの母親はあの子を抱きしめてあんなに接吻するのか、と云ふ奇問を發せられた時には、思はず噴き出したくなつた。と同時に、異國の者に理解されることの如何に至難なものであるかといふことを痛感せざるを得なかつた。それでも、あれは母子の接吻ではない、素性をつむ母親が今別れてゆく我が實の子に對する悲しい涙を濺いでゐるのであるといふことから、その大體の筋を説明してやると、三人の異邦人は一齋に案を打つて、

『アイ、アンダースタンド』（解かりました）

を繰りかへしてゐた。外國人の歌舞伎理解も、中々前途遼遠である。それでも、見た目で直に解かり易い所作事などは、外國人に對して意外の興味を與へるものと思はれる。

◇

『寺小屋』や『朝顔日記』などが獨逸語に譯されてあちらに紹介されたのは、もう二十何年にもなるが、全曲の覗ひ所が果してどれだけ彼地の人に理解されたかは疑問である。『寺小屋』の首實檢の場で、源藏と松王とが詰めよるクライマックスたる。『何の、これしきに性根どころか、今淨玻璃の鏡にかけ。鐵札か。金札か。地獄。極樂の境。』

といふ大切なセリフも、唯だ兩者が『アツハ』『アツハ』と嘆息を洩らすだけのことになつてゐる。佛教などの背景の無い國語に移すことが如何に六ヶしいことであるかといふことも解かる從つてそれ等の翻譯をとほして見る外國人の歌舞伎劇といふものも、原作の含む内容や味はひが如何に歪められ、すり減らされて居るか、と云ふことも考へて見なくてはならない。

今度『第一劇場』の九月興行の一番目に据ゑられた『マツ』なども、これに注意して觀るによつて、アメリカの作家が我が『菅原傳授』のあの場面の持つ藝術的内容や氛圍氣を、どの程度まで理解してゐたといふことが略々窺はれ得るわけである。

◇

いづぞや自分は獨逸で斯ういふ奇問をうけたことがあつた。

『日本にはマダム・サダヤツコのやうな名優は幾人居ますか。』

この質問は即答に當惑するほどに餘りに奇抜なので、段々わけを聞いて見ると、そのむかし川上一座が第二回目の渡歐の際非常に御難の揚句、獨逸の某舞臺で演じたサダヤツコの、飢餓で倒れるしぐさが其の眞に迫つてゐたことは、歐羅巴の一流の女優達も到底及ばないほどであつたといふのである。豈圖らんや、御當人は數日の絶食の後、ほんとうに舞臺に倒れたのであつたといふことであつた眞に迫つた筈、眞その物だつた。

兎に角、外國人の日本の劇や俳優に對する知識の一斑はこれを以ても知ることが出来る。勿論、最近では、日本の新舊劇のテキストの翻譯により、又は其他の道によつて、段々と日本の劇

に對する知識も普及されては居り、又日本の劇に對する興味や好奇心もそゝられつゝはある。

併し、先般左團次一座がロシアに於て演じた『忠臣蔵』其他の劇が、種々の條件に支配されたとは云へ）如何に原作を離れ歪められ、切りつがれて居たかといふことを考へても、我が歌舞伎劇などの移植や紹介の如何に困難なものであるかといふことが推せられるのである。

けれど、『藝術の國際化』といふ自分の持論の立場からすれば如何にそれが差當り困難であらうとも、日本文化の進出の爲には、日本劇の紹介などは最も力を注がなくてはならない。

其點から云つても、先般ロシアへ行つた左團次一座が、色々こみ入つた事情はあつたであらうが、更に獨逸、佛蘭西、英吉利の方まで打つて廻ることが出来なかつたのは、くれぐれも残念であつた。

次に來る問題は、日本の固有の演劇を如何に外國人に觀すべきかといふことである。これに就いては、自分はこれ迄色々な機會に於て屢々自説を陳べて來ては居るが、要するに、先づ如何なる俳優達によつて如何なる芝居を持つていつて見せるかといふことが當面の問題である。勿論これを支持する興業家は、利害の外に、日本文化の進出といふ一の積極的の考を持たなくてはならない。先般の左團次の渡露は、此の意味に於て非常に

有意義なことではあつたが、それとても他の諸國には及ばなかつた。一體、他の歐米諸國に於ては、嚴密な意味に於て我が第一流（或は第二流）の俳優に於ては、眞の歌舞伎劇といふものが演出されたことは、これ迄一度も無かつた。それは勿論色々な條件によつて制せられてゐた梅幸や、鴈治郎などの渡歐が噲せられてからも、もう可なり久しいことである。自分の考としては、菊五郎、梅幸、猿之助、幸四郎などの踊のある俳優によつて、先づ所作事を紹介し、それから、最も歌舞伎劇の特色を示して居る、そして筋の通り易いものを簡潔なる形に於て漸次紹介すべきである。今から考へれば、澤田のやうな意氣ぐみのある。又融通のきく俳優を先乗りとして、先づ外國人の鑑賞眼を味つて、それから舊俳優によつて眞の歌舞伎劇を持つて行くのも、一の道であつた。

要するに、外國人が如何に我が歌舞伎劇を觀るかといふことの問題よりも、我が歌舞伎劇を如何に外國人に觀すべきかといふことが、重要な問題として攻究されて來なくてはならない。斯くてこそ初めてそれが我邦固有の藝術の泰西に對する文化的進出といふことに大切な意義を持つやうになつて來るのである

九月の浪花座

第一劇場見物

村田和緒

船

海上波靜かに、玲風を孕んで航行を樂しむの折、突如、颶風の如く走り寄つた怪船の襲撃に、船中の樂園は忽ち血煙地獄と化した。

海賊船！

海賊船！！

海賊船！！！！

怒號 悲鳴

阿鼻叫喚のあらゆる雑音も一刻の中に納まつて、船は元の靜けさに歸つた。

併し、船の主は海賊颶風の源十郎一味に變り、船客の總ては船底

母

(1) 晩春の午後——熱海。碧空と緑丘の中に印する一黒點。

大河澄男が寢そべつてゐる。

銀行家

微風を袂に孕ませて朝子が通る

近代的性格の一本氣な彼は、無

義を詫び乍ら愛を告白して求婚す

る。

彼女は無言の中に承諾する。

(2)

初夏の空が澄み切つて窓外のボ

ブラが燃へてゐる。

朝子は進の母となつた。

はち切れそうな幸福が、家中一杯に漲つてゐる。

(3)

或る待合に、數名の藝者を揚げ

て、友人等と共に騒いでゐる大河

澄男。

少からず澄男を思つてゐる藝者

の渚子。

渚子を憎からず思つてゐる澄男

。

固く握り合はせた手は戰いてゐる。

(4)

月子——澄男の妹である。

澄男と渚子との間に子供が出来

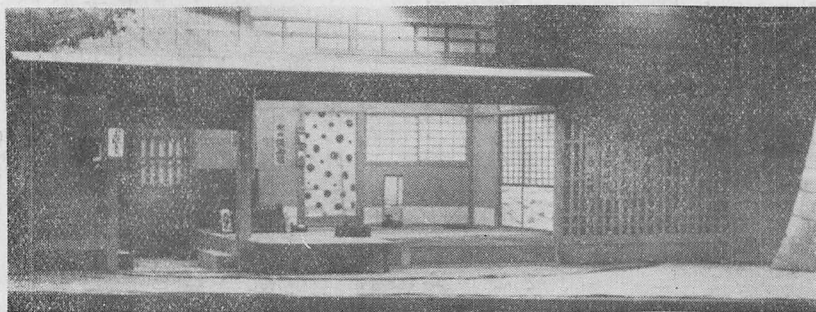
その子供を引取つて育てるべく、

澄男の意を齎す。

妻として鐵槌的衝動を興へられ

たのである。

幸福の一端が足許から崩壊し始



深く幽閉されてしまつたのである
斯くして船は完全に捕獲せられ
たのである。

此の大旋風の何一つだに知らぬ
げに、月は無情にも冷酷に益々澄
み切つて輝いてゐる。

——喃爺や、豊臣家が殲落して
そちの脊に負はれて城を出たのが
九ツの年、それから早二十餘年、
爺も随分年を取つたなア。

——豊家並に主家の怨みを晴ら
さんと和子連れて落ち延びたが
今から考へると一期の不覺でござ
いましたよ。

——ハハハ……途方もない旗上
げだつた。鳥も通はぬ海の上で、
物取りの旗頭ハハハ……

凡ての幸福と希望を大海に捨て
去つた淋しい追憶が兩雄に交され
る。が、生き残りの老將勘兵衛の
胸には、青年である源十郎の胸底
に宿る寂寞を察しないでもなかつ
た。折よく船客の中に一際勝れて
美しい女房のお藤、死んでも離れ

めたやうな氣がした朝子は、瞬間
地上のあらゆる有機物と共に、深
い暗闇の底に吸ひ込まれて行くや
うな氣がした。

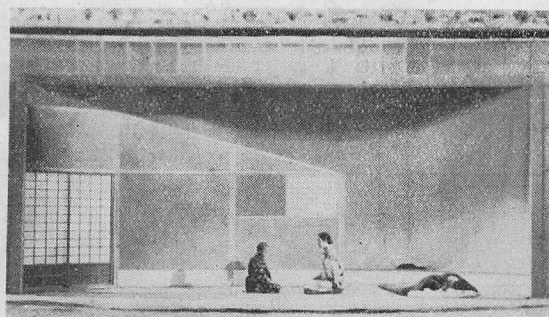
幼い進の叫
ぶ聲を幻の
如く聞き乍ら

(5)

降る雨に八
ツ手の葉が震
へてゐる。

長谷川女史
が朝子の病床
に訪ね來り、
涼子に出來た
子供を引取る
事に反對する

暴君は社會
に入れられないと同様に家庭にも
入れられないものだ。封建時代の
道徳で現代婦人を縛そうとする現
代男性を糾弾し、日本婦人の美德



を發揮した堅固な意志によつて、
進の次に出來た子供、春子と共に
獨立的にも母としての責任を全か
らしむべく力説する。

——人生は雨
の日ばかりでは
ありません。晴
れた日が又直ぐ
來ますからね……

……
寒れた朝子の
顔に一抹の輝き
が閃見へた。

(6)
昏い。木下一郎——
澄男の従兄弟で

——朝子さん、長谷川女史の言
ふやうに女が徒らに獨立して強く
なれと云ふのは不自然な考へです
御覽なさい萬物の一切は自然の機

痕

品川——旅人宿上總屋の主人で
いかさま博奕師の觀音久次に、傳
馬町の牢屋から引取られたお富は
その女房になつてゐた。

夜更く……
久次のいかさまを知つてゐる蟬
蝠の安藏、例の小便取りに店先に
寝そべつて、久次の歸りを待つて
ゐた。

お富の女房振りを押揃ひながら
が、お富の氣の利いた扱ひ十
包み金——に安藏は、久次に逢
ふのを又の日として、微笑を残し
て去つて行く。

宵の蒸し暑さが遂に俄雨となつ
た。
其の雨の中を、上總屋目掛けて
飛び込んで來たビシヨ濡れ姿の旅
人——途端に異様に見交すお富と
旅人の視線……

——興三郎さん。抱擁！感激！

まいとする亭主美濃屋清七とを、無理から離して連れて來させた。幼少より海賊として育てはぐま

れた源十郎の血は殺戮と掠奪、而して女を犯す事より知らなかつた彼は、直にお藤を我物にせんと、脅しても見た。すかしでも見た。が、彼女は頑強に拒絶した。愛してくる夫清七へ操を立て、身を八ツ裂きにされても貞操を固守すと源十郎の言葉を劬ねつけた。

——一思ひに殺して下さい、生命より大切な操がどんなものか見せてあげやうから。源十郎は、案外の氣持ちを抱いて清七を呼んだ。清七は懸命に助命を乞ふた。總てのものを投じても助かりたかつた命が惜しかつた。源十郎は毅然として、お藤の目前で清七を殺さうとする。女の心を、それ程迄に自分のものにしてゐる清七が憎まれた。又、命より操を大切にしているお藤の心に、命の安賣がどれ

息を續けてゐます。人間だけ自然に逆らつても駄目です。——澄男君が貴女を愛さなくなつた時に貴女が不幸になるのではない。貴女が澄男君を愛せなくなつた時に貴女は不幸になるんだ。貴女の胸の中にあする人のなくなつた時が貴女の一番不幸な時です。貴女は澄男君の妻だ。そして二人の子供の母だ。人として、女として生きて行く道を考へて下さい。

——判りました。私は進と春子だけの母ではなかつたのです。お坊ちやま育ちのあの人も私の子供でした。私は、私のローマンス時代に永久のお別れを告げて三人の母になりませう。

(7)

深更——澄男が歸つて來る。朝子は快活に、いさゝとして慈母の如く夫を迎へる。——濟まない、濟まなかつた。僕は夜遊びの歸りをそんな風にし

て迎へて呉れるお前の心に恥ぢる僕が悪かつた。——私、貴方が熱海の山で始めてお目にかゝつた時の貴方さへあつて下されば好いのよ。

抱擁——

(8)

財界の變動と銀行の取付。異常なる昂奮と打撃に澄男は遂に倒れた。

(9)

臨終——三人の子の母として、大きな、大きな試験が眼前に——朝子は息詰まるやうな重苦しい決心を憶へる。

(10)

子供を抱へて、朝子は或る侯爵家の女中になつてゐる。——令息清藤——特權階級の低賤子息特有の積累振りに憤慨した進は

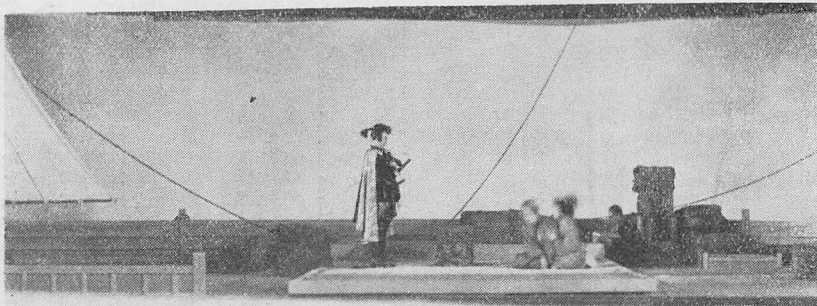
——お富!!——よく無事で歸つておくれたつたねへ。

——それもお前に逢ひて一心から、命を的に鳥を破つて逃て來たんだ。

——それぢやお前は、あの佐渡の金山を……偶然の再會、喜悅に輝く時の交錯。目明し、蛇の目の新吉は絶へず興三郎を追つてゐた。

久次が戻つて來た時、新吉から聞いた人相の男が消つてゐると番頭から聞き、しかもそれが、何時になくお富自らが二階へ案内したと知つた彼の眼は屹と二階を睨んでゐた。

興三郎の膝に縋つてゐるお富の美しい裸足と、歡歌する度毎に感ずる姿體の律動が、流れ來る三味の音とそぼ降る雨垂れの音とに隔んで、一幅の繪にも欲しいやうな情景が、二階の一室に描かれてゐる



妹の春子を救ふ爲め、清麿と争ひ池中に陥入れる。

(11) 朝子の部屋。
拾爛の電燈が一つ、淋しく光つてゐる。

召使なるが故に謝罪を強要せられた母は、進に、詫びに行くやう頼む。が、進は頑として應じない理を非に曲げて謝罪する屈辱に、進は飽くまで抗する。

朝子は、却て進の堅固な意志を賞め、自身の卑怯を恥ぢて早速暇を取る事にする。
そして戦ひの街頭へ、母子四人が戦ひの街頭へと――。

(12) 熱海へ歸りかけた彼等四人は、子供の教育の爲め、都會に止まるべく心を定める。

(13) 渚子の家である。

朝子が突如訪ね、澄男生前の禮と共に、形見分けを持つて來る。その美しい人情の眞心に、渚子は感泣する。
佛壇に祭られた新しき位牌、それには澄男の戒名が記されてあつた。

(14) 進の中等學校入學試験發表の日が來た。子を持つ親の誰もが憐む一つの大きな難關である。が、進は一番でパスする。加へて、熱海にある僅かばかりの土地が、好い値で賣れた。
久方振りに訪れた春に、三人の子供を引寄せた朝子は嬉し泣きに泣く。

(15) 長谷川女史が好伴侶となつて朝子は藥屋を開業した。

(16) 財界と人生は常に平坦な道を歩

る。
無論、お富の心は決つてゐる。與三郎戀しさの一念に、例へ身體は如何あらうとも、心の操を固く守つて、久次が引取人になつて呉れたを幸ひに傳馬町の地獄門を出して貰ひ、恥を忍んで生きて來たのだ。

與三郎とても同様、此の世の何處かにお富が居ると思へばこそ、生死の瀬戸際を危く乗り越へて探し求めてゐたのだ。それも、例へ三日が一日でも、夫婦となつて暮して行つたければこそである。
突如、乾分と共に刃の襖を造つて侵入して來た久次、――闇に交錯する雷光と劍光。

蝙蝠安が不意に躍り込んで與三郎に加勢する。遂に久次を殺した與三郎は、お富の手を曳いて新生涯の途へ――。
二ヶ月餘りは夢の如く過ぎ去つて、何時の間にもやらめつきり秋風が吹くやうになつた。

位恐ろしいものかを見せてやりたかつた。

清七は刃の下に平伏して頼に助命を乞ふ。お藤は清七と共に死を選ぶ。

——生くる爲なら尊い犠牲も拂はねばならぬ。

——では貴方は、生命が助かるならば私の操を破つても好いと云ふのですか。

——破れとは云わぬ、だが、私は死ぬのは嫌だ。死ぬ事だけは嫌だ。

妻の操より命を大切にする清七の言葉に、お藤は遂に源十郎の意に従ふ事を誓つた。そして改めて清七を殺して呉れと願つた。それは、生くる爲めに女の一番大切な貞操を賣られた返報に、清七の一番大切に思ふ生命を奪はうとした。清七は忽ち荒男の手によつて譯もなく殺される。清七が殺されるとお藤も直ぐ死を決した。

まない。薬價暴落と營業不振に、朝子の内政は苦境に陥つた。結果、飽く迄獨行を主眼とせる彼女が、店を抵當に銀行より一時融通を受ける事とした。

(17) 併し、約束の期限に返済なし得なくなつた朝子は、銀行家山路の招くがまま、單身銀行へ出掛け、返済期限の延期を乞ふ。

(18) 山路は大河澄男の親友と自稱してゐる。而して彼が持つ好色の爪は猫の爪の如く、うちらへ曲つてゐた。

山路の狡猾な口唇の隙に三ヶ月延期の承諾をさせた朝子は、敏捷に毒牙を逃れた。山路の口惜し氣な焦燥を後に。

(19) 木下一郎の書齋に、朝子と木

下。日本では婦人の一人立ちには逆も難かしい山路の如く如何な絹があるかを分りませんから、僕が今まで、貴女の獨立獨行の奇策をお志に感服して黙つて見て居りました。矢張り駄目です。貴女のやうな確り者でも、一人では保護者が要ります。朝子さんは御免下さいまし。

何處へおらつしやるのです宅へ歸ります。

石像の如く立ちつくす一郎の唇はギョツと歪められた。人知れぬ深い憤りを抱いて——。

(20) 悲境に苦しんでゐた朝子の藥種業は一大福音が齎された。歐洲戰亂の結果獨逸製品の暴騰に倒れかゝつた屋敷骨が再び持ち直す期が來たのである。

長谷川女史と朝子は狂喜して健

お富の、以前に變る世話女房振りも、武藏野を色彩の秋桔梗の中に埋もれてゐるとは云へ、二人の中は至つて幸福であつた。

併し、彼等の弱點を握れる安藏は、ダニのやうに執念深く喰ひついて惡事を薦めるのであつた。お富は極度にそれを憂へてゐた。現在の楽しい生活から離れたくなかつた。それが爲に彼一人を仕置場へ送るやうな事をしたくなかつた。——お富、俺ア思切。惡事はすつばり止める。て、二人はその誓ひを羽黒様に立てるのであつた。

——愛を裏切られた憎い男の返報は済みました。併し、如何に憎く其夫は夫です。一旦あの人のやつた私の操はもう取返しがつきません。憎いと云ふのも可愛い故、恨めしいと思ふもいとしい故です。

お藤はいきなり自害する。意外な急變に源十郎は茫然自失の態であるが、彼はお藤の言葉に眞の人間、眞の幸福を見出したやうに思つた。

——爺や、俺は今始めて眼があらいたよ。人の世の幸福は、他人の船に斬り込んだり、人を縛り上げて優越を感じたりしてゐるものではない力づくや、威光でどうする事も出来ない大きな幸福のある事が今判然と判つたよ。

待つて下さい、和子にそれが判つたらもうお終ひだ。我等の海の國は不幸の捨て所です。

——さうだ、俺には今日迄それが判らなかつたのだ。俺はもう海賊を止める。そして俺は人間の仲間

聞て祝福する。

(21)

銀行の重役室に山路を訪ふ朝子、淫慾に舌なめずりしてゐる狎々を尻眼に、借用の金を返して悠々と去る。

變に至んだ昔立し氣な顔が鏡に寫つて山路自身を嘲笑してゐる。

(22)

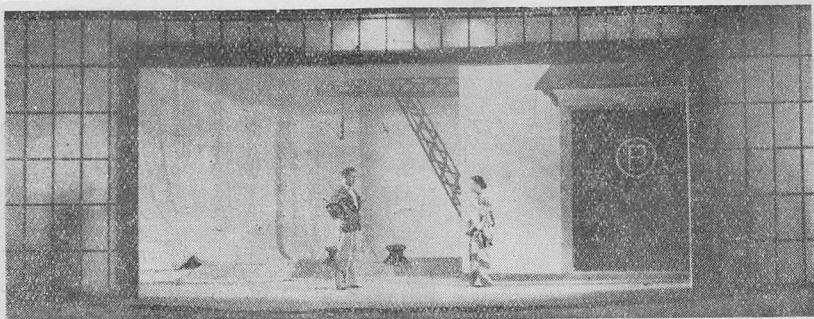
進はウィルソンの肖像を買つて來た。以後それと睨みつこをして作社會的進出を、偉大な政治家を目標す心組である。

そして、春子は彼等の母、朝子の如き女丈夫になるべく誓ふ。

兎に角彼等の一家に幸福は酬はれた。朝子の健闘によつて——。

(23)

木下一郎は朝子に對する秘める戀心の如何様にも出来ない運命をかこち乍ら米國へ……。



けられた。

——幾ら強氣であつた所で、ドバの詰まりがあつた。耐まらなく淋しくなつて來やがつた。

お富から説き伏された安藏は改心の誓ひを羽黒様へと、淋しい心持ちを抱いて従いて行く。

——ねへ安さん、私や今夜と云ふ今夜本統に生れ變つた氣がするよ。今迄は闇夜の中を探り／＼ガタリと云つても、ビクリとし乍ら暮してゐたが、これから先は今夜の月夜のやうに、明るい楽しい世の中に住めるのだ。

正しく人間の生涯を歩む嬉しさに、お富の胸は朗かに躍つてゐた。が、安藏の心はさうでなかつた。

——お前達二人は堅氣になつて嬉しく暮せるだらうが俺には肝心の相手がねへ。騙騙安は獨り者だ。俺が善人になる印にお前俺の女房になつてくれ。

——なにをいふのだい安さん。いゝや、本當だ、どうか聞

間へ行く。眞の人間の仲間へ。

人間の仲間!!それが今の源十郎の身にあらうか、一步陸地に踏み出せば直に捕はれの身になるは必定である。

——俺はこんな鯨のやうな眞似をして一生を終りたくない。

虚偽の生活から逃れやうとする源十郎の心は奔流となつて渦巻くそれには流石の老雄勸兵衛も如何ともし得なかつた。總ての終息が來たやうに思つた。

源十郎は割腹する。

——あつ切腹! 和子、何故早まつた事を……

——馬鹿、俺は生き返るのだ。

本當の人間の生活に生き返るのだ俺は生き返る爲めに死ぬのだ。そして、そして、眞の幸福を得るために、眞の幸福を得るために……

(24)

山路と淺山が朝子の弟健吉に一捆千金を目論んで、好況に帆上げてゐる鐵の思惑貫をすゝめてゐる。

山路の銀行を背景とする事に信じた健吉は遂に承諾する。

(25)

が、好況時代、夢の時代はいつ迄も續かなかつた。大山の崩れかゝつた時、釘一本で支へる事は出來ない。而して此の暴落を誰が豫期しやう。

朝子は再び造り上げた財産の總てを投げ出さねばならなくなつたが、彼女が、健やかに延びて行く子供の小さな魂に傷をつけたくなかつた。

が、進達は既に母の意を知り貧乏に對抗して行く健氣な覺悟に母子相抱いて泣いた。

(26)

或る待合である。健吉はひどく酔つてゐる。山路等に騙され、自ら彼の設けた落とし穴にもぐり込んだ事を悔いてゐた五萬圓の約手、それは山路の惡疎な手によつて姉朝子を苦しめる材料になつてゐた。

——健吉さん、何にも云わずに其の金を私に出さして下さい。私身一つになつても拵へます。——

演子の言葉である。

(27)

病室。

朝子が寝てゐる。

枕頭に侍る三人の子供。

朝子は子供の手をギユツと握り占めてゐる。

健氣な母。苦闘の母。典型的母性。

醫者と看護婦が慌しく來る。續いて起る人々の鳴咽。

いてくれ、俺が與三郎をたすけたのも皆んなお前を思ふからだ。急ぎ立てる銅羅が一同を離す。

朝子の心には何かしら一ツ衝動がかもされずにはおかなかつた。テープを振る手は震へてゐた。

彼は身に迫る孤獨の悲哀から、長年の友達を裏切つたお富を口説いた。與三郎の位置に自分が据はらうとした。その非望に怒つたお富は遂に、遂に安藏を刺した。驅け來つた與三郎も斬つた。二人の生活を泥濘へくと陥し込む病は遂に除かれた。が、それは、彼等の終焉の時であつた。

新吉の爲めに兩人は捕はれた。お富、覺悟の前だいきよく、二人揃つて仕置を受けやう。類死の安藏が苦し氣に呻いてゐる。

——應ア見やがれ三人の生活を吐き出した最後の言葉である。

東海道四ッ谷怪談

天満八千代座の大歌舞伎

【配役】

お岩、小佛小平、佐藤興茂七(右團次)、民谷伊右衛門(徳三郎)、秋山長兵衛(駒之助)、娘お梅(延太郎)、四谷左門、後家お弓(右田三郎)、伊藤喜兵衛(右左次)、乳母おまき(右文治)、關口官藏(關三郎)、妹お袖(右若)、推丁萬吉(達雄)、按摩宅悦直助、樞兵衛、大吉利、伊藤喜兵衛の娘お梅は男らしい民谷伊右衛門を戀したであつた。凡そ妻子ある男に横戀慕するは主ある妻に横戀慕すると同様に、此世の沒義道である。お梅の切なる思慕の念は總て病の床に臥すばかりにまで高潮して行つたのであつた。そして胸の苦衷やうかなく遂に父喜兵衛におのが苦しき胸中を打明けたのであつた。

妻子ある男に戀をする。此の場合のお梅の心には總てを是認するいとまがなかつたのであつた。それ程今のお梅の心は伊右衛門戀しさの念に身も心もうつゝを抜かし切つたのであつた。世の中の罪惡の發端は、人がその立場に迷妄する事に始まるものである。お梅の場合がそれであつた。喜兵衛も可愛いお梅の哀惜に子に對する親の慈悲心から遂に恐る可き邪道をやさなくされてしまつたのであつた。一日伊右衛門を邸に招いて、お梅の總てを打明けたのであつた。伊右衛門は餘りの事に愕然としたけれど目の當り親娘二人が命までもとけての頼みに彼の性來の倅心はぐらゝと動搖したのであつた。そしてお梅と夫婦に成る事を約束してしまつたのであつた。其頃伊藤家に出入する按摩宅悦と云ふ男があつた。喜兵衛は手段の第一歩を此男の運用に見出したのであつた。それは毒藥をもつてお岩の面相壞亂を計つたのである。慾に目の無い宅悦がそれを二つ返事で承知したのは云ふまでもない事であつた。

伊右衛門は金の工面にお岩をせめ通した、そして今は何一つ金に替るものもないと見た伊右衛門は着てゐる蚊帳をはいだのであつたと其蚊帳に見るも無慘やお岩の生爪がひつつかゝつて行つたのであつた。お岩今更に業惡な伊右衛門を恨むだ。伊右衛門は宅悦を頼むで、お岩に不義をするを強制した。宅悦はそれをこばむだけれど、刀にかけてもとの伊右衛門の態度に、やむなくそれを承知したのであつた。宅悦は心にも無い不義に自責せずにはゐられなかつた。そして何時の程にかお岩を口説く自分を見出してゐた。お岩の激昂は極度に達した。そして宅悦を殺して自分も自殺せんと決心した。けれど宅悦は救を求め乍ら總てを自白したのであつた。宅悦の差出す鏡に寫る今更の如き形想に失神せん斗りに驚愕したのであつた。そして伊藤家よりとゞけられた毒藥の一件を知るに及んで、お岩の憎惡はその極に達したのであつた。せめて息ある内に伊藤の邸へ乗込んで恨を晴さんとした、宅悦はそれを留めたお岩は宅悦といがみあふ中に遂に自らその刃に倒れたのであつた。

お岩と小平の死骸は戸板に縛りつけて川に流した。伊右衛門の身邊には早お岩の怨靈はつきまとつてゐた。戸板の裏表に縛りつけた二人の怨靈は、伊右衛門の心を屠々苦悶の底につき落したのであつた。それから伊右衛門にはお岩の執念が何處へまでも崇つて行つた。揚句の果が蛇山の庵主に自分が身を、昔の業績のつぐなひに詫しく暮さなければならなかつた。けれど伊右衛門のそんな生活に對しても心からの悔を慰める事は出来なかつた。明けても暮れても自分の身におゝひかゝるお岩の靈に如何ともする事は出来なかつた。親切な講中のくる百萬遍よりも僧のとなふる經文の有難さにも昔の罪の悔より脱出する事は出来なかつた。以前、舅伊藤喜兵衛にさづけられた墨附を秋山長兵衛に預けてあつたが、それもお岩の怨靈によつて鼠の爲めに元形を留むるにいたらなかつた。小林平内の訪ふるに依つて遂に身を虚偽者とまで罵倒される口を倒した。そして我身も舅の敵とつけねらふ佐藤興茂七の爲めに倒れて行かなければならなかつたのであつた。

『マツ』の演出に就て

野淵 昶

マツは私の大劇場進出の門出の演出だ。初め西洋の「寺小屋」の演出と聞いてこれはきつと面白いことが出来るぞと非常に期待してゐた。私の豫想してゐた脚本はメスフィルドの「忠義」などと同じやうに原本とは似てもつかぬもので、原作をただ材料にとつて、作者の思想、空想を自由に驅馳したものだつたところがマツの翻譯を見るとこれはまた、出雲の原作「寺小屋」の構造から一歩も出てゐない。そこには何等自由な思想もなければ、變つたテーマもない。日本文學の外國譯としては寧ろ忠實すぎる位の翻譯だつた。

實際考へて見ると寺小屋の忠實な外國譯をまた日本譯しなほして上演するといつたやうなことは、日本製の陶器を上海で買つて來る

よりもつと愚なことだ。それに歌舞伎の永い傳統が創造したあのいゝ型があり、しかもそれを日頃見る機會の多い邦人に、何も日本の傳統や風俗に無理解な貧弱な奇怪な型を翻譯して見せたりする必要はないのである。臺本を讀んだ後、そんなことで私は全く困つてしまつた。それに一時閒餘かかる永長場を四十分位にしてくれといふ注文にも面喰つてしまつた。私はこの演出の意圖と方針についてかなり考へあぐんだのであつた。ところがいゝ、ことに思ひついた。「寺小屋」を古劇の取扱から全然離れてレヴユウとして扱つてみてはどうであらう？ これは自分ながら前にいつた困難を一掃してくれるいゝ思案に思はれた。英譯の「マツ」が「寺小屋」の筋と内容から一歩も出てゐないとすればこの際、筋や内容に力點をおくことは、外國で上演の時は最も必要であるが、日本では最も不必要だ。私の見せたいのは、「マツ」の外貌だ。色彩と線と集團



人夫オヨエチ



オゾンガ



イキオザンサ



士兵

の美だ。装置と衣裳と照明と演技の型とだ。そして勿論これ等は歌舞伎の傳統が數百年に亘つて育てあけて來たものから離れて、私等の近代的官能と西洋趣味とを一度とほしたものである必要がある。近代劇場藝術の息のかつたものでなければならぬ。私は六十餘枚からある臺本から殆ど筋がわかる程度に二十枚近く削除するの冒險をやつた。それから演技を面白くするためにト書を變へるは勿論隨分臺本にないこともやつてみることにした幕が上ると西洋人の版畫趣味にふさはしいフジャマとマツとツルとを描いた。第二の幕があつて、ムスメが二人元祿花見踊を踊り、その娘によつて幕が洋式に中央からひきわけられるといつたやうなことで、終りの野邊のおくりのところを「アヴエ、マリヤ」の伴奏で、トナミイ夫人が支那式の籠から白い鳥を放すなど——そんなことを方々に加へてみた。

ところがこゝにもう一つ困つたことは、取扱ひ方がレヴユウといひ條、純粹のレヴユウとはちがつて劇的要素は多分にあるのだから肝要なクライマックスに入つて、從來の「寺小

屋」をあくほど見てゐる人達の間にドツと惡落が來て劇的效果を殺しはすまいかといふことである。これは最もあり得ることで、先年辨天座で武田正憲がやつた「忠義」などはこの最も、例だ。それにまたこの演出をやつてゐる今更ながらつくづく感じることは古劇の型の完全無比なことで、首實驗の前後などどう考へても實際あれよりどうにもならない西洋の名優もあの型を知つてゐたら恐らく一も二もなく、眞似たらうことは私が保證しておく、何を好んで今度の演出にこの型を避る必要がある。たまらなく、型は遠慮なく頂戴してしまつた。同志社の教師をしてゐるお蔭でバタ臭、演出家に見られてゐるさうであるが——なほに、まだこの位の程度なら國粹保存主義者の仲間入は出来る。

閑話休題——で、劇的效果の最も高められる首實驗の前後、二度目のマツオオの出、等には一にはこの古劇の型の魅力に打たれたため、一つには惡落を避けて劇的效果を破らないため、型をしきりに借用したのである。しかしこの際にも自分の演出良心のふるいにか



母 の そ イザウエミンカ 泉 阿 パ ン ダ

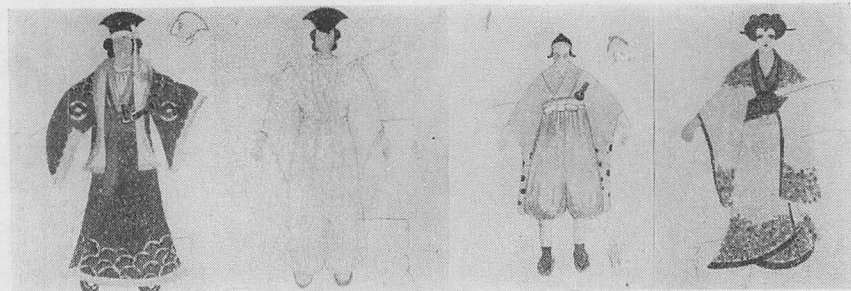
けたことは勿論で、上手を上手としてゐる「寺小屋」の型を破つて中央を上席とし、ガンゾーとトナーミを上手に置いたり、女形を女優にしたため、その動きをすっかり女優の動きにしたり、其他、マッオーの實驗の形を見てもらつても從來の型によつてゐるやうで、その實、誰の型によつたものでもないやはり獨創の物のつもりだ、即ち無條件の型借用罪は決して蒙らない用心はしておいた。かうして或る個所では型を借用しておいたが、その他は出来る限り、翻譯的に近代劇的の演出をとつた。マッオー、ゲンバの花道の出などは首實驗に來るグロテスクな全體の氣分とは全然離れて、西洋人の好きなサムライの行列を見せるつもりで、寧ろ陽氣に洋樂で「お江戸日本橋」を伴奏にした位だ。これなども演出の意圖が分つてもらへばうなづいてもらへやうし、一般大衆にも受けること請合だ。

百姓その他の大勢の端役は出来る限り個性をとつて假面のやうな顔につくり、表情を殺し、動きを操り人形の動きに近くした。

扮装は一般に洋式にしてもらふつもりだ。

西洋人が日本人や支那人に扮する時、いつも滑稽な眉や口のつくりをするので、美男美女の多い日本のために癪にさはつてならないが勿論そんな眞似をするのは何といはれたつて御免だ。寧ろ、眉、眼、鼻、口、顔色洋式にやつてほしい。女はかづらに少し赤味を加へて縮らせることもした。衣裳は森君といつしよに随分材料になるやうなものを集めて、下繪を書いてもらつた。森君のデザインには全く満足した。そのかはり今まで貧乏な小劇場で衣裳代に五十圓以上支出してもらつたことのない私が全く膽をつぶしたほど高價な贅澤なものになつたのである。

舞臺裝置は寫眞を出来るだけ避けて、支那趣味を多分に加へてもらつた。西洋人が日本と支那とをごつちやにしてゐるためもあるが西洋人の見た異國情緒は支那趣味を加へなければ日本には翻譯出来ないからだ。時候にかまはず櫻と柳とを加へたのと、後庭に能舞臺から脱化した松を見せたこと位が日本を印象的に表はしたものだ。門口も今までの定式をばつして赤鳥居から脱化した支那式門を下手



オ オ ツ マ

オ バ タ コ

人共イミナト

につけた。之に小さな鐘をつけて、訪門者：たたく装置だ。花道はやはりつかつた。近年ロシヤと獨逸でも花道——日本のは勿論形式が違ふが——をつけることがなかなか流行つてゐる。この芝居等最も花道のはいもので、花道のないアメリカの劇場などさぞかしこの必要を痛感したことだらう。西洋の芝居には花道がないのに——などと批評家よ、そんな批難はどうか御容謝を。

伴奏は初め前奏曲に「お蝶夫人」から拔萃するつもりでゐるが、やはりもつと大衆に近しいものと思つて、日本の曲で歐米にもよく知られ、勿論日本の大衆にも馴染のものをと思つて元祿花見節を選んだ。他も同前である。

その他、翻譯者マツカアスのものとは、いろいろな點で餘程ちがつたものになつたが、そのかはり完全に自分のものにはなつたつもりである。大衆を前にかういつたものゝ演出は最も冒險であり、實際その効果もおそらく蓋を開けてみなければ分らないが、兎に角出来る限りの努力はしたつもりだ。

「ギブス固煉齒磨」



本品を使用すれば幼時より老年に至るまで齒牙を完全に保つ事が出来ます。何故なれば、ギブス煉齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのであります。から毎日二回必ずギブス煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は爽快になります。

本品は美しきアルミニウム罐入りで桃色の固煉製であります、有名な百貨店、藥店及化粧品店に賣つて居ります。

大形	壹個	金七拾錢
大形中味	壹個	金六拾錢
小形	壹個	金四拾五錢

日本代理店

株式會社

ギブス株式會社
横山商店

東區豊後町三番地

ロンドン
ディ・エンド・ダブリュー

『船』について

大西 利夫

今度第一劇場のだしものに選定せられた私の『船』は、大正十一年に書いた『颯風』を第一劇場むきに書きなほしたものである。七年も前の舊作ではあるし、書いた當初から私自身大して會心の作とも思つてゐなかつたもので、今日これが再び世に出るといふのは、われながら少々氣はづかしい思がするのだが、折角劇團當事者の御依頼なので、それも何かの都合からだらうと思つて、臺辭を現代語に、人物の出し入れを少々改めた程度の筆を入れて、辛捧してもらつた。

初演は大正十一年五月の中座で、中村福助氏が主人公の海賊中村魁車氏が女主人公の女房、故尾上卯三郎氏が老海賊に扮したのであるが、評判は可なり悪かつた。勿論罪は脚本にあるが他に今一つの失敗の大きな原因は、演技のテンポが恐ろしくのろかつた事にもあると私は思つてゐる。御承知の通り福助氏や卯三郎氏はどちらも揃つてテンポののろい藝風の

人で、そこに獨自の味はあるが、この脚本の場合には全く不適當であつたと思ふ。尤もその當時は今日のやうにテンポのことをやかましくいはなかつた時代で、速いテンポでやれば藝が粗雑だと非難せられたかも知れないが、脚本としては寧ろその方が今少し救はれてゐたかも知れないと思ふ。

第一劇場の諸君はその點では心配はない。或は、脚本の失敗を救ふ以上の効果をあけるかも知れない。劇團當事者がこの脚本を選定せられたのも、恐らくさうした意見からであらうと思ふのである。

但し脚本そのものだけで申すと、舊作とはいひながら、私自身、手法が生硬で幼稚だと思ふ。この缺點を俳優諸君がどういふふうにかつて救つてくれるか、私は大に興味をもつて期待してゐる。尤も初演當時この脚本は演藝畫報にのせられたが、誰であつたか名は忘れたが、讀賣の戯曲評欄で、この作は全然近松の手法を踏襲してゐるに過ぎないといつて悪く書いた。

評者はこの脚本の海賊から毛剃を聯想し、博多小女郎を聯想したものらしいが、結局近松を讀んだことのない人だと思つただけで、この評言だけは私自身今に少しも承服してゐない。上演後間もなく、この脚本と殆ど同一のプロットで『女と海賊』といふ映畫が蒲田で製作せられた。この映畫はひどく好評を博して、芝居で見ると映畫で見た方が面白いと新聞の評にも書かれた。けしからんぢやないか、あの映畫はたし

壇の浦について

高 安 月 郊

かに君の芝居の無断上映だ。大に抗議を申こんでやるがいゝと落合浪雄君が私にけしをかけたことがある。勿論當時落合君も私も、蒲田とは謂ゆる内輪の仲であつたから、それも冗談半分のフンガイに過ぎなかつたが、その落合君が後に坂崎出羽の無断上映問題にひつか、つて蒲田を出てしまつたのは奇である。

それはさておき、この脚本が芝居でよりも映畫で成功したといふことは大に考へなければならぬことである。勿論それはプロットの問題よりも、シナリオライターや監督の功に歸すべきものではあるが、一面、この脚本のプロットは單なるドラマチカルな手法よりも、映畫のやうにエビカルな手法をも更へて、而もそれを非常に速いテンポでやつてこそ初めて効果をあげ得るものであることを教へられたわけでもある。

今度の第一劇場ではこれをどういふ風に演出されるか知らないが、舞臺の藝術は映畫のやうに自由がきかないから、果して所期の効果をあげ得るかどうかは疑問である。悪ければ無論脚本の罪である。いかにおしの強い私でもさすがにこの脚本でもつて責任のすべてを演出者や俳優諸君に罪をなすりつける勇氣はないのである。

私はかつて嚴島で平家を吊ふ一詩を作つた、それから壇の浦へ行つたが、まだ劇にする氣はなかつた、然し私の處女作は『重盛』である、それも小松殿にあつた門から神興をえたので、其點平家には深い縁があつた。また源氏より美くしい一家の盛衰人世の畫としても多く暗示する所がある。されば平家物語始め諸曲や淨瑠璃の題材となつたが、兎角表面に止まつて、歴史より深い人世觀に徹したものは無かつた。私は重盛からして歴史中の人物といふより悲劇の運命に泣く人としてあつたが、壇の浦に着手すると唯一家が亡びるのでなく、平安朝文化が破船すると認めたので、それを劍の山の上へ乗り上げさせて此世の地獄を暗示した。親と子の死別、その入水を目前に見る苦惱虚偽の兄の爲に政策を誤る遺恨、それも亡父の横暴の反動が極端に酬うた恐ろしさ、二位尼と知盛の苦痛は血の海に海虎は現實の鬼の口である。此宗盛を

取りかへる子の事は源平盛衰記に依つたが、一説に彼が餘り兄弟に似ぬ愚劣の遁辭といふ、然し今一同死なうといふ際に尼もそんな云譯をする筈も無く、尙恥になる『馬鹿の福徳』といふ諺もあるが、偶然に家長となり、多く其失策の爲に家を亡ぼして、彼も實際福でも無く、大きな恥をかく所に運命の愚弄がある、然し私は丸で馬鹿といふより實父の法師の遺傳と不自然になつた貴族の生活で意思の弱い人世の争鬭に堪えぬ人間にして死を恐れるのも無信仰と子の爲にした、知盛は渡海屋のと丸で違へて、優美な平安朝文化に育つた人、清盛の遺傳で有爲な氣象と、母の温情と、兄重盛に似た理性と兼ねても、主位に立てなかつた爲に亡家の最後を負擔する不運の人、其子をお身代りにするのも根據がある。此一件の考證は同時代の關白兼實の『玉葉』始め多くの私記、各地の傳説、其後の隨筆、近頃の研究も二三卷あるが、それは歴史に屬するから一々挙げぬが、御入水とは源氏の御用丈『東鑑』が政略上曲筆したのが後の史家を誤らせたので其方が却つて源氏の大罪となるのに心づかぬとは淺はかであつた。何にしても此件は餘り詳しくする一末でも無く、慣用手段を踏襲したのでも無く二位尼、知盛の苦忠に同情を増せば好い。また歌舞伎劇の知盛の死に諸曲の『碗落』始め碗を負ふとしたのはいかにも繪模様であるが、平家の大将としては品が悪い類もあり踏襲を避けて、盛衰記では自害とあるから、それに

依つた。能登守が義經に迫つたといふのは最も武者繪の種であるが、一説に彼は一谷で討死にして、其後は身替りであつたといふ、何にしても八艘飛びは演出も出來ず、人物の配合上、有盛に色彩を負擔させた。其外出来る丈事實らしい種を取つたが、固より活歴でも、寫真劇でも無いから、藝術として自由にあつた。唐笠法橋の内は歴史の裏面、源平の政争より、此一貧民の家に多くの人生の苦味がある。それも淨瑠璃で空な人物を作り出したに習はず、實在の傘張り、次男の巖次だけ作り出して、それで波を立て、見た。それも技巧で無く、遺傳が生憎に人の思ふ様にならず現はれる神秘、父や兄に似ぬ冒險は正反對の性を出す事もある一例、然も根から武士で無いだけに、功名より眞の幸福は自然相手の自活にあると淡泊な所に京の人の一面を出した。やどり木はそれと反對に父の遺傳を男の子より多く受けて、有爲な氣象を持つた丈、傘屋の娘で終られぬ、あはれ素性を知ると、貴族的根性や、負けぬ氣や、尼も長刀もつ其時代から現代にも反響する自我や、また知らずに終つた同族のなつかしい女心やら混亂して、浮浪の身にあるとしたのは、平家の餘類があらこちらに落魄して女は多くあさまし流れの身となつたより最も深刻な果は小原の奥に遁世して六道の實驗を泣くと同じく到底免れぬ人世の因果である。三郎丸の事、副將の事も事實で、此場へ寄せたのは舞臺効果の爲、その外自作の説明

秋のくせ

食満南北

は樂屋^{がくや}でしても、作者^{さくじや}として公^{こう}にはすべきもので無いが、今の世^よはそれも餘儀^{よぎ}ないから其^{その}一端^{いちたん}を書いた。

演出^{えんしゅつ}方は歌舞伎^{かぶき}式^{しき}では固^{かた}より不可^{ふか}、さりとて自然^{しぜん}式^{しき}も不可^{ふか}元來^{がんらい}ギリシヤ悲劇^{ひげき}の彫刻^{てうこく}美^みに、歌舞伎^{かぶき}劇^{げき}の繪模^{えいも}樣^{やう}を合^あはせて見^みたい所^{ところ}もあつたから、形^{かたち}の爲^{ため}の形^{かたち}で無く、心^{こころ}から出る形^{かたち}の美^みをこゝろがけねばならぬ。それは所々ある、然しわざとらしくなつてならぬ、おのづからの形^{かたち}の美^み、それも平^{へい}面で無く彫刻^{てうこく}の樣^{やう}に裏^{うら}まで見える樣^{やう}、船^{ふね}の先^{さき}に立つ二位^に尼^に、後向^{こうきやう}の表情^{へうしやう}は知盛^{ちじやう}の見送^{みおく}りなどで出來^{でき}よう。音樂^{おんがく}も用^{もち}いたが、船^{ふね}の場^ばは始め^{はじめ}の笛^{ふえ}の外^{ほか}つかはれぬ。尤も合方^{あひがた}といふものは其音^{おと}が聞^{きこ}こえてゐるので無く、其臺詞^{そのせりふ}の情調^{じやうてう}を助長^{ちやうちやう}する爲^{ため}であるが兎角^{とかく}無意味^{むいぎ}になり、臺詞^{たいし}を浮^{うき}かせる。次の場^ばでいさ、かいつもと違^{ちが}ふ樣^{やう}に用^{もち}ひるかも知れぬ。これは今後^{こんご}の一問^{いっもん}題^{だい}で音樂^{おんがく}の全廢^{ぜんぱい}は時代^{じだい}後^ごれである。臺詞^{たいし}は古代^{こくだい}の人^{ひと}にまで現代^{こんだい}語^ごをつかはせるのは其氣分^{そのきぶん}が出^でぬ、さりとて其代々^{そのだいて}の適用^{てうよう}語^ごは分^{わか}ぬから、出來^{でき}る丈^{ただ}正しい標準^{へんぎん}語^ごが肝要^{かんよう}、私は兼^{かね}てから時代^{じだい}物^{ぶつ}にも世話^{せわ}と大差^{たいさ}の無い言葉^{ことば}を用^{もち}ひた然^{しか}し云^いひ方^{かた}を自然^{しぜん}過^かぎては肝要^{かんよう}の句^くがこたへぬ。意味^{いみ}表情^{へうしやう}につれて相當^{さうたう}の緩急^{くわんきつ}抑揚^{おふやう}をつけねばならぬ。服裝^{ふさく}は其時代^{そのじだい}に依^よつたが、また見^みた目^めの美^みを本位^{ほんゐ}とした。背景^{はいけい}も寫實^{しやじつ}で無く、象徴^{さうてう}めかさずして、おのづから暗示^{あんじ}する積^{つも}りである。

× × ×

○私はどんな風の吹^ふまはしか「徳川慶喜^{とくがわけいき}」といふ六幕^{むく}といふ老^お大^{だい}な戯曲^{ぎぎく}をものした。其上^{そのうへ}篇^{へん}を『最後の將軍^{さいごのしやうぐん}』三幕^{さんまく}、下篇^{げへん}は『大政奉還^{たいしやうほうわん}後の慶喜^{けいき}』といふ何^{なん}と云^いつた處^{ところ}が職業^{しやうぎ}作者^{さくじや}の作物^{さくぶつ}である。しかも怪^{あや}し氣^げな單行^{たんかう}本^{ほん}にして市^{いち}に出^だした。恐^{おそ}らく南北^{なんぼく}の最後^{さいご}の眞面目^{まじめ}さをあらはしたものかもしれない。南北^{なんぼく}にだつて眞面目^{まじめ}な一面^{いめん}はもつてゐる。

○南北^{なんぼく}の眞面目^{まじめ}でない一面^{いめん}を紹介^{しょうかい}する。別に紹介^{しょうかい}して貰^{もら}はなくつてもよからだが、原稿^{げんこう}をのばすために紹介^{しょうかい}する。

南北^{なんぼく}は放送局^{はうそうきよく}で三日^{さんじつ}位^{くらい}に涉^{しか}つて『新講談^{しんかうだん}』をやらふと思^{おも}ふてゐる。すでに話^{はなし}は進^{すす}んでゐる、南北^{なんぼく}は本名^{ほんめい}を貞二^{さだじ}といふ。其處^{そのところ}で一切^{いっけい}は貞山^{さだやま}ばかりやるつもりだ。しかもこの新講談^{しんかうだん}も亦^{また}「徳川慶喜^{とくがわけいき}」である。

○自家^{じか}の廣告^{こうこ}ばかりでは恐^{おそ}らく道頓堀^{どとんぼり}編輯^{へんしん}長^{ちやう}カツカと怒^{おこ}るかもしれない。私は壽三郎^{じゆざんらう}の第一^{だいいち}劇團^{げきだん}といふものを觀^{かん}

た、私は壽三郎に『うるほひ』といふものが有りたいたと痛感した。

それだけである。

○岡本綺堂氏の『雨月物語』があるに拘らず。私は『淺茅が宿』を描いた。これは殆ど淨瑠璃風にしたまで、決して綺堂氏のものにあきたらぬといふ生意氣さはもつてゐない。

○小山内氏の『西山物語』があるに拘らずまた私の『西山物語』が上演されたやうなものだ。

○さう云へば私の『櫻のもと』が東京で何とかいふ名題でやつた事もある。

○私が大南北のを脚色した『櫻如』も東京で上演されてゐる。

○たゞ東京と大阪との違ひ目は、東京の方が手近にいろいろの機關が備はつてゐて發表するのが早い、大阪は何につけても不便である。

○第一劇壇で田中總一郎氏が忙がしい爲め、私は中座の一番目高安月郊氏の『壇の浦』の舞臺監督をしなければならぬ事になつた。私はこの芝居をスツカリ古く合方を入れてやる事にした、何故だかは芝居を觀て貰へば解る。しかし私は合方や、舞臺の位置や、時々思入や、大體に於ての動きは指圖もするが、個々に涉つての一種の技訂にはあまり嘴を入れないやうにするつもりである。魅車氏、我童氏、扇雀氏

成太郎氏、鍛十郎氏、橘三郎氏、右團次氏等々の皆さんが南北の不自由な型にはまつても困るだらうと思ふからである
○結局は本臺といふ名が舞臺監督と新らしくなつただけである私は川柳によつて舞臺カントクといふものをうたふて見る
○臺本を舞臺かんとく敵にする
○社長さんかんとくを呼ぶむつかしさ
○七三で椅子にかけてる無事な幕
○サアかみてにしませうとかんとへおとなしい
○板附を舞臺かんとく吐りつけ
○照明部顔を見せずにどなられる
○かんとくいまむしくふまのあればこそ
○二番目の舞臺かんとく駄目を出し
○かんとくの走しつて行くは駄目であり
○かんとくを達者からく叩くなり

新刊

食滿南北著

戲曲 德川慶喜

定價一冊

(五十錢)

内容・最後の將軍(三幕)大政奉還後の慶喜(三幕)

大阪市此花區野田驛前

申込所 番傘川柳社



自己語 坂東三郎

長蛇の如き鹿兒島行急行列車が、今K市のプラットホームに迂り込むやうにして長驅を横たへた。中から吐き出される降車客の足音が驟然として歩廊の彼方に鳴響いた。

「豊田家はん、不思議な事があるんですが」頭取は私の傍に走寄つて来て、さも意外さうに少しあはて氣味にせき込むでさう云つた。

「どうかしたのか？」——私はまじろさもせずさう聞き返した。

不思議な事と云ふのは斯ふだ。話による私の宿屋からの差廻しの自動車を斷つて私の乗る爲に縣廳の自動車が差廻されてあつたのだ。私も事の意外に驚かずにはゐられなかつた。縣廳から自動車差廻し、さ

許されて阿蘇山周遊するの光榮に浴した。私は俳優たるが爲めに、斯る事の俗人に豫想だに出来得可もない欣幸に浴するの榮をになひ得たのであつた。

此れも其巡業中の出来事だつた。さる最氣の方からお座敷に招かれて行つた時の事だ。

藝者も澤山座に居たが——其中に素晴らしい美人が一人ゐたのだ。其妓は初終私の傍から離れやうとしないでそして間斷なく萬遍もないおせじに愛嬌を振まいてゐた。私も内心其妓に對して別に悪い感じも持つてゐなかつた。美しい者にいはれる者の幸福。むず／＼した一種の名狀しがたい

つぱり私にはその譯が解らなかつた。K縣の警察部長は私が未だ東京に居た時私を非常に最氣にしてゐて呉れたさうなのだ。それで私が今度K市に來る事を知つて、わざ／＼招待するための差廻しである事が知れた。

私はK市滞在中、其警察部長の同伴を

歡喜が瞬間私の腦中を驅逐つた。其の妓に相對してゐる間は少くとも自からなごやになる氣持を判つきりと私は感じてゐた。私は其晩可成酩酊して座敷に寝てしまつたのだ。

其妓の存在を其處に認め得なかつた事は、戀で平常に魅つた私の頭に判つきり刻みつけられてゐた。

そしてそれから私が其町を發つてしまふまで毎晩其妓と一所に會してゐた譯だ。

酒宴の場では必ず私の傍にいざなひ、他人とも思はれぬしぐさが彼女の動作に判つきり表れてゐた。それでゐて二人は何等それより深い交渉を持つ者でもなかつた。毎晩遅くまで私の傍に依然として存在してゐる。それが町を發つ最後の日まで續いてゐたのだ。

其して戀で彼女の其の不思議に思はれる態度が解決される時が來た。それは、彼女を非常に親切にめんどうを見やうと云ふ人があつたのだ。けれど彼女は其人を甚しく嫌惡してひたすら其人より逃れる事にのみ全力を上げてゐたらしい。そして其の嫌な人の虎口のをがれる爲の頼み口を私に見出した譯なのだ。私は飛んだ事件の楯に取られてゐる事を知つて少からず面くらつた。今でも其時の事を思出すと自然と微苦笑が浮んで來る。

うばたま草紙

森 英 瑠

「お歸んなさい。」
依田彌左衛門は我家の隅をまたいて、一人娘のお雪に「いそ」と迎へられた。彼は今日もしたゝか酔つてゐる。

娘お雪が片岡直次郎と戀仲であつた事は彌左衛門はよく知つてゐた。そのお雪が今又新しく宗俊に取り入れる可くむけさしたのも彼であつた。

「あんな氣の小さい、渡り用人の小倅なんかを何時まで思つてゐたつて爲方がない。」

さう云つて彼はお雪を無理矢理に宗俊に押し付けたのであつた。

直次郎は近頃「自分の取なしが、何時にないすげない彌左衛門の態度にあきたらなく思つてゐた。どうも可笑しい——そんな氣持が絶えず彼の不安な心にこびりついて離れな

つた。お雪に逢ひに依田の住居を尋ねた時彌左衛門が一人縁側で杯を重ねてゐた。と直次郎の姿を見ると彼はその酒にすわつた眼を一寸曇らせた。

嫌な奴が——とそんな風に目が語つてゐた奥からお雪の愉快さうな晴やかな笑聲が自分を當つたやうに流れて來た。と軽い嫉妬と憎悪が彼の胸中をかすめた。

「まあ直次郎さま、お出でなさいませ。」
直次郎の姿を見とめてさう云つたお雪はばつ

つの悪い思て面を曇らせた。
直次郎はたまらないやうに我胸を息づまるやうにぐくつと大きく唾を呑み込んだ。

間もなく宗俊が我物顔にお雪と楽しさうに出て行く後姿を直次郎は黙つて見送つてゐた。何か決心の色がさつとひきつた蒼白い彼の

壇の浦

壇の浦に月かげる——
海の底にすゝり鳴くが如き笛の音が、猶閑き黎明の空に聞へて來る。

朦朧たる海上に運命の鍵を握る平家一門の一千餘艘。颯と白け渡る陽の光の彼方には一家没落の悲運をのせて——

平の宗盛の吹く笛の調べは、舷に碎ける濤音とともに哀韻縷々として湧え、運命の前に恍惚として自ら奏する笛の音に、彼の臉は新しき涙にうるむ。

帆の隙に其の笛の音と共に泣く玉蟲の前。颯と相對した二人の面には言葉なく只涙のみが頬に濡る。

ほの／＼と明け渡る海的面幾千艘の軍船が浮む。——白旗、白旗、陸に海に。

——田口民部はまだ參らぬか？
波風の激しい空氣の中に平宗盛の聲はリ

ンとして響く。
東風が吹く。味方の軍船は不利な逆流の中に動搖する。遠矢が船の總首に突立つ。

面をかすめた。
月の光を浴び乍ら、涼しい川風に面をなぶ
らせて歩いてゐる宗俊とお雪の心は、今宵の
月のやうに丸く、樂しかつたものに相違ない
未だ酔の消え失せぬ軽い吐息が相互の頬に胸
に感じたに違ひない。

「どうも私にはあなた様の御様子物が足りな
い。」

「何故？」

「別れるつたつて、あなた様は本當に平氣な
のぐすもの」

宗俊はいちらしい女の氣持をさも心地よい
やうに眺めて笑つてゐたが、「是非用事があ
るから」と其の方に足が向けてゐた。たつて

お雪もそれを止めやうとを仕なかつた。――
必つと明日――と云つた男の言葉は耳の奥に
さぐり乍ら懐しさうに宗俊の後姿を見送つて

ゐた。遠くで祭の太鼓の音が聞えてゐる。――
「お雪！突然人の力強い聲を背に受けた、
ハツとして振返つた。

「姦婦、妖婦奴！今の醜態は何だ……」
激昂した男の荒々しい聲にお雪はぎつくり
した。

「謝まつて事が済むか。――直次郎はお雪を
めつたやたらに打さいなんだ。ヒイ――ヒイ

――と女は地の上に突伏して嘔ぎ喘いだ。と
直次郎は急にお雪が不憫になつて來た。先と
は反對に優しく泣き喘ぐ温かい女の肌を抱き
上げた。殆ど狂的なまで慘虐だつた自分のし
ぐさに返つてお雪に憐愍を感じ出したのであ
つた。

「悪かつた、みんな拙者が悪かつた許して呉
れ」

むづ／＼してゐた自分のむしやくしやを暗
らしてのけるとさつぱりとしたやうな氣持に
なつて、直次郎はお雪の身體の塵を拂つてや

り乍らさう幾度となく謝まつた。
「矢張りお身は怒つて居るのか」

直次郎はお雪の肩に手をかけてさう云つた
お雪は矢張り黙つて泣き續けた。直次郎はじ

れて來た。今日同藩堀井の取計らひで、かね
て彼が殿の不首尾を回復せん爲に神奈川ま

でお供に行かなければならなかつたのだ。――
したと一命にかけても今夜のお供は滞りな

く終らせたい――彼はその心で一杯だつた。
けれどお雪は直次郎のそんな氣持も汲み分け

る事はしなかつた。自分の意に従ひさうもな
いお雪の態度に直次郎の體内に再び先程の慘

虐がむく／＼とあたまをもたげた。極度の激
怒と憤怒に、泣きくずれるお雪をさん／＼蹴

源平最後の戦端が開く。西海壇の浦に。
戦ひ前にして早平氏の面は沈痛な氣色に氣
を吞まる。

二位の尼は凝つと東の空をみつめる。しら
ず／＼の間に彼の胸は悲運の無量にむせかへ
る。最後に望んだ今、唯心にかゝるは吾君の
事斗りて心が一杯だつた。お落し申す――其
事。

知盛は二位の尼より意外な事を打明けられ
て愕然とした。兄宗盛は平氏嫡流に非ず清水
北阪の傘張り法師の息たりと。

伯父上、お察しの通り田口民部裏切に
御座ります。能野の別當、伊豫の河野迄も。
宗盛が怒髪天を衝く。

今ぞ知るのみすそ川の流れには
浪の下にも都ありとは

さしもに權勢並びのなかつた平家一門も、
一度源氏の兵鋒にむなしく二十餘年の榮華も

千枯の根と共に壇の浦の藻屑となるか。
二位の尼は鬼王丸を抱き海に入る。

――此上は兄上にもいざお覺悟なされませ
生捕れては耻の耻、いざ／＼。

宗盛の躊躇に知盛は齒をくひしばつた。
宗盛は此時にも生への執着に、清宗への愛

りなぐつた。それでも直次郎の腹は慰えなかつた。

「俺は貴様等親手に殺されるのだ……」

彼はさう叫んで刀に手をかけた。

「真迦——何をやるッ！」

其の聲が終らぬ間に直次郎の身體はもんどり打つてひっくり返つた。其處には彌左衛門のにがり切つた佛頂面が眼をむいてゐた。

「もう此からの拙者に用はない」

今しがた堀に投入して大小のない身輕な腰元に手をやり乍ら直次郎はさうさぶいた。

「若旦那——と後から自分を呼ぶ聲が聞へた。

行手の闇の中に、にんやり笑つて立つてゐる遊び人五松の姿がありと彼の眼に映じた。先程のお雪とのいきこさにとう／＼自分を棄てゝしまつた直次郎だつた。堀井からも見放されてしまつた彼であつた。

「何もくよく／＼するにや當りやせん、旦那を待つてゐる面白い世間があるんですぜ」

時ならぬ御金藏破りにけた／＼ましい呼子の笛は闇を縫ふて地上を走つた。

「おゝ、河内山宗俊……」

「亂闘の跡に茶杓一つ「河内山宗俊」の五字が夜目にも判つきり刻まれてゐた。

お直は直次郎に貢金のさいかくが行つまると共に我身も行つまりに遣はなくてはならなかつた。そして吉原へ、浮川竹のつとめの身となつたのだ。

直次郎はそれ程までに思ひつめる女の氣持はよく分つてゐたが、お直に優しい言葉の一つもかけてやる事が出来なかつた。

お直はそれでゐて一寸も直次郎を恨む氣にはなれなかつた、より一層戀しきの念に胸中が一杯になつて来るのだつた。二人の別れを立聞きした宗俊は、お直の優しい心にもらひ泣きしたのであつた。

直次郎は宗俊を見とめて當然といひかゝつた。けれど宗俊の口から自分の今迄の成行と同一な今の身上を打明けられた時、今迄の張りつめた氣持がぐつたりしほれてしまつた共に依田親娘のエチキに成つてゐた思ひさを嘲笑したい氣持にかられた。

寂しく立去つて行く直次郎の後姿を宗俊は眺めてゐたが共に荒み切つた身を省る事も出来なかつた。

「河内山殿暫らく待たれい」——金子市之丞

着に自責した。

人の世の末路、何ぞそれ哀れなる。知盛の叱責に、宗盛清宗は遂に波瀾に吞まれて一片の飛沫と消えた。

早味方はことごとくの敗北に、最後の榮華を西の海に譲え、平家滅亡を目の當り見る知盛の心中や感なきにあらずである。

自力も、かたく悲運に所詮挽回の効も無く自滅する苦悶の底に知盛は如何に喘ぎ悶えし事か？

璽の浦に月かける——
惨風悲風茲に一千有餘年——没落の悲運に泣く平家の一門の靈魂は今も猶西海の底にすゝり泣く。

時の流れは總ての存在のうへに「無」の足痕を残して、空しく永遠に過去つてしまつた涙も、怒りも、呪ひも悔いも總てがいっしか果敢ない忘却の底に葬られてしまつた。

◇

此處は京洛清水北阪の傘屋の店先。娘やどりぎの愛嬌は道行人の袖を惹いた。此家の主はもう六十の版を越してゐた。丁度其頃、平宗盛、清宗の親子は、璽の浦の一戦に敗れて、次で海に入りしを源氏の

は立去らんとする宗俊を呼留めた。金藏破りの晩の茶杓を面前に突出された時はさすがの河内山もぎつくりした。けれど友情に厚き市之糸の言葉に、宗俊は必々と自分の罪積の数々を思浮べて、改悔の誓ひを立てずにはゐられなかつた。

通りがりの蕎麥屋で偶然に出會つた直次郎と丑松は、とり／＼の盜賊の噂話を聞いてゐた、三千歳おいらんが、寮に病氣保養に來てゐる事を何氣なく聞かされてゐた。

直次郎は、三千歳が、お直の後身とは夢にも知らなかつた事だから。

怪し氣な眼の鋭い奴が一人ぶいとれんをぐづつて這入つて來た。と又別な男が這入つて來た。——少し間を置いて又一人、其後からもう一人、都合四人のいか者野郎が這入つて來た、直次郎と、丑松の視線は、突然にくる／＼ともつれあつて何事かを語つた。

ぶいと二人は表へ出た、お、ツッしまつた。用心しろ、——と互にさう無言の面が語り合つたと其時早捕方の一人は眞向から飛かゝつて來た。すらりと體をぬけると腰の藥物鞘を抜つて三尺の光流、陽の光にキラリと光つた。

お直は河内山宗俊の身受に心がうちむぢしつてゐた。

——あの敵も同然な男に、何て我身をまかせて、後は聲がかすれて涙がぼつとり膝の上に落ちた。

突然荒々しく取亂した足音が廊下に聞へて三千歳の部屋に闖入した。

「あつ直さん」

「お、お直か」

くしくも二人の巡り合はせ。

お直の三千歳は、又しても河内山の身受の一件に直次郎と逃て呉れと頼むだ。

二人の話の最中に河内山はぬつと這入つて來た。

「直さん、三千歳を永く可愛がつてあげなよ」身受と共に二人の幸福が眼前に激しい觀喜の渦が卷いた。——早く、早く、手が廻つたぞ、さう叫んで宗俊は部屋から飛出した、絶讃絶命、宗俊は全身血だるまで立腹斬つた、直次郎も丑松も意固地なく御用辨になつてしまつた。

「お前さん」……お直は直次郎の前に馳膝ついた。

河内山宗俊は苦悶の中に太く息を吸つて「二人は屹度添つて呉れ……」

手に生捕られて入洛したのであつた。市中は其爲に時ならぬ喧騒が次から次ぎへ傳へられてゐた。

嘆ずる者、諷へる者、源平二派に別れる市民の聲は時として渦を卷き起した。

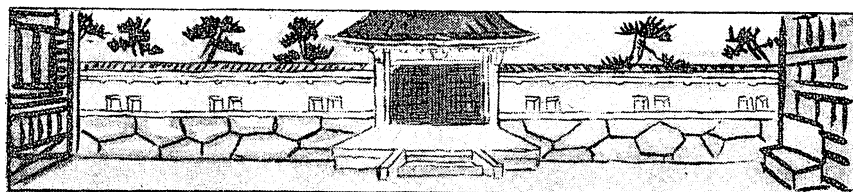
駿河次郎は、副將をか／＼餘屋の前を通りかゝつた。後より乳人冷泉取亂し乍らそれを追つて來た。そして駿河次郎の手から副將を奪返さんと懸命に陳情した。けれど駿河次郎はがんとして聞入れなかつた。冷泉は猶もしつこくすがつた。

やどりぎは痛ましい其の光景を目の當り見た法橋の次男小藤次が立派な武家姿で餘屋の店頭に立つたのは其から間も無い頃だつた。

先年突然妾をくらませて、父姉を心配させてゐたが、今その懐かしい姿を見て父姉は吃驚して臉をしばたゝいたのであつた。

去るんぬ壇の浦に出陣して、宗盛生捕り、それは小藤次の挨拶の珠動だつた。

法橋は初めて二人に物語つた、やどりぎは我子に非ず、平宗盛こそ餘屋の俸と二人は愕然として色を失つた。やどりぎ、其こそ眞平氏が姫御前だつたとは。



九月の中座上演

和田合戦女舞鶴

板額門破りより
市若切腹まで

浅利興市は懸命に宙を飛んで藤澤入道の館の表門に駆け付けた。

在柄の平平太胤長が、實朝公の息女、イツキ姫を害した事を聞いて『すわこそ一大事出来』それであつた。

けれど門は堅く塞ぎて中々開けて呉れなかつた。その口上が斯うだ。

『興市、其方が妻女板額は、在柄の平太とは従弟同志、

主殺しの一族、入館する事はまかりならぬ』
相手がそんな紋切型に出て來た所でひるむ興市ではなかつた。

『オ、サ、さもあらんと存ぜし故に、今日前にて板額を離別せん、愚妻板額を連れたりやアオ、板額急いでこれへ』

大きく呼ばはる聲に『あひ』と答へて板額が出て來た。

扱て板額の面を黙つて見詰る興市は一度唾を呑み込んで言葉の緒をつないだ。

此度従弟の平平太が實朝公の息女イツキ姫を殺害した、其の出来事に自らは評定の役儀を蒙つてゐる。けれど板額がその従弟たるが故に、自らは一列をはづされやうとしてゐるのだ。それでは興市の武士道がたゝない事になる。其處でさつぱり縁を切つて、他人となつて平太の詮議、福の鏡を磨かん爲め暇を

呉れるといふのだ。

『必ずしもむごいとはかし思ふなよ、これ板額』

興市はさう云つて後から附加へた。

けれど板額は離縁について不服を申立てた今年十歳になる一子市若の事も氣にかゝり、まして三十路を過ぎての此身を不縁に終らしたくないと云ふのである。

けれど興市の決心はぐわんとして動かなかつた。

日頃の氣性に似もやらぬ未練者め、早く此場を立去れ、さう云つて腰の差料を板額に投げやつた。

突然門の中から四郎の哄笑する聲が聞へた。二人の離縁を内證の談合で、四郎を一杯喰

さうとの工だと云ふのであつた。興市は其言葉に奮然となつた。在柄と縁を切つた某、是非門を打ち破つても遠ると云ふのである。

四郎は冷笑して、理不盡に門を破つて通らば君へ對して狼籍、叛逆人も同然だ。

破れるものならさア破つて見ろ。それには興市も弱つた、そして地駄んだ踏んだ。板額は良人への奉公は此事と、涙拂つて、實に誠に去られし女房は、三界に家無し、家が無け

れば主もなし、誰に憚り遠慮せん。勇婦板額がさう叫んで満身の力を込めて、門を押したのであつた。だが門は嚴重にして少しのゆるぎも見せなかつた。

『幾ら力自慢の板額でも、まさか此門は破れまい、それ者共笑へ〜。けしかけるやうな哄笑がどつと門の中に起つた。板額は無念と、其時屋根より落ちた櫓で門に穴をあけた。そして金剛力で、ゆさ〜と門を押付けた。あら不思議、今迄嚴然たる門も忽ちゆるぎ出し、屋根の瓦は地上に壓ちてみぢんにくだけた、そしてさしもの門も物の美事に碎かれたのであつた。與市は其様を眺めて眼に角を立てた。

『門を破つて通るなら、其方の力を頼むべきか、上へ對し狼籍者、俱に不覺の名を取らず、言語同斷不届き女奴』

板額は案に相違な良人の言葉に茫然となつた。

けれど其處へ使者がやつて来て、城の九郎が面會するとの口上をもたせした。與市は喜び勇んで入館したのであつた。

市若初陣

先に實朝公の姫を討つた平平太は何れへ

か逃亡して其の消息を絶つてしまつた。けれど將軍家に於ては平太の替りに、一子公曉の首を打つて差出せとの命令が發せられた。

公曉は前に尼公殿から、お前は先將軍のお胤であるとして知らされてゐたので、板額は一子市若をして、平太の一子と欺かし、公曉の身替りに立たせようと決心したのであつた。

けれど今まで長の年月手しほにかけた愛子を、むざ〜殺す事は實に板額の身に取つてどれ程悲しかつたか知れなかつた。

けれど、忠義の二字と、武士道の道にはそれ等の私情も抛たなければならぬ。武士道を説く彼女の心はともすればくちかればやうとした。子供心に譯もなく、武士の子としての教訓に只忠義をしたい〜と云ふ辛苦に對して、板額は未代まで名を残す

大きな、大きな手柄をさせませう。——若しやに我身がますが、子の公曉で主殺しの胤があつて君より討手が来りなば何としやうと、聞きたゞすに、主殺した者の子と指さし逢ふより、立派な武士と云はるゝ氣、潔く腹切つて、と市若はこざかしくも母親の涙に濡る面を見上げたのであつた。仕組む狂言に市若はまんまと乗せられて——たゞ忠義に死ねる——此一事が子供心にも深く〜大きな歡喜への誘惑となつて美事な最後を遂げて行くのである。



額板の王梅故

僕のペエヂ

田中總一郎

最近の劇場の傾向が、東京大阪共に、左翼的演劇を以つて、在來の純正歌舞伎の鑑賞者を解放し、新しい、別個の觀客層に呼びかけようとしてゐる事實は、面白いことである。

然かも、それが、資本主義的劇場に於て、勇敢になされつゝあることは、そもゝ、何を物語るか。

これは、一時的現象であらうか。

それとも、深い根底のある萌芽であるか。

—ただ、僕は、はつきりと、これだけのことは斷言することが出来る。

現在の大衆は、たしかに、それを、この傾向を、求めてゐる。

この傾向が、一時的現象であらうとなからうと、ただそれだけの理由で、充分に存在の理由がありはしないか。

『第一劇場』の運動は、色々の意味で、問題になり得る運動である。

その批判に關しては、僕、又、一言を持つてゐる。第一回公演を批評された大阪の各新聞社の諸氏及び『演藝月刊』の諸氏の文章を讀むと、皆一様に、好意ある苦言を呈されてゐる。

苦言である。——苦言であつて『御座なり』ではない。

ただ、それだけの事實が『第一劇場』にとつてはどれだけ喜ばしいことであつたか。

『默殺』や『御座なり』の批評が、どれだけ不愉快なことであるかは、それをうけた経験のある者にとつては、再言を要しない。

『第一劇場』が、諸氏の前に、判然とした對照物となつた事實は、澁んだ大阪劇場の適時な換氣法では

なかつたか。

毒舌の爲め毒舌でないかぎり、罵倒の爲の罵倒でないかぎり『第一劇場』は、今後、益々、諸氏の苦言に教えられるものとしてゐるものである。

『第一劇場』は、その呼びかける観客層に就いて、在來とは異つた目安を持つてゐる。

換言すれば、在來の『芝居を知つてゐる』人達ではなく『芝居を知らない』人達が、その目安である何等の豫備智識なしにみてゐられる演劇——そこに新しい國劇の樹立を企てることは、萬更無意味なことではあるまいと思ふ。

必ずしも藝術至上主義ではない。

必ずしも『大衆文學』ではない。

『昨日の演劇』でもなければ『明日の演劇』でもない。

ただ一點、あくまでも『今日の演劇』を樹立しようとする努力である。

狂言の選定に關して、その適不適を批評されるのは自由であるが、當事者は、決して、やつつけにそ

れを決定してゐるのではない。

そして、また『第一劇場』に關しては、それが、一俳優の爲に特に選定された事實のないことは、俟責任を持つて斷言できる。

例へば、第一回公演に於ける『永遠の偶像』である。

石割松太郎氏の言を得れば、その作中の一役を演ず一女優の爲に、この一幕が選ばれた不適を吐責されてゐるが、事實は決してそうではなかつた。

『永遠の偶像』が先づ決定した。——そして、その主役を演ずる女優の人选をしたのである。

たまく選ばれた女優の演技が成功しなかつた事に、その演出は失敗したが、それは、あくまで演出の失敗であつて、それ以外のものではない。それ意外の關係をうける謂れはない。

『永遠の偶像』の藝術的價值にまで言及されてゐる石割氏の評言には服しがたい。

敢て遅れ走せの蛇言を弄する謂れである。

先月、この頁を休んだことは申譯がない、これは、必ず休まない決心である。

板額と舶來寺子屋

高 谷 伸

板 額

△中座で和田合戦女舞鶴が出るのでそのお話を……

□『和田合戦の話聞きたい』とはできました。ちやうど地獄の釜の蓋のあくお盆に洒落た質問です。だが、とんだ閻魔王だ。

△閻魔さまと合邦なら因縁もわかつてますが、和田合戦とはどんな關係です？

×これは狂言の朝比奈にあるので、朝比奈が地獄で閻魔王に逢ふと、閻魔があんたのやうに『和田合戦の話聞きたい』といふので、門破りの仕方話を、閻魔をこつき廻しながらするの、しまひに『和田合戦の話聞きたい』と悲鳴をあけるのです。

△朝比奈が門を破るんですか。

×それは朝比奈こちらは板額、門を破るに變りはないが、朝比奈だと金平本めいた味になり、板額だと、いかにも並木宗輔

の淨瑠璃らしい。この淨瑠璃は元文元年の作で、宗輔のものでは那須奥市西海硯や荻萱桑門筑紫轢についで出来たものです。通しでは滅多に出ないもので、たいてい三段目の門破りと切の市若切腹の段とです。

△こんどは福助がやるのですが、先代の當り藝ださうですね。

×梅玉の當つたのは明治二十八年の十月十一日初日の浪花座で前狂言が日本第一和布刈神事、切狂言が戀飛脚大和往來で、中狂言がこの和田合戦女舞鶴でした。そして、それが好評だったので同年の南座の顔見世にもそつくり持ちこしましたが浪花座は午前十一時の開幕、顔見世は七時頃からの開演だったので、右の狂言の他に藤源太物語と饅頭娘を加へました。

△一座はどんな顔觸れでしたか

×鴈治郎巖笑政治郎成太郎珊瑚郎などです。

△役割は、

×板額が梅玉の福助で、淺利與市が鴈治郎、藤澤入道が我藏、荻桐の平太が奥山、藤澤四郎が魁車の成太郎で、市若は故人又五郎でした。今の福助の政治郎は綱手に出てゐました。これらの役々は京都へもそつくり持ち越しましたが、二位の尼つまり平政子にあたる役は浪花座では巖笑、顔見世では又五郎の父の紫琴でした。

△今度は年代記めいたお話ですね。

□この芝居の面白さは、婦人の勇力といふ所にあつて、毛谷村のお園と共に、とかく内にかくれがちな時代の女に、こんな力を見せるといふ意外のところに興味を惹いたのでせうが同じ女の力業でもお園の方にいろいろがあるだけ勝味があります。

△その代り板額には母性愛といふのがありません。

□こいつは一番参りましたね。暑い時分に型の話でもありませんまいし、年代記めいた話も御退屈で、和田合戦の話も、そろそろ『聞きとむない』の方でせう。

△いくら残暑がきびしくてもそれだけではあまり物足りませぬ□では、藝題でも替へませう。

舶來寺子屋

△浪花座では舶來のテラコヤをやります。

×菅四の寺子屋なら私の畠ですから、大いに言ふこともありませんが、菅原傳ジョン手習鑑などは恐縮ものです。

△御存じないのですね。お逃げになる所では

×知らないと思はれるのも癪だから、すこしばかり申ませう。

寺子屋がはじめて外國へ紹介されたのは一九〇八年で、ライオンハルトがカムマア、シユビイレで上演したもので、題は寺子屋です。次が一九一六年から一七年へかけニューヨークの

ワシントンスクエアアプレヤースで演ぜられた武士道です。どちらにも、菅四を忠實に譯したのですが、この外に英國ではメスフィールドの忠義の式で改作した『松の木』があります。今度のは英國のそれでせう。これらのことは第二次演劇新潮の第五號に畏友山本修二氏の紹介に盡くされてゐますからその方を御覽下さい。

△うまく逃げられましたね。

×うけ賣りばかりでもいけませんから、アメリカのテラコヤの演出に就て話をしませう。ドイツの方は中村吉藏氏がその著『歐米劇場』の中に紹介してゐられるさうです。

△アメリカの武士道はどんな風でしたか？

×演出は伊藤といふ日本人だつたさうですが、なかなか面白かつたやうです。

△どんなに面白いのです。

×寫眞を見ると、常足の二重があつて、正面は暖簾口の代りに四枚の襖、それに白描のフジヤマが書いてあるからユカイぢやありませんか。

△大道具はそれだけです。

×だうして、上手には袋戸棚につゞいて軸の懸つた床の間、下手には障子、中央に沓脱があるのもウレシイものです。

△扮装は、

×松王は着附が白地だけであとは普通ですが、頭は總髪（そうまつ）のやうです。源藏（げんざう）はカミシモです。戸浪（となみ）の頭が銀杏（ぎんぎょう）がへしか桃割（ももわり）れのやうに見えます。玄蕃（げんぱん）は大紋（おほもん）の右肩（みぎかた）をぬいで控（ひか）へてゐますが赤ヅラ（あかづら）ではなさうです。大ぜいの村（むら）の者（もの）は男女（なんにん）とりませるますが、女の頭（かみ）は、オールバックです。

△七三（しちさん）や耳（みみ）かくし、斷髪（だんぱつ）はるませんか。

×ませかへしちやいけません。アメリカでも一九一七年（いちじゅういちねん）の話（わなし）です。さらにユカイなのは陣笠（じんがさ）をかぶつてゐる捕手（とて）です。

△一字千金（いちじきん）二千金（にせんごん）といふ幕（まく）あきは、

×チヨボはすっかりぬきですから、机（つくえ）を控（ひか）えてめいめい手習（てなひ）してゐる所で、五尺四寸（ごしゃくしよん）のよだれくりの The master isn't at home（まへ）といふせりふで、はじまります。よだれくりが戸浪（となみ）に叱（なぐさ）められると、一度（いちど）にいーろはーはーはーと手習（てなひ）をやりま。

△寺入り（てらいり）の件（くだり）もありますか。

×ありますとも千代（ちよ）の Oh it is true, how foolish I am（お、それは私（わたくし）としたことが）など大喝采（だいげさい）です。

△首實檢（くびじけん）は、

×ルーパン（るーぱん）といふ俳優（はいゆう）の松王（まつおう）が、

Well there is no doubt, this head is Kanshusais, there is no doubt

菅香才（かんかうさい）の首（くび）に相違（さうい）ない。よくうつた。とやるのです。

△幕切（まくきり）は、

×いろは送り（おくり）がないからはなはだ簡單（かんたん）で、小太郎（こたろう）の死骸（しかい）を送（おく）つて松王夫婦（まつおうふうふ）が手（て）をひきあつて白無垢（しろむく）姿（すがた）で奥（おく）へ入（はい）るので終つてゐます。

△手（て）をひきあつて入（はい）るのはうれしい所（ところ）ですね。

×このブシドウは邦譯（ほうやく）すれば大體（だいたい）チヨボなしの寺子屋（てらこや）に還（かへ）えるわけですが、今度（こんど）の英譯（えいやく）のは、だいぶ變（かわ）つたものになるのでせう。

△どんなものでせう。

×私はまだ讀（よ）んで居（ゐ）ませんから何（なん）とも言（い）へませんが、メスフィールド（mesfield）の忠義（ちゅうぎ）が小山内（こやまうち）氏の譯（やく）や演出（えんしゅつ）でもあれだけのものだったのですから、松（まつ）の木（き）もよほどむづかしいと思（おも）ひます。忌憚（きだん）なく言（い）へば、日本物（にほんもの）の逆輸入（ぎやくふにゅう）は、それが日傘（ひがさ）であらうと、パツピ、コートであらうと、版畫（はんが）の研究（けんぐう）であらうと、歌舞伎（かぶき）の複譯（ふくやく）であらうと、その本場（ほんば）へ持（も）て歸（かへ）れば、嘲笑（てうしやう）以上に値（あた）するものはまづないでせう。

だから、私は結論（けつろん）します。かなり退屈（たいくつ）しても板額（いたがく）の方が純粹（じゆんじゆん）の日本（にほん）ものだけに、日本人（にほんじん）には面白（おもしろ）いだらうと思（おも）ひます

我童の口もと

中井浩水

話は私事にわたるが數年前、母の亡くなつた日、その頃玉屋町にゐた私の宅へつゝ入つて來た人がある、一應の挨拶あつてツカ／＼と奥の間へ通り母の枕元に坐し自我惚だつたかの短いお經を口の内であけて暫く回向の後ブイと歸つていつた、それは片岡我童である、近所であり又僕以外僕の家とも古い馴染ではあるが我童の平常には役者らしくない一風變つた處がある。

然し舞臺の我童には僕常に嫌らない、それは彼の持つ不思議な藝に對してである、泣くべき時に笑つてゐるやうに見える、笑ふべき時に泣いてゐるやうに見える、頗る複雑な奇表情であるある人は『それはきつとカンの虫のセイだらう』といひある人は『顔面神經の異常なる發達である』と斷じてゐる、カンの虫は松島家代々のおゆつりである、先代仁左衛門は舞臺ではあまりかうした癖はなかつたが酒の上が猛烈だつた、今の仁左衛門は且つ舞臺の上でも皆さま御存じの如く、腹を切り乍らそこら

の物を片附けたり、泣き乍ら疊のケバをむしつたりする、我童の妙な表情も畢竟カンの虫のせいだといふ議論は『遺傳』といふ假説の上から一應はもつともである、僕は醫者ではないからそれが顔面神經の異常な發達か、すなほな生長が明かにしないがこの妙な癖は我童が妙に口をゆがめてはあいたり閉いだりする處に揭焉である。

もう一つこの人の歩行癖が珍だつたが近年大分にこれがうすらいで來たのは嬉しい、唯、例の口元の引釣るのだけやめてくれると大いに見物は救はれる、チヨボ入りの大愁嘆の時、ひよいと口をゆがめて冷笑してゐるやうな藝當をやるので力を入れて見てゐる方が拍子ぬけをする。

我童の舞臺顔が美男であることに誰れも反對はするまい、女に扮すると美女である、美しいといふにもいろいろある、我童の美男、我童の美女はどうも惚れ氣がさゝぬ、人はすき／＼、少くとも僕はあゝいつた冷たい美男や美女には魅力を感じない某氏が我童のことをビスケットといつたさうだ、ビスケットは面白いと思ふ。

大阪歌舞伎の一方に雄視せねばならぬ我童、五十にはもう二

年といふ役者さかりの我童、事實は知らず外見からは何となく不遇のやうにも見え、當人も何か平かならざるものを常に懷抱してゐる如き我童の藝は畢竟は大根か、僕はこの人は用ひ方一つでどうにでもなる人だと思ふ、後の梅川のあの陰影、唐人お吉のうらぶれ、あれ丈けの藝を見せる我童に堀川の與次郎をさせたりしたくはない、一節切り權八も今に眼に残つてゐる、この人に又しても朝顔をさせてひく三味線でヤンヤと云はせ度くはない。

◇ 又某氏が『我童に大菩薩峠のお角をやらせて見たい』といつてゐた、お角などは成程この人のものだらう、我童を生かすも殺すも役にある、脚本にある、當人の心得て好いのもあの口元である、あれがどの位に藝を損じるかもわからない、これは餘談だが大阪役者には顔に妙な癖のある人が少くない、故人吉三郎がその尤なるものであつた、今の右團次がやゝもすればバク／＼と駄による鯉のやうな口をする、我童のチウインガムを嚙んでゐる如き癖はこの鯉と双壁である、こんな双壁は二人とも早く改宗する方が好い。

◇ 九月の中座で福助、魁車、我童と立役もやるが女形畑の三人が一座するのは興がある、三優ともに異色はあるが共通して

冷艶の二字に盡きる、九月といへばまだ残暑がきびしい、冷艶な藝で見物も冷殺するもよからうがあまり冷えると腹をこはすからその處はよろしく願ひ度い。(畢)

板額の芝居

森 ほ の ほ

『板額』とか『板額の門破り』の方で通つてゐる『和田合戦女舞鶴』は、近頃とんと出ないやうですが、以前『緞帳』と呼ばれた東京の小芝居では、度々上演されたやうに思ひます。その頃は、センチメンタルな、涙のシバキが喜ばれたので、わざわざ芝居を見に行つて、泣くやうな狂言が無かつたら、大衆にとつては實に物足らなかつたのです。さういふ時代でしたから、これだの『盛綱陣屋』だの『千代萩』だの、子役がシンになつて活躍する狂言は歓迎されたのでした。

人形の方でも見た記憶があります。板額より忍び姿で、龕燈を持つた奥市の方が眼に残つてゐるのも不思議ですが……。

『書生しばる』の山口定雄もこれを演つたやうに思はれますその時、奥市をしてゐたのが、伊井蓉峰のやうな記憶があるので

すが、どうも確ではありません。こんなわけで、この狂言も三度見たのですが、年少の私にはその筋もよく呑み込むことが出来ませんでした。そして、どうしてかう自分の頭が悪いのだらうと、いつも情なくなるのでした。それからすつと後の多見之助（後の多見藏）の板額を本郷座で見ましたが、その時もやはり前後の關係が能く分らず、徒に少年の時代が想ひ出されて、何となく心が暗くなるのでした。それは多見之助が、東京へお目見得の出し物であつたのですが、それにしては、餘りにバツトしない狂言を選んだものだと思つたのを覚えてゐます。

私が多見之助を見たのは、これが最初でありました。

板額が門を押し試みる時、長刀を掻い込んだ手で、着物の裾を被どるやうに持つことや、懷紙を門の柱へ當て、押すのなどは昔から定つた型のやうです。多見之助のもこれらの傳統の型を尊重したものであつたのでせうが、今は何の記憶も、印象も残つてゐませんのは遺憾です。

この狂言は前にも申したやう、子役の芝居であることが『盛綱陣屋』を連想させますが、半二は『陣屋』を書くに當つて、この院本にヒントを得る處があつたかも知れません。そして、物された結果は、半二の作の方が優秀であるのは申すまでもありませんまい、全くこの狂言は、見物に受ける處はその内容ではなくて、市若になる子役と、シテの女形の剛、柔の両面をカツ

キリ見せる處にあるので、役者の腕前一つで見せる芝居でありませう。昔、富十郎のやうな女形が、江戸の舞臺で好評を博したといふのも、この理由からだと思ひます。今度の福助氏のは梅玉譲りとのことですから、面白い型も多いだらうと期待してゐます。

この『和田合戦』の悲劇を起す動機となるものは、板額女の從弟に當る荳柄の平太だが、この平太を中心に脚色した芝居と、朝比奈三郎を中心にしたものとがある。活歴で演じたといふ團十郎の『星月夜見聞實記』その以前同じく團十郎の演じたところの『鎌倉山春朝比奈』がそれであるこれはいづれも黙阿彌翁の作だが、この九月帝劇で上演される新作の『鎌倉御所』は、前述の『鎌倉山』と出所を同じくするもので、これは朝時朝比奈、松島ノ局の戀愛悲劇である。板額女を脚色したものは全然別物だが、和田合戦に胚胎してゐることだけは同じである。

板額といふ女武者は、鎌倉倒幕を企てた城ノ九郎の娘で、矢を能くしたがり、自分も敵の矢に股を射られて虜になつた。頼家がこれを引見したが、阿佐利義遠なる家臣が所望して妻にしたといふ。この阿佐利が、今の左團次君の妻女淺利氏の祖であるやうに聞いた。ついでだから書き添えて置く。

（舊曆、地藏盆の日）

『切られ與三』と長二郎

樋口二葉

『石の上にも三年』だか、舞臺俳優から映畫俳優に志して最う三年以上を夢の様に過ぎた長二郎は、獨り松竹キネマ時代映畫の秘藏ッ子ではなく、各映畫會社を通じて時代映畫の俳優中で一番人氣のある、そして若くて、美しく唯一の花形となつてしまつたのである、昨年の八月浪花座で『鬼あざみ』を實演して以來、大阪の映畫ファンは今夏も當然來演するものとして心待ちに待つてゐた折柄突然それが實現して九月の浪花座へ、新興の第一劇場へ加入して村井富男氏の『痕』二幕に出演する事に決定したのである、實に大阪の映畫ファンは惠まれてゐるとせねばなるまい。

映畫に現はれた長二郎の『與三』に就ては、當時三四の映畫評にも見受けたがその多くは、『若くて餘りにも美しく過ぎた』と云ふ點で一致してゐた様だつた。……それは共演の浦波すま子のお富が長二郎の與三郎に比して少しフケてゐたせいにもよる……が、兎に角同狂言に就ては從來芝居でも『立治店の場』だけしか一般に知られてゐない關係上、潜在的に、切られ與三は單なる色男ではなく、ならず者、惡黨としての印象が深いわけで無理もないが、そんなところから長二郎の與三は、惡黨にしては若く、物凄三十餘ヶ所の刀痕すらも、かへつて美しく見えたものである、勿論、默阿彌の原作でも與三は惡黨にも、ならず者にもなつてない。たゞ、主家の名刀北斗丸を探し出す爲めの浪人に過ぎない人物なのである。





大體切られ與三のモデルは、史實に依ると、當時四代目芳村伊三郎で、お富は江戸本石町の駕籠屋川村政助の娘お政である、そして伊三郎がまだ三代目に弟子入りをして伊千五郎と名乗り美音の評判が高かつた頃、木更津で暮してゐたが、その土地の親分明石金右衛門（芝居の赤間源左衛門）の圍ひものだつたお政と戀仲になつたのが始まりで、幾多の破瀾を起したのを、乾坤坊良齋が講演し、それからヒントを得た點阿彌が狂言にしぐんだもので、事實の上から見ても切られ與三は悪黨でも何でもないのである、たゞあとに至つて色々に書き替へられ、與三を悪黨の様に仕組まれたのである、それはその時代の殺伐な觀客の感情が必然的にかく要求され、自然芝居の上に現れたものに外ならないのである、だから、長二郎の『切られ與三』はこの意味に於て、寧ろ、默阿彌の原作よりも、モデルとなつた、伊三郎、お政の事實に近く脚色されたものであると、こちづけられなければならない事もないわけである。



さて、若くて美しい長二郎が愈々與三役者として、村井氏の『痕』に主演するが、その劇作の意圖が何れにあるにもせよ、與三役者としての長二郎は昨夏の『鬼あざみ』以上に成功するものと信ずる……たゞ『明日への演劇』の爲めに意義と存在を見出して雄々しくも起つた壽三郎の第一場劇へ、假令一時的にもせよ映畫俳優として全く異つた途に立つ長二郎が加入する事に就ては座組の責任者である松竹に對し別な意見も存するが、この種で述べ可き筋合ではない……要するに今度浪花座の九月興行こそ、大阪の映畫ファンは、特に長二郎黨には『痕』二幕は見逃すべからざるものである……これだけは間違ひのない話であらう。（寫眞は映畫『切られの與三』に活躍した長二郎）

第一劇場の社長賞 時計直しの英ちゃん

新谷誠太郎

御所三の辨慶上使の條りでは、例のおあさが、娘のしのぶに『林の中でも高い木はなア！』と戒め仁丹の金言には山高きを以て尊からずと訓じてある。

四年程前、辨天座の日蓮の芝居で、加藤精一クンが來阪した時、一座の中に恐ろしい脊の高い役者がまじつてゐた。即ち『山高きが故尊からず』餘りに脊が高すぎて他の役者との比較が取れない、端役で辛抱をしてゐたが、何處か持味のある男だつた、脊に比較して調子が馬鹿に高い、その頃の流行

劍劇の敵役には、もつて來いだ、間もなく此役者は新潮座の敵役として活躍を初める、これが進藤英太郎クンである。

貧困時代といふと失禮だが、いまだ獨身で、住所不定であつた英ちゃん時代には、このまだ名もなさない一介の役者に血道を擧げた一流の姐さん藝者がある。色氣ぢやない英ちゃんに泊つて貰つてゐると心強いといふのである、用心棒にもつて來いだ、まだ都合のいゝ事がある、英ちゃん時計直しとん、山高き英ちゃんには、ブン／＼時計のゼンマイを捲く位

は、お茶の子さいさいだ。林の中でも高い木故、一流姐さんの家形入りが出來たわけである。

道頓堀に、もう一人、高い木の役者がある、即ち第一劇場の首脳、坂東壽やんである、この高い木は東京でもまれて、人となつた事は御存知の通りだ、高いといふと、此人の高さ二重の家臺にウカ／＼登ると、鴨居で危く頭を打ちそうだ、それあるゆえんか、壽やんには、しよつちう首を傾しけるくせがある。(失敬) この高い木が、見出されて、新劇の組織に首脳となつて働く事になつたのだが餘りに高きが故に對照物がない、伊勢の二見の岩も同じ様なのが並んでこそ、誰れを持出して、壽やんの敵ぢやない、せめて二見の岩ぐらひのがと、道頓堀を物色すると、いたゞや／＼壽やんに勝るとも劣らぬ、時計直しの英ちゃんがめつかつたわけだ、先に一流の姐ちゃんに見出されたのと、わけが違ふ、少なくとも、名門坂東壽三郎クンを向に廻して、お七五三を張らふといふのだ。

英ちゃんなるもの飛んだ好運に向いて來たわけだが、その時分の當人、一向それは知らなかつた、演出の田中くん、或時は白井社長直接、英ちゃんの舞臺をこつそり試験をやらかすと、ウン却々使へるぞ、いゝ味がある、これは矯めたら物になる、斯くして樂天地の一隅から、浪花座の檜舞臺にひろひ上げられたわけだが、成程、壽やんと並ばすと、まことにゆるぎない二柱だ。



けれども當の英ちゃんになると、山高きが故に、見出されたなんて知る由がない、認められたといふ嬉しさは、腕一杯に働いて見せる、よつかつて行く所が壽やんだ、ウンと胸でうけてよいしよう、モウ一番ぶつかつて來いの口で稽古は足りる、一生懸命にはなる、今度の社長賞を頂戴するの光榮又むべなる哉だ、この社長賞は自宅で妻君が、やつぱり家の人はと頗る上機嫌であつたばかりじゃない、飛んだ方面へ御利益があつた、過る日、英ちゃんが、神戸でやつた政談演説會、村の除け者にされてゐる候補者と知らずに、竹馬の友とやつてのけたばかりに、候補者とは同村であり、親同志が仇だつたといふ、いろいろの神に藝者から、あんな男と竹馬の友なら、ろくでなしとあつて、絶縁の宣告を受けた女から、この社長賞に見直されて改めて逢戻りの電話がか、つて來た英ちゃん嬉んで社長賞をそのまゝ、奈良の月日亭で全

盛をつくしたとか、もう英ちゃん、時計直しの時代ぢやない、腕時計のゼンマイのゆるみは書生が直してくれる、まことに英ちゃん出世の巻となつて、御所三のおあさが照れ、仁丹の金言が小粒と共に、のみ込みをして丁はねばならなくなつたわけだ。但し『出る杭は打たれる』今度は布つたくなる事でこの上高くなるとそうれ、鴨居所ぢやない、葡萄棚の吊り物でイヤといふ程頭をぶつつけるとも限らないわけだ。

山高きが故に見出された英ちゃん林の中でも高い木であつた故の英ちゃん、いつまでも時計直しの英ちゃんであり度い。

料身美のヲトパオレク
たつ造でルイオムーパ
蛸 竹松

山口俊雄君を見る

岡 島 眞 藏

本誌先輩よりの懇請によつて山口俊雄觀を述べて見たいと思ひます併し有様に申せば私はそれほど山口君を知らないのではありません先年、新聲劇時代に一二回見た事もあつたがこれとても兩三年前の事である。

今回第一劇場の旗舉興行に出演せられ殆んど始めて同君を見たと思ふ位のものであるから或は同君觀を述べる資格が薄いかもしれないが却てこの淺薄なる觀察が平凡なる第一印象として正鵠を得るかもしれないと思ふ。

山口君が今回第一劇場に参加せられ壽三郎、小堀、石河等と共に出演せられる事になつたのは同君の爲めに非常に喜ばしい事と信じます、なんとなれ

ば同君の藝術には將來大に囑望すべき點の多大なるを認むるもので又同君が藝術に精進し得る急進路たるを疑はないのであるから大賛成を表する次第であります。

正直に申せば新聲劇時代には非常なる熱演なるにも係はらずその眞價を充分に發揮し得なかつたであらうと察しております、先づ今回の第一劇場の持役を批判して同君の参考に供したいと思ひます。

特に優れておつたのは『飛ぶ唄』の立川であります。第二場遠山の家で友人遠山（壽三郎）に對する舊友たるの態度より友誼の最も厚くしかも宜海に誘導せんと熱心に説くより却て遠山の

現政情を非難し藩閥攻撃の論議に知らずくの中に引き入れられ誤解か疑問かの中に官海にある自分の精神的空虚に何等かの覺醒を與へられつゝ、進み寄るあたりは實にその人になり切つておると思ふ、尤も遠山（壽三郎）の努力如何にも依る事であらうが同君が立川の役處を充分に諒解し終始一貫眞面目に力演した結果として大に推賞したいのである。

次は『永遠の偶像』相場師渡邊でこれは甚だ申し難いが不出來であると思ふ、第一本宅には妻子もあり立派な親類もある身でありながら格違ひの若い妾を持つ程の立派な相場師とはどうしても見えない精々出入の骨董屋か又は極程度の低い仲買店の注文取り位しか見えないのは總ての動作で認められる殊に彫刻家植村（小堀）との對話中は常の状態を物語る中に知らず／＼椅子を寄する邊りは實にわざとらしく觀客に何等の面白味も與へない、寧ろ植村

（小堀）に對し上滑りのお追従位にしか見えない（尤も原作もその意を含みしならんが）が今少し自分の親昵を表はして植村（小堀）の不平に共鳴しつゝ、幾分訴へる程度に見えないと面白くないと思ひます。即ち演出の不備を物語るものでありますゆへこの一幕を面白く見せなかつた事には同君も幾分の責めがあると信じます。

第三の夢の浮橋の駕籠屋源六はこれもあり出來のよい方ではないが何分にも相手のお小夜（八雲恵美子）があまり惡る過ぎるから定めし同君も演じ難い事であつたらうと思はれて大に同

大衆に呼びかける

現代を、米國の或る學者はコウ説いてゐる「人間は未だ今日の様に休みな

情する。このお小夜次第で相當演じ活かしただとも思はれる故に本役は可もなし不可もないと致しておきましよう。上述が最近の同君觀であります。これに依つて將來同君に望む點を一二述べて見たいと思ふ。

私は前述の如く同君は將來藝術的に充分に進展し得る素質の充満せるを確信するものであるから目下の状態たる第一劇場の如き大衆的劇團の同人として壽三郎、石河等と共に飽くまでも縦横邁進せられん事を祈り終始一貫眞剣味を以つて「飛ぶ唄」の立川の如く理解と熱演をのぞむ者であります。

京谷三八

く發達する興奮状態で生活したことはあるまい若し昔の人が生れ代つて今日

の世相を眺めたならば、恐らく「今や人類は發狂した」と云ふのが、その第一印象であらう」と、實際現代を觀察したときにはこうした興奮が千狀萬態に至るところに現れてゐることを感ぜずにはゐられないのです、そして此意見には大體に皆さんも賛成して下さるだらうと思ふのであります。

◎此の言葉を私はプロローグとして置きませう、偕て阪東壽三郎の第一劇場――

之れを私は單純なる新劇運動としては見たくない、大衆が、今の行き詰つた劇界に強い慰樂と共鳴と緊張を感じたいと云ふ要求が自ら發して、此處に此の劇團の誕生を迎へたものであると考へたいのです、それでこそ私達が此の劇團を此處に考察して見る價值があるわけだと信じます。

◎壽三郎に石河を添へて、之れを中心としての座組みから考へると第一回興行は私はその發表に時日が無かつたと

しても余りに粗雑なものであつたと思ふのであります。

『飛ぶ唄』は兎に角お妻八郎兵衛は作者田中君が新しい目で書き替へたものであるとしても淺はかな無理な殺し場を結末にすることがお伽噺、傳説風な生ぬるさを觀客に與へてゐるわけで、此の筋の運びが此の劇團の狙ひ處を外れてゐると思ふのであります。

◎又『永遠の偶像』に八雲と小堀を出した、今度は『痕』に加茂から長二郎を連れて來て、山口が蝙蝠安で、つき合ふといふところは私はどうも解しにくいところであります。

或は『第一劇場』をより世間的にする爲に、大衆の寵兒である八雲恵美子や林長二郎を借りて來たことが、丁度商品の宣傳に美人藝妓やスターをレッテルやポスターに利用すると同一筆法のものであるとすれば、それも宜しからうがさてそれでは八雲もつまらないし長二郎もつまらないわけであります。

◎私は此の劇團はドコまでも壽三郎を第一人者として育成するエツフェクティブな組立てが肝心であらうと信じます、泣き笑ひ怒るが一つの定型になつてゐる様な型の芝居を本筋に育つて來た壽三郎と自由な芝居をして來た石河や山口等々、此の二つのものが合流したところに味のある變つた劇が生れて來ることは明かであります。

◎其處に重大な役目をするのは脚本の選擇であります。私がプロローグにした現代の興奮状態が休養を求めるのは一つは精神の弛緩である笑ひである他は強烈な刺激であります。

死んだ澤正が死ぬ前に演じたものは現代味の多い刺激の強いものであります。鐵砲疵と刀疵を解らない様なストリーや舊紙の内容も極めずに人を斬る様な筋は避けねばなりませんまい。

◎それから此の劇團を育成するには道樂氣が一番避けねばならぬことであります例へば今度の一字題の『脚本』ば

かりをならべたのは悪い道樂氣であらうと考へます、大衆は激情と本能と興奮と刺激に目まぐるしい生活をしてゐるその大衆に呼びかけて行く新しい劇團が『松』『痕』なんて姓名判斷の様な題名を羅列したところは余りに亂暴な不注意であります私はニクソンのサイコロダイ、フオア、ゼ、ライターと云ふ書物を一度讀んで貰ひたいと考へます。

そして現代味に即して脚本を選んで第一劇場の進路を太く壽三郎を力強く現して貰ひたいのであります。

(四、八、二一)

×

×

×

×

大阪市西區土佐堀通壹丁目

永井日英堂印刷所

電話土佐堀
四九四〇番
四九四一番
三〇八三番
振替大阪一九三九〇番

劇壇その日く

八月一日 ▲浪花座の壽三郎を中心にした小堀、山口、高田、石河、八雪等の第一劇場

第一回開演は第一「飛ぶ唄」第二「永遠の偶像」第三「夢の浮橋」で本月初日を出す
▲松島八千代座の我童、扇雀を中心にした涼み芝居は「旅路の花翠」「假名手本忠臣蔵」「絳鹿子地獄」「生寫朝顔日記」「玉兎彩望月」で本月初日を出す。

八月七日 樂天地の新潮劇お目見得狂言は本日限りで打上げ、明八日より第一「家庭病中毒」第二「地獄街道」第三「崖下の殺人」で二の替りを出す。

八月十日 松島八千代座の我童、扇雀等の涼み芝居は本日限り打上げ。

八月十一日 三十一日初日を出した角座家庭劇お目見得狂言は本日限り打上げ、二の替りは十四日より。

八月十四日 ▲角座家庭劇二の替りは第一「日曜日」第二「通り雨」第三「オールドミス」第四「地蔵盆」第五「小間使以上」で本月初日を出す。▲樂天地の新潮劇二の替りは本日限りで打上げ。

八月十五日 ▲松旭齋天華一行樂天地へ出る▲道頓堀松竹座は岡田時彦の實演劇「地獄のドンファン」を新映畫にはさんで本日より上場。

八月十六日 壽三郎の第一劇場第一回開演は

本日を以つて打上げると同時に舞臺にて終演を兼ね技藝表彰式を行った。表彰された俳優は進藤英太郎に吉田正雄の二人で社長賞として金一封宛の



授與があつた。
【寫眞】表彰された進藤英太郎、吉田正雄（左より）

八月二十四日 松旭齋天華お目見得は昨十六日限りで打上げ、本日より第二回プログラムを出す。

八月二十九日 家庭劇二の替り狂言は本日限り打上げ、來月の角座は新聲劇が出演。
八月三十日 新聲劇の乗込み、午後七時梅田出發、人力車百餘臺で古風な町廻りをして九時角座へ華々しく乗込む。

八月三十一日 ▲辨天座の開場、三ヶ月に涉つて工事中だつた辨天座は愈々工事離れとなり、映畫、演劇、舞踊、音樂のモダン劇場として本日より開場、第一回のプログラムは映畫「名物三羽鳥」發聲映畫「歡樂地帶」に諸口十九の實演「若様セーラー」五景を上場▲樂天地は本日より新潮劇が改造され顔ぶれで出演、第一「將軍の辻斬」二場、第二「悲惨なる家」三幕七場を本日初日を出す▲新聲劇の夕を催す出席者實に八千人、未曾有の盛況裡に午後十時終了

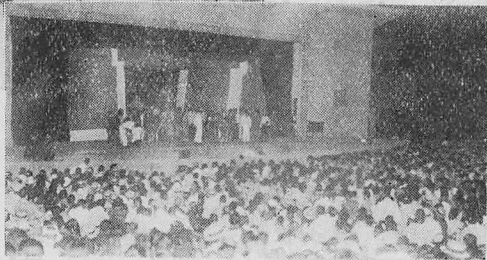
九月一日 ▲中座、福助、我童、娘車、長三郎、扇雀等の大歌舞伎で本月初日を出す、狂言は高安月郊作、食滿南北舞臺監督一番目「境の浦」二幕、上田秋成原作、食滿南北脚色新舞踊「淺茅が宿」常磐津連中、長唄連中、中幕「和合戰女舞鶴」二幕、中井泰孝作並監督、二番目「うばたま草紙」三幕、この度の總配役は平知盛、法橋二男小藤次、淺利與市義遠、片岡直次郎（我童）平有盛、妻宮木、茶屋女お直後には遊女三千歳（扇雀）平宗盛、闇暗の丑松（橋三郎）侍女右近、近所の娘（我久之助）淺利の一子市若丸（義直）平清宗明輩女郎青柳（ひ

とし、近侍藤井八郎(松壽)乳人冷泉、近所の娘(我久三郎)騒河次郎、堀井又十郎、蕎麥屋亭主半兵衛(九國次)唐笠法橋、政子禪師尼公、依田彌右衛門(騾十郎)二位、娘やどり木、河内山宗俊(魁車)牛飼三郎丸、眞田の勝四郎(長三郎)玉虫の前下婢お郷依田の娘お雪(成太郎)近所の娘(鷹之助)侍女小辨、近所の娘(魁車)藤澤四郎清親、捕手頭新十郎(政治郎)町人市助、雀部曾次、按摩己の市(升藏)職人千六、近所の娘、寮の若者平八(肩)荏柄の妻綱手、寮の女將お民(蓮女)妻板額女、金子市の丞(福助)

▲浪花座 第一劇場第二回開演は本月初日を出す狂言は大西利夫作、第一「船」一幕鶴見祐輔作、田中總一郎脚色並演出、第二「母」三幕、タケダイヅモ原作、エム、シイ、マアカス脚色、田中總一郎譯、野淵昶演出雜誌「道頓堀」九月號所載第三「マツ」一幕、村井富男作、大森痴雪演出、第四「痕」二幕で、その總配役はマツオオ、木下一郎颯風源十郎(壽三郎)トナミイ夫人、長谷川治子、おむら(三好)ブロングの女濱子下女お岩、香取、小間使ふみ、その妻お藤(若月)ブロングの女月子、お豊、下女お竹(若宮)チェヨオ夫人、朝子、お富(石川)切られ與三郎(林)ゲンバ、澄男、編蝠の安藏(山口)百姓、山路進一郎、越後の秀松、觀音久次(進藤)百姓、近藤、植木屋乙權十、目明し新吉(吉田正)百姓、銀行員、飛脚子分惣五郎、子分仙吉(前田)サシキー、子分金藏(眼堂)阿呆健吉、美濃屋清七(高田)進(みのる)百姓、植

木屋甲高麗の熊子分權三、同心(山中)百姓、林望高橋、客引吉藏(吉田豐)ガンゾオ、浅山、蛇の目勘兵衛(藤村)

【寫眞】新聲劇の古風な町廻りと天王寺の新聲劇の夕



▲角座「銀蛇番十郎」六場で新聲劇が久々の歸演、本月初日を出すその總配役は左の如し

海賊華亮三郎亮三郎の配下大瀬戸の勘次、柳澤家臣押本

幸次郎(小波)幫間善孝、老人五兵衛(武澤)柳澤家臣奥村善右衛門、手先房吉(鈴木)大盜銀蛇番十郎(中田正造)柳澤家老佐分利次之丞(名越)番十郎配下山邊勝四郎、柳澤家臣長谷川左仲(山本)岡ッ引瀧藏(芝田)岡ッ引文藏、老中柳澤出羽守(藤本)網打幸助(伊川)藝妓駒菊(和歌浦)女將お里(金剛)藝妓雛千代(富士岡)仲居お榮、腰元立榮(吉野)老母お千代(中村)番十郎女房紅蜘蛛お緋紗(富士野)

▲天満八千代座 本月初日を出す右團次、大吉、徳三郎等の花形大歌舞伎は怪談劇「東海道四ッ谷怪談」の通し狂言でこの度の主なる役々は

女房お岩、小佛小平、佐藤與茂七、お岩の亡靈、小平の亡靈、娘お岩實はお岩の亡靈(右團次)民谷伊右衛門(徳三郎)娘お梅(延太郎)乳母お牧(右文次)妹お袖、僧常念(石若)茶店娘お松、魚屋鮮助(若橋)仲間伴助、百姓豊作(右田十郎)子守おたつ(葛雄)女中おふゆ花屋銀六(よし)丁稚葛吉(達雄)藥賣藤八、關口官藏(關三郎)女中おた、女房おひろ(徳次郎)醫者尾扇、利倉屋茂助、講元佐兵衛(徳藏)佛孫兵衛、左官七藏(家右衛門)藥賣久八(八幡念)(成三)伊藤喜兵衛、母お熊(右左次)四ッ谷左門、後家お弓、小林平内(右田三郎)秋山長兵衛(駒之助)按摩宅悦、直助權兵衛(大吉)

THE PINE TREE



BY THE FIRST THEATRE
AT NANIWA-ZA SEPT. 1929

タケダ・イヅモ原作

マ

ツ

一幕

日本語より翻案したる戯曲

— エム・シー・マアカス —

田中總一郎譯

人物

マツオオ

大臣フデワラ・トキイ
ヘエラ(シヘイ)の家臣

チヨオ夫

その妻

コタロオ

その息子(八歳)

クワン・シユウザイ

前の大

サデワラ・ノ・ミチザ

ネの息子(八歳)

クワン・シユウザイの母親

前の大

ガンゾオ

前の大

トナアミイ夫人

その妻

ゲム

トキイへの侍従

サンゾオキイ

マツオオの下僕

阿 呆

十五歳の少年

チヨマ

八歳の少年

エワマ

十歳の少年

トクザン

八歳の少年

以上四人、ガンゾオの生徒

外二三名の少年達

ゲムバの指揮する兵士達、百姓達

プロロオグの女 二人

プロロオグの女二人登場して舞踊する。やがて背景を左右に引くと松の舞臺になる。演技は九百〇二年にセリヨオの小村に於けるガンゾオの邸の教室と中庭に於て行はれる、中央

は扉が開いた時に見える。

シユウザイ、阿呆及びその他の生徒達は金べて床の上に坐つて各自、筆記帳として右手に墨壺、左手に小さな本箱をのせた小机をもつてゐる。そしていそがしうに筆を持つて何か日本字の手習ひをやつてゐる。

彼等は腰々自分達の勉強を中断する。そして喧噪を極める、彼等は大抵墨で指をまつくろにしてゐる、中には顔にまで墨をつけてゐる奴もある。

阿呆 何と馬鹿らしいぢやないか、校長先生がゐもしないのに、勉強するなんて………（一枚の紙片を差上げる）おい、見ろよ………俺は坊主頭の書を描いたぜ。

みんな大笑ひをする。多くのものは立ち上る、大喧噪。

シユウザイ 阿呆君、そんな落書きをするひまに何かもつと爲めになることをしたまへ
阿呆 フ、ン、君は懶巧だよ、ワアイ、く見てやれ、このコマツチャクレを………おい皆、これをあの櫻の枝にいはへつけよう
トナアミイ夫人が次の部屋からやつ

て来る。

トナアミイ夫人 まあ、静かには出来ないかえ。お前そこで何をしておます、自分の場所へ坐つて、勉強をおし、まあ櫻の枝を折つて誰です、これは、

或る少年（少年達はみんな坐つて勉強をはじめ、本を讀んだり手習ひをしたりする。そして自分達の書いた綴書の發音の稽古をして貰ふ）エーロ、ハ、ニー、ホ、ハ、ト………

チーヨー夫人がその子コタロオの手をひいて登場。

サンゾオキイは小机、本箱及び二個の包みを持つて二人の供をする。

サンゾオキイ（戸の外から、戸を少し開けて）御免下さい。

トナアミイ夫人 はい、どうぞ、御這入下さい。

チイヨオ夫人（コタロオを伴つては入る）

（左右へ挨拶をする）私は今朝ガンゾオ様へお使をさしあげまして、私の幼い子供を生徒にとつて頂けるかどうかお尋ねいたしました、ガンゾオ様は大そう懇に承諾して

下さいました、これがその見てございます

トナアミイ夫人 まあ、この方があなたのお子さんですか、よくいらつしやいましたねお美しい、上品なお子さんですこと。

チイヨオ夫人 いゝえもう、厄介者で御座います。あなたのおない年齢のお子さんがおありなると伺ひまして大變嬉しうございしました、この中にいらつしやるのでございしますか。

トナアミイ夫人 はい、これがその子でございます（シユウザイに）こゝへおいで、そしてこのおばさまに御挨拶をおし………（シユウザイは近寄つてチイヨオ夫人の前に大へん低く頭をさげる）はい、これがガンゾオの世續でございます。

チイヨオ夫人（二人の少年の顔を比較するかの様にかわるゝながめる）何といふ奇麗な、可愛らしいお子さんでせう、そして御主人は御不在でございますか。

トナアミイ夫人 はい、今朝早く村長のところのお祭りの寄合に招かれて行きました、何なら迎ひにやりますせう。

チイヨオ夫人 いえ、それには及びません、

私は隣り村に色々用事がございます、いづれ後程歸つて参ります、その時にガンゾオ様にお目にかゝれるでせう……ちよいとサンゾオキイや、それをこへお出しへサンゾオキイは二個の包みを彼女にわたす、第一の包みは白紙に包まれてあつて入學記念を祝つたものである、チヨオ夫人はそれを取りあげて慇懃にトナアミイ夫人の前に置く、どうぞ、お近づきのしるしとしてお受取り下さいませ。

トナアミイ夫人（深甚なる挨拶をして）まあこれはほんとうにどうも御丁寧に。

チヨオ夫人 いえ、どういたしまして、とんでもない、それでこの箱のものは（と第二の包をトナアミイ夫人に渡す）生徒さんたちにおあげ下さいまし。

トナアミイ夫人 有難うございます、主人もきつと大變有難く思ふことでございます、チヨオ夫人 では、私はもうおいとま致します、子供はあなたにお托いたします。（コタロオに）ねエ、お前はおとなしくしてゐるんだよ、お母さんは一寸隣村まで行つて来る、またすぐに歸つて来ますからねエ

コタロオ お母さん！僕も一緒に連れて下さい（母が行かうとするとその袂にすがる）。チヨオ夫人 何といふ弱蟲だね、お前は……（トナアミイ夫人に）ほんとうにごらん

の通りのねんねえて……（彼を抱いて）良い兒、良い兒、お母さんはすぐに歸つて来ますからね（サンゾオキイを伴つて去る、しかし彼女が部屋を出て、表へ出やうとする時、二度も三度も振りかへつて、情熱的に懷しげにコタロオを見る、遂に、一度戸口を閉めてから、もう一度部屋へ戻つて来る）御免下さいまし、あの、扇子を忘れると……（皆はそれを探す）トナアミイ夫人（少時の後）ですが、お扇子はあなたのお手にお持ちでございます。チヨオ夫人（驚いて）まあ、ほんとうにさうでございます、私は何といふお馬鹿さんでございませう（彼女は思ひ切つて部屋を去る、その時、もう一度子供を懷しげにそして悲しげに凝視する）

トナアミイ夫人（コタロオにたぐさめる）悲しむんぢやありません、ねエ、あの子のところへ行つて、一緒にお遊びなさい。

彼女はコタロオをシユウザイのところへ連れて行つて、あらゆる手段で彼の心持を明るくしやうと試みる。ガンゾオ入り来る。

彼は生色を失つて、憫んでゐる様子である。

戸口のところで立止つて、生徒たちをつくらんと凝視して、その顔を検査する、但しコタロオには氣がつかない。

ガンゾオ（怒つて、獨白）百姓どもの面だ……土百姓の鷹首ばかりだ……役に立たない……（座る、沈黙する）

トナアミイ夫人（彼を注視する、最初彼女の女は叱驚してゐたがしかし、だん／＼と心配になつて来る、彼女の女は夫に向ひ合つて座る、そして可成り長い沈黙の後に）何といふ青白いお顔の色ですこと、御主人様、仰有つて下さい、何が起つたのでございませう、仰有つて下さい、御覽下さいまし、この少年を、この子が今度はいつた生徒でございます（コタロオに）こちらへおいでコタロオや、そして先生に御挨拶をなさい。

コタロオ（町亭に敬禮をして、へりくだる）先生、どうかよろしくお願ひ申します。

ガンゾオ（何の考へもなく少年を見る）（コタロオは立上る、ガンゾオは偶然に彼の顔に注意する、そして驚いていくつかの素早い瞥見をこの少年の上に投げる、彼の様子は序々にいくらか凶兆をおびてくる）……君は良い子だ、コタロオ君、美しい少年だ、立派な、行儀のよい少年だへとトナアミイ夫人に何とお前はそうとは思はぬか。

トナアミイ夫人（ほんとうに左様でございませう、この子は屹度賢い學者になるでございませう、この子をこゝに連れていらつしたお母さんが……）

ガンゾオ（遮つて）この子のお母さん——何

だ？その人はまだこゝにゐるのか？

トナアミイ夫人（隣り村に大切な御用事があるとかで、急いでお歸りなさいました、しかしまた間もなくこゝへお戻りなさいますガンゾオ（抑へつけられたやうに）うん、さうか……よし……今日は午後は休みにしよう、生徒たちは今から向ふの部屋で好きな様に遊ぶが好い。

生徒たちは立ち上る。大喧嘩が起る自分たちの手習ひの道具を包んで、机を部屋の隅に片附ける、そして喜びの聲を擧げて退場する。

ガンゾオは考へ深くその後を見送るトナアミイ夫人は生徒たちの去つたあとで扉をしめて、夫のそばへ戻るそして子供達が見てゐないかどうかを見るやうに四邊を見廻して、そしてそれから夫に向ひ合つて座る。

トナアミイ夫人（仰しやつて下さい、何が起つたのでございませう……あゝ私は怖ろしうございませう……凶悪な運命が私たちを待つてゐるやうな気がして……）

ガンゾオ（わるい運命といふか……いや全くその通りだ、村長の寄合は計略だつたのだ、大臣の侍従ゲムバめが、わしに近付いて来て、奴のうしろには百人以上の家來がついてゐた、『ガンゾオ』とあいつが叫んだ『我々はお前の秘密を知つてゐる、そうだ、よく知つてゐるのだぞ、お前がお前の息子だと胡麻化して云ひ張つてゐるあの少年を我々に引渡せ、あの少年は若いシユウ

ザイだ、さあ、これが命令だ、二時間以内

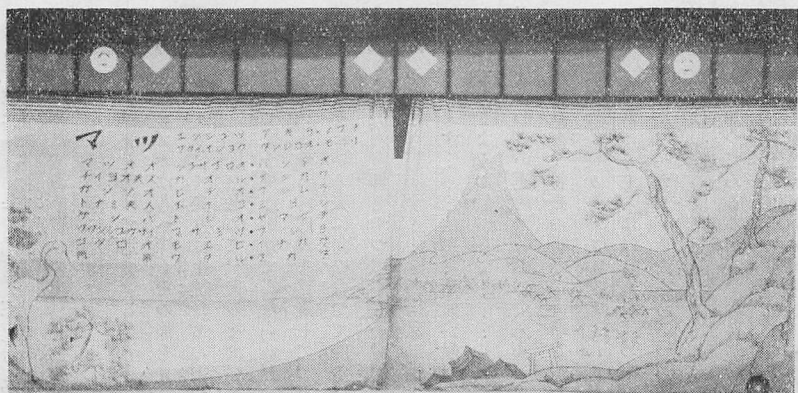
にシユウザイの首を引渡せ』これがあいつの口上だ、奴の側にマツオオが立つてゐたマツオオは宮廷でシユウザイさまを見知つてゐる唯一の人間だ、だから大臣はこのマツオオを呼び出して首實檢をさせねばならないのだ、おゝ、破廉耻漢め！あいつは我々の舊主を忘れたのだ奴は今病氣で衰弱してゐる、だが罪惡や叛逆にかけては、まだくたけた奴だ、家へ歸る途すがら、わしは考へに考へ抜いた、若君の御身替りに、もし自分の生徒を立てたとしたらどうだらう、しかしあんな下品な顔付では、誰が欺かされやう、失望しながら、苦しみと心配とで一杯になつて歸つて來たのだ、その時、思ひがけなくわしは、あの見知らぬ少年を見たのだ、云つてくれ、あの少年は若君に似てはゐないか、妻よ、天があの子

を我々にお送り下すつたのだ、さうだ、あの子を殺さうそして使者にその首を渡さうそれから……若君をお連れ申して素早く落ちのびるのだ。

トナアミイ夫人（あゝ、それはほんとうで

いますか、この罪もない、血潮を残酷にも流さなくてはならないと云ふのは（間）それはほんとうです、主君に對する義務程神聖なものはないからです、もし私たちがこの世界中を犠牲にしなくてはならないとしても……さうです、それはしなくてはなりません、しかし、果してお役に立つてしやうか、マツオオは若君を存じて居ります、彼の眼は決して欺かれないでございませう彼は私たちの計略を見破つてしまふでございませう。

ガンゾオ そうだ、若しもあいつがさうしたら、それこそあいつの身の破滅だ、妻よ、わしは一刀の下にあいつを切り倒してやるのだ、そして虎のやうに家來共の中におどり入つて、彼等を追拂ふか……でなければ忠義な下僕として、若君諸共討死するのだ、子供の相貌といふものは奇怪なもので生きてゐる間のいくらかの違ひは、死んでしまへばたしかに消へてなくなる、しかし危険は他にもある、それはあの子のお母さんだ！……さうだ、もしも母親が戻つて來たら……それはあの人のおしあはせだ



子供もろとも……
トナアミイ夫人 え、あの方も一緒に？お、何といふ恐ろしいこと。

ガンゾオ 今や一かバチかの瀬戸際だ、わしは祈る、あの人來ないやうに、しかし萬一あの人來たら、わしたちは、どうしても惡鬼の所業をしなくてはならないのだ。

トナアミイ夫人 よくわかりました、もし他に方法がなかったら、私たちは鬼になりませう（泣く）あゝ可愛想な少年、そして運のわるいお母さん！どうして今日のやうな日にいらつして、可愛い、寶物をお託しになったのだらう！

ゲムバ戸口を開ける、マツオオが昇床に坐つてゐるのが見える。

百姓たちが中庭まで這入つて來て、二人の武士に敬虔なる會釋を以つて訴へる。

四五人の百姓達 お願ひでござります。

第一の百姓 お、お偉いお旦那さま方。お隣みをおかけ下さりませ。

第二の百姓 助けてやつてくだされませ、お武士さま！（合掌）

ゲムバ (彼の側にたかつてゐる百姓たちを残忍に追立てる) 罰當りの、五月蠅い下民ども奴！地獄へ陥ちてしまへ！誰がお前等の薄穢い、阿呆な俄鬼なんぞに手をかけるものか、大急ぎで連れて歸れ！(百姓達にクルリと背をむけて、アイロニカルに大聲で笑ふ)

マツオオ (昇床より出て、その身を支へるやうに重たげに長い刀に寄りかゝつて、ゆつくりと戸口に近づく) ゲムバ、そう急ぐな全責任を負つてゐるのは私です、この百姓たちの一人が陰謀をたくらんで、シユウザイを自分の子供のやうに見せかけないとも限りますまい、(百姓たちに)皆の者、靜かにしろ、そしてお前たちの子供の名前を呼んでみる、わしはお前たちの手に子供を渡す以前に顔を見るのだ。

百姓一同 (同時に名前を呼ぶ)
マツオオ 一人づ、順番に！

彼は刀の柄を固く握りしめる、そして順番に名前の呼ばれるのを、ガンゾオとトナアミイ夫人とはうちらで心配相に聴耳を立て、また戸外では

父親や白髪頭のお爺さんが懸念らしく待つてゐる。

第一の百姓 チヨマよ、チヨマよ。

ガンゾオ (奥の部屋に通ずる戸口の近くに立つてゐて、呼ばれた名前を復唱して、奥の部屋の子供達を呼ぶ) チヨマ君……

チヨマ (入り来る) 僕、こゝにゐます。

マツオオ (にらむ) こいつの顔洗つたところで、決して奇麗にはなるまい、連れて行け (第一の百姓はチヨマの手をとつてつれて行く)

第二の百姓 エワマは居るか……エワマ。

エワマ (出る) おう、お爺ちゃん、こゝにゐる。

マツオオ (凝視する) 連れてゆけ (第二の百姓は彼を背に負つて連れて行く)

第三の百姓 わしのいとし兒！、野呂よ、可愛い、ぼんよ！

阿呆 (十五才の田夫) わしやこゝにゐる (エワマが祖父さんの背に負はれてゆくのを見て大聲をあげる) わしもおんぶをしてお呉れ、とつちゃん、おんぶして、おんぶして (咆立る)

第三の百姓 おゝ泣くな、好い兒だ、泣くなよ……

ゲムバ (嘲笑ふ) あの馬のやうな脚をして燕みたいな聲を出す百姓めは、立派なプリンスだつたかも知れせんよ！(彼れを見かへりながら)

第四の百姓 トクザンよ！トクザンよ！何と奇麗な子供で御座いませうがな、お武士さま(トクザンを連れて去らうとする、マツオオは彼を捕へる)

マツオオ 待て、子供、止まれ！(もう一度見る) この汚らしい腕白小僧め！とつとゝ走り去れ(蹴る)

第四の百姓入る。

ゲムバ (怒つて) ちえい、ガンゾオ……あとに残つた三匹の餓鬼共を束にして呼び出せ

ゲムバのしやべつてゐる間に、ガンゾオは残りの三人の子供を呼び出す
ガンゾオ タコマ君、ヨタロ君、サゴロ君！
ゲムバとマツオオは彼等を素早く検査してあちらへ行かせる。引戸が閉まる。

ゲムバとマツオオはガンゾオに向ひ

あつて座る。

ゲムバ さあ、ガンゾオ、わしのこの眼の前で、君が誓つた通り、その少年の首を刎ねるのだ、さあ急いで、その首を引渡し給へ！

ガンゾオ (靜かに自若として) では氣高い若君の咽喉をひつゝかまへ、大ころのやうにその首を切落せるでもお思ひですか、暫らくの時間を興へて下さい (彼は立上つて奥の部屋へ行きかける)

マツオオ お待ちなさい (凝視する) ベテンにかけやうとしても、それは駄目だ、その間に小さな若君を裏口から逃がさうと考へるなら、君の計略は既に手遅れだ、百人以上の者共が君の住居を取り巻いてゐて、鼠一正逃げ出すことも不可能だわ、但しは死顔と生顔とは相恰變るなどと偽首級を渡して僕を欺けるとも思つてゐるのか、だが吾が友よ、そんな手では胡麻化せないよ、君の後悔するのは眼のあたりだ……

ガンゾオ (我慢し切れずに) 餘計なお節介だ正真正銘の御首級を今に君の前に置いてやるから、病みほうけた眼で見間違へないや

うにしろ。

ゲムバ (もどかしさうに) 餘計なへらず口を叩かないで、早く行け！ (彼はガンゾオに首級桶を渡す、ガンゾオは中央の戸口より退場)

間。

トナアミイ夫人は不安げに聴耳を立てゝ座つてゐる。

マツオオは穿鑿するやうに四邊を睨み廻す。

しばらくの後、彼は机と本箱の數をよむ。

マツオオ どうも不思議だ！ 今おつぱらつた餓鬼の數は七人ではなかつたかところが、こゝには机が一つ、餘計にある、たしかに八個だ！ (トナアミイ夫人に) この机は誰のです(コタロオの机を示す)

トナアミイ夫人 (驚いて、まごつく) この机は……あの、新しい生徒の……

マツオオ 何ツ？

トナアミイ夫人 いゝえ、新人生ぢやありません、それはクワン・シユウザイさまの机です、ほんとうにクワン・シユウザイさま

の……

マツオオ (もどかし氣に) よろしい、あなたの言ふことを信じておかう。

舞臺のうしろで、身體の倒れるやうな音がする。

トナアミイ夫人は烈しく跳上る。

マツオオはほんの少しだが注目すべき動きをする。

トナアミイ夫人は、最初いそいで奥の間へ行かうとするが、自制して心配氣にそこに立ちつくす。

ガンゾオ (手に蓋をした本箱をさゝげて登場、靜かにそれをマツオオの前に置く) 御命令通り、クワン・シユウザイの御首級です、さあ、よく檢分して下さい、彼はいくらか片寄つたところに座をしめて鋭くマツオオを見守つて刀の柄に手をかける)

マツオオ 者共！ 見張りをしろ！

兵士達バラ／＼と出て見張る。彼は出来るだけ近くに本箱を自分の方に引寄せて、眼を閉ぢたまゝその蓋をとる、それから、ゆつくりと、まるで夢からさめた様に眼を開く。

彼はしばし深い沈黙のうちに、その首を見つめる、それからかすかに震へる手で觸つてみる、心理的苦惱の表現が、ほんの瞬間、彼の顔をサツと通る。

しかし直ちに消へる。

他の者達は心配な豫期で一杯である

マツオオ (間があつて、沈着な静寂さを以てゆつくりと) よろしい、微塵も疑ひはない!、クワン・シユウザイの首に………相違ない! (彼は箱の蓋を閉める、ガンゾオとトナミイ夫人は安心の歎息をする、そしてお互ひに素早く目と目を見合ふ)

ゲムバ (立上る) とうとうやつたか君は勇氣を出してよく振舞つた、ガンゾオ君! 何か報酬をうけるに充分だ、クワン・シユウザイをかくまつてゐた罪は正に死に當るが赦してくれる(マツオオに) さあ、マツオオ君來給へ、我々はこれから大急ぎで宮廷へ行かう。

マツオオ ゲムバ君、僕は失禮します、僕の病氣は見掛けよりもずつとわるいのだ。ゲムバ君の任務はもう済んだのだ、家に歸

つて養生するがいゝ。

マツオオ 僕の責任は果しました、これで永のお暇を賜つたのです、では左様なら……… (ゲムバは箱を取上げて兵士を従へて去るマツオオは刀を杖にしながら、彼のあとについて昇床に乗つて運び去らる)

暫くの間。

ガンゾオとトナミイ夫人とは驚きのために座つた儘でデツとしてゐるそして皆の出て行つた方角を懷疑的に見る、それからガンゾオは戸口のところへ行つて、門をかける、二人はもう一度座つて、お互ひに顔を見合せて安心の歎息をつく。

トナミイ夫人はシカと握つた兩手を天に向つて上げて、丁度燃へる様な感謝の祈りをささげるやうに、床に頭をすり附けて四五度禮拜する。

ガンゾオ 神々よ、又偉大な佛陀よ、感謝いたします……… 喜べ、妻よ、我等の若君の御壽命は萬々歳だぞ!

トナミイ夫人 これがほんとうの事なので御座いませうか、ほんとうの寶玉と間違へ

て、石をつかんだので御座います、おゝ眞心をこめて神様に感謝いたしませう……… (その瞬間、誰か外から戸口を四五度叩く、ガンゾオとトナミイ夫人吃驚する)

チイオオ夫人 (戸外で) 新入生の母親でございます!、内へ還入らせて下さいまし!

トナミイ夫人 (怖れてさやく) あれもしも母親です! どうしませう、何と言ひませう。

チイオオ夫人 (戸外で) (烈しくノックする)

ガンゾオ (怖い顔をしてトナミイ夫人に) 黙つてゐる、トナミイ夫人を傍へおしやつて、戸口をあけてチイオオ夫人を招じ入れる)

チイオオ夫人 (ひどく驚いて) まあ、あなた様がタケベ、ガンゾオ先生でいらつしやいますか、私は今朝程子供をおうちへ連れて参りました、あの子はどこに居りますやら定めし御厄介者で御座居ませう。

ガンゾオ いえ、どうもたしまして……… 奥で他の生徒たちと遊んで居ります、お逢ひになりますか、家へお連れ歸りになります

か。

チヨオ夫人 はい、お逢はせ下さいませ、
連れて歸りたういますから。

ガンゾオ (立上り乍ら) それでは、おいで下さい、どうかこの部屋へおはいり下さい…… (チヨオ夫人は奥の間の戸の方へ向く、ガンゾオはその背後から刀を抜いて彼女に斬りかゝる、しかしその瞬間、彼女は身をかはしてうまくそれを避ける、そして机の間を逃げ乍ら、自分の子供の机を取上げて、それでガンゾオの刃をうけ止める)

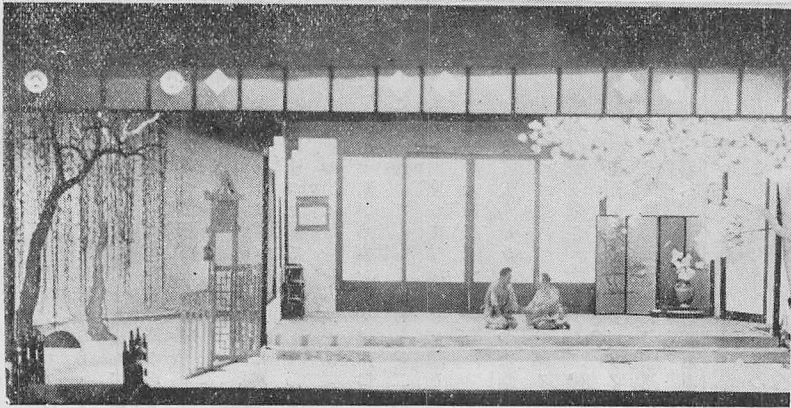
チヨオ夫人 まつて下さい！ まつて下さい！

ガンゾオ (尙も斬りかゝる)

その一撃で机が破れてこなんゝになる。その中から白い經帷子、祈禱文の書いた紙、葬式の幡及びその他葬式に用ふ小道具類が落ちる。

ガンゾオ オヤツ！ これは何と云ふ意味だ。

チヨオ夫人 (跳まづいてワツと泣く) あゝ仰つて下さいまし、私の子供は若君クワン・シユウザイさまの御身替りになりましたたてせうか…… 仰言つて下さいまし、お



お、どうぞ、ほんとうのことを。
ガンゾオ (啞然とする) あなたのお子さんがお身替りに？ それではあなたは…… わざと？…… あなたはわざとなすつたのですか……

チヨオ夫人 おゝ、私のいとしい、可愛い子よ！ 若君さまのお命をお救ひしようと進んでお身替りに立つたのです、それでなければ、こんな經帷子や、祈禱文や、『ナム、アミダ、ブツ』と書いた幡に、何の用事が…… いますえう。

ガンゾオ ふうむ、して貴女は一體どなたですか、あなたの御主人はどなたなので御座いますか？

再び戸口にノックの音がする、マツオオが外から戸をあけて、這入つて後手で戸をしめて、そして座る。

マツオオ (大臣サグワラ・ノ・ミチザネの作つた詩句を吟誦す) 『梅はとび、櫻はかるゝ世の中に、何とて松のつかねなるらん』妻よ喜べ、我々の子供は、御主君の爲に、尊い犧牲の死を遂げたぞ！ (チヨオ夫人は床の上に身をなげて、大聲で泣く)

マツオオ (ひどく感動する、妻の方へ向き直つて) おゝ、よき妻よ、忠實な妻よ、尤もだ。

ガンゾオ (驚きと感動の間にある) わたくしは分りません、マツオオ、トキイヘエラの家臣のあなたは、我々の敵ではなかつたのですか。

マツオオ 尤もです、不幸な運命、御主君の敵トキイヘエラの味方に私を誘惑した運命おゝ、私は自分の周囲の人々から離れるのが、どんなに苦しかつたでせう、そして知らずと呼ばれることがどんなに辛かつたらう、それでも矢張りこの封建的誓約を卑怯に破棄することが出来ないで、他にどうする道もなかつたのです、こんな悲しみや憂目や歎きを、私は前生に犯した罪の報ひだと考へて、辛抱せねばなりませんでしたがしかし私は、もうこれ以上辛抱することが出来なくなりました、それゆゑ、トキイヘエラから離れるために、病氣にかゝつたと偽つて、任務を免じて貰ふ様に歎願しました、その時丁度、あなたの家にクワン・シユウザイがかくまはれていと云ふ報告が

あつたのです……私はクワン・シユウザイの容貌を知つてゐる唯一人のものでしたそこで私はクワン・シユウザイの首實見をトキイヘエラからおほせつかりました、それが私の喉を貫ふ條件でした、そして、ガンゾオ君、今こそあなたは、私の義務を果したことを見て下さつたでせう……

私の最後の任務を、私の心の奥底から神々に感謝させて頂き、ガンゾオ私はあなたが幼年の御主君を助けんがために、手段をめぐらされるだらうと思ひました、けれどあなたに何が出来たでせう！私はすぐに親愛な妻に相談して、私たちの子供をあなたのところへお送りしました、若君の御身替りに使つて頂く爲に、あの子を神々とあなたにお任せしたので、それから私はすべてのことの結着をつける爲に此處へ來ました、私は机を見ました、そして一脚餘計にあるのを見て、それで自分の小さな子供が此處へ來たことを知りました、私は運命が私をまつてゐた通りを實現せました、しかし……おゝ、私は、つれない松の木だつたでせうか、あゝ、我々の善良な御

主君の御言葉、私を指して仰言つたお言葉……私の兩の耳にひびくやうでした、全世界がそれを自分の目の前で大聲に叫んでゐるかと思はれました、さうだ、お前は無情冷酷だ！お前は不義不忠だ、私がどんなに悩んだか考へてみて下さい、そして父の過失を償ふ爲に犠牲となつて呉れる子供がなかつたら、私は私の一家を擧げて世界中の侮蔑と耻晒しのたねになつたでせう、私の子供よ！私の子供よ！お前は我々の名譽の救主だ……

チヨオ夫人 我々の名譽の救主！さうですその言葉を繰返しませう、いとしい子供の聖められた魂への優しい讃辭です……おゝ、その言葉が天へ昇つて純粹な喜悦であの子を一杯にするでせう……あゝ私があの子を此處へ殘して行つた時、そしてその子が私について行きたいと頼んだ時、その時の私の悲しきといつたら、せめてもう一度だけでいゝあの最愛しい子供を抱きしめさせて下さい……あゝ最後にこの腕にあの子を抱かせて、あやさせて下さい！(彼女を身を投出して大聲で泣く)

トナアミイ夫人 そのお歎きはよく分ります、私はあの子が初めて校長先生にお目にかゝられた時に仰言つた言葉を想ひ出します『先生さま、どうかよろしくお願ひ申します』と、このことを考へるだけでも、冷たい眼楯が他人の私の身體中にもしみ渡ります、あの子のお母さんであるあなたにとつては道理でございます。

マツオオ おゝ、この極みない悲しみに打克つて、勇氣を出してこらへやう、この最も不幸な運命も神々が我々にお命じになつたものに違ひない、ガンゾオ、話して下さい云ひ聞かせてはおきましたが、あの子はどんな風に死にましたか、助けてくれとも申しましたか。

ガンゾオ 堂々たる最後でした、私は刀を抜いて、あの子の耳許で『君はこの場で即座に死なねばならぬ』と囁きました、彼はしづかに微笑んで、待つてゐたかの様に、靜かに首を差のべました。

マツオオ おゝ、勇ましい大膽な忠義な子供！（嗚咽する）あゝ御免下さい、ガンゾオ、私は涙を抑へることが出来ない……（泣く）

く、皆も彼と一緒に泣く）

クワン・シユウザイは奥の間から嗚咽の聲を聞いて扉をあけて入り来るシユウザイ それはわたしのためだつたのですか、それを知つたら、あの少年にそんな犠牲は決してさせなかつたのに（泣く、袂で顔を被ふ、皆も泣く、マツオオは靜かに立上り戸口の所へ行き、戸外の人に指揮する）

マツオオ 若君様！何物よりも美しい贈り物をあなた様を持つて参りました。（彼は戸口を指す、そこへ四五人の男共が扉の閉つた昇床を運ぶ、そしてその中からシユウザイの母が現れる）

シユウザイ お、お母さん、私のなつかしいお母さん！

シユウザイの母 わが兄よ、わが兄よ！

ガンゾオ（喜悅の驚愕の短い間の後）わしの眼は何を見てゐるのだ、これが眞實だらうか、永い間、到る處で、我々は空しくあなたをお探し申しました、あなたはどこにいて遊ばしたので御座いますか。

マツオオ それは私から繕てお話し致します

う、サガの御隠家をトキイヘエラの家來が発見したと聞きまして、私は姿をかへて奥方に逢ひに行きました、誰がその時の托鉢僧を私だと思つたでせう、そして数々の危険を経て、此處までお連れ申して來たのです、しかし我々はこれから大急ぎでカワチへ落延びなければなりません（チイオオ夫人に）さて妻よ、彼の両親として、我々の神聖な義務を遂行しやう、想ひ出のなきがらを埋めやう（この科白の間に次の部屋へ行つてゐたトナアミイ夫人は、この時腕に經帷子に被はれた人體を運んでくる、マツオオとチイオオ夫人は外衣を脱ぐと、その下に既に白の喪服を着てゐる）

ガンゾオ いや、いや！マツオオ私たちが不幸な御両親のあなた方にこの儀式的負擔をお任せするのは餘りに無情すぎます、私の妻と私が……

マツオオ おゝ、この義務をすることを私に許して下さい（思ひ入あつて）何故ならば、友よ、これは、私の子ではありません……

……それは、若君シユウザイ様です。
彼は腕に死體を抱いて去る（終り）



中座九月興行上演

浅茅ヶ宿

一幕

上田秋成原作
食満南北脚色

時 處 人

下總葛飾郡真間の郷
享徳の夏より寛正の秋

真間の勝四郎

その妻 宮 木

雀部の曾 次

婢 女 お 郷

近所の娘数人

舞臺は上手寄りに小さき庵をもうけ、表に生ひ茂りたる大きな松立ち、其下に古井戸あり。

これをめぐりて處の娘数人、手古奈をいたむ振りある、この常盤津にて暮あく。

ハかつしかの、真間の手兒奈のまことかも、其あきぎぬに青ぶすま、

かみもけづらぬ、くつをだにはかぬ素足もあやにしき、満てる面輪は望月の、清きかも花の咲く、その月花によりつどふおのこうたてや、灯に入る夏の蟲のごと思ひあつかう美しの心に涙の音さわぐ、湊になげし玉の緒はオ、湊になげし玉の緒よ。

内よりはした女お郷出て。

お郷 オツ皆さん手古奈を祀る夏のうた、あ

ぎやかて御座んすな。

女一 かつしかの眞間の井見れば立ならし。

女二 水くましけん、手古奈し思ふ。

女三 ほんに悲しい昔がたり、かうしていつ

も此井戸に手向けのうたを唄いまする。

女四 戀には悲しい眞間の纒橋。

女五 其纒はしものかふてや、宮木さんはし

あはせな。

女六 勝様と暗れて女夫に、

ト、いふを押さへ。

お郷 サア雀部の曾次の入習恵で、その纒は

しも中絶へて。

一同 エツ。

ト、聞き咎める。

お郷 イエ、そばで見る目もうらやましうござんす。

女一 宮木さんに、よいやうに。

一同 おさらばえ。

〽我身はもとの眞間の戀、しらぬ纒はし、つぎ〽と家路にわかれ入江なる。

ト、皆々別れ去る。

お郷 ほんにまだ戀知らぬ身のしあはせな。

〽朝な夕なのむつ言は、身にひし〽と鏡

石、此の身もまゝのみをつくし、

ト、二人の甘き戀にやゝ嫉妬らしく

思ひにふさがる、雀部の曾次慌ただ

しく旅ごしらへして出る。

曾次 オお郷殿、勝四郎殿は、

お郷 オツ曾次さん、もう出立て御座んすか

曾次 足利染の絹と一緒に勝四郎殿も京へ上

るのぢや。

お郷 でも情しらずの、

曾次 エツ、

お郷 もう〽京へつれて行く事はやめて下

さんせ。

曾次 ならぬ〽、コレ勝四郎殿〽。

勝四郎 ハイ〽。

ト、うちにて聲する。

お郷無理に拜んでひかへさす、勝四

郎旅ごしらへて出る。

〽縁も浅茅の宿もりはこがねにかけける戀無

情。

ト、勝四郎、旅ごしらへ絹の荷物を

持つて出るを妻宮木追ひ縋つて、

宮木 もし。

〽梓弓木のたづきの心ぼそ、のころこの

身を忘れはて、都に馴しなれごろも、氣

にもかけひの水のまゝ。

ト、恨む。

勝四郎 ハテ何をいふぞい、曾次にすゝめら

れ再びむかしの我家に戻したき、この絹を

都へもつてゐて一トはたらし、これ宮木、

秋にはきつと歸ります。

〽いかで浮木に乗りつるも、しらぬ他國に

長居せん、葛のうら葉のかへるのは、

秋ぢや〽。

ト、曾次、お郷を制しながら、

曾次 勝四郎殿、用意が出来たか。

勝四郎 オツ曾次殿か、いかう、またせてす

まなんだ。

お郷 いよくお立て御座りますか。

勝四郎 お郷、留守中は宮木をやうみまもり
してやつて下され。

お郷 ハイ。

勝四郎 さらばぢや。

宮木 ア、あなた。

勝四郎 エツ。

「かくてたのみも女氣に、野にも山にも惑
うなる、物うき限りさみしさを、身にし
みもとのまゝの宿、かへりをいそぎたま
はれと、男にまとひつぎはしの、入江に
水やまさらん。

ト、口説よろしく。

勝四郎 ハテ心弱い、これもむかしに返り咲
き、末のさかえちやまつていゝ。

「いひ捨つる袖、鳥が啼く東をあとに都路
へ別れ〜ていそぎ行く。

ト、よろしく別れのふり、花道へ入
る、泣ふす。

【暗転】

「星相此處に七とせの、寛正二年秋の頃、
せうそく絶えし古郷の、わすれ草、思ひ
ぬる野べにすごせし年月は實にまことな

き我心。

ト、明るくすると、まへの儘の道具
にて松の木のみ雷にうたれて倒れて
ゐる。

「ありつる世にはあらずとも其あと求めす
みなれし里へたどりて月かげも千草の蟲
ものかなし。

ト、月一パイに出て、勝四郎や、面
やつれ、蟲の音をしたひ出る。

花道にて、

勝四郎 ア、もう故郷を出て七年になるか、
忘れもせぬものまゝの繼はし、あたりの

けしきは變つてゐぬが、都の情の面白さに
ツイ歸りを忘れはてた、宮木は無事にゐや
らうか。

「立寄るかたへに主を待つ、其常盤木もい
かづちに折れてすがたも川岸に、軒のし

るしを持たずすみ、

ほんに雷に折れてはゐるが、まぎれもない
我家のしるし。

「まづ嬉しやと古門のすきもるゝ灯かげに
胸なでおろし。

勝四郎 やつぱり宮木は生きてゐたか、エへ

ン〜。

「打咳ぶけば、

宮木 何誰ぢや。

「いたうねびたる妻の聲、

勝四郎 わしぢや。

宮木 ア、お歸りなされましたか。

「互に手に手をこう言葉もないじやくり。

勝四郎 マアよかつた、かはらで獨り浅茅が
宿に、マアどうして生きてゐたのやら、ふ

しぎな事ぢや。

宮木 それも涙のものがたり。

「ひとたびわかれまひらせて、たの玉の秋

より世の中はいと恐ろしき矢たけびに、
里人あげて逃まどひ、海にたゞよひ、山
ごもり、わたし一人はお言葉をたよりに
此處に残りましたが、

「やもめをたよりましたとてや、言葉たくみ
にいぎのうも、玉とくだけん心にて、君

の歸りをまちわびて、松の軒端の宿もり

に狐ふくるを友としてけふまでみきほま
もりてし、女心をさつしてたべ、膝に打

ふしなげくにぞ。

勝四郎 アツさうか、わたしも早う歸る

うと心と身とはうらはらに、

〆都も同じたゝかひに、右にのがれ左にさ

け、雀部にわかれ、山だちに物は奪はれ

よすぎさへまゝにはならぬ葉松もてに、

うら悲しくも故郷を思ひうかつて七とせ

ごし。

ア、巫山の雲か。

宮木 漢宮のまぼろし。

勝四郎 マア〱目出度い、恨みもあらうが

忘れてくれ、けふは夫婦の七とせごし、祝

ふて一つのもうか。

宮木 さうで御座んすか。

勝四郎 用意はあるか。

宮木 ハイ。

〆とり出す 孟、さゝめごと、うれしなつ

かし、夢の世や。

ト、孟をとり出し 孟ごと。

勝四郎 ア、面白うなつて來た、初めて古郷

に落ついた、宮木一ツうたはぬか。

宮木 ハイ。

〆身のうさは人しも告げじあふ坂の夕つけ

鳥よ秋もくれぬを、

ト、悲しく舞ふ。

勝四郎 コレ〱もうその恨みはよしてくれ

サアわしも故郷の土の上。

〆まゝよ手古奈よ、其かつしかに、眞木の

葉かげ松が根戀し、こひし〱のこの

ふるさに、浮世しらずの八幡の森よ、

いづれわたりにその舟橋の、サツサ舟橋

わたりに舟よ、サツサ舟はし、わたりに

舟よ。

ト、勝四郎酔しれて踊り狂ひ廢てし

まふ。

物凄く、

宮木 ア、やつぱりまことは梨の園。

〆アラ恨めしの我夫や、妻の戀しきくみも

せで、さりともと思ふ心にはかられて、

世にもけふ迄生ける命か。

ト、引ぬき、白地の着附かみもおど

ろになり。

〆二世の赤繩もこれまでぞ、何を那須野の

薄紙に古びて文字もむら消ゆる水向けさ

へもうすらひのとけてあとなく、

ト、大ドロ〱になり。

あれはてし、家の中に、一首かきたる土ま

【暗転】

んぢうのみのこり、勝四郎寢てゐる。

〆五更の空あけゆく頃、うす寒き身にかき

よするふすまも床もあれの原。

ト、大ドロ〱 勝四郎、さめ。

勝四郎 ヤ、宮木〱〱、ア、勝四郎の家

がない、ア、酒も、妻も、家も、床も。

〆たゞ有明のこのる月、すがきくづれて、

萩桔梗、すゝきかるかやおみなめし、そ

の朝つゆに玉をのせ、無分別なる置どこ

る。

ト、うろ〱して、

勝四郎 ア、夢か、うつゝか、宮木、宮木。

〆呼べどかへらぬ亡き魂に、それかとよれ

ば立てるかけ。

ト、うろ〱してとゞすゝきの中に

宮木の姿を見つける。

コレ宮木。

ト、とりつく、これは？役のお郷な

り。

お郷 ア、びつくりした、オ、御主人様か。

勝四郎 エツ、オツ、お郷か、お郷か、どう

しました、宮木は宮木は、この家は。

お郷 旦那様戀しさに。

勝四郎 エツ、この勝四郎戀しさに。

お郷 歌をのこして宮木様は。

勝四郎 うた。

お郷 エ、亡くなりなされました。

勝四郎 エツ。

お郷 サアちやつと御覽なされませ。

——法名さへもあら悲し、いまわにのこす歌一首。

ト、つれてくる。

勝四郎 何ぢや、さりともと思ふ心に、はかれて世にもけふまでいける命か。ア、掬てはさつきのひとふりは。

お郷 さつきとは。

勝四郎 宮木くすまぬく許してくれ。

秋去り春も來りてし、いくとし月をわれ故にまちわび、まちはてまくらし。

ト、うつとりなる。

お郷 もし。

勝四郎 宮木ゆるしてくれよ。

真間の手古奈のふるごとにあらぬこの世の戀ごろも、戀にやつれし面影こひし、われは忘れし情なの男心そうらめしき、巫山の雲か漢宮の、そのまぼろしの夢の

夢——。

宮木、く。

狂ひ狂ひて又もとの真間にはならぬ世のつきはしや、あなたへひらり、こなたへひらり、秋の胡蝶が秋のすゝまかるかやふみしだき、宮木戀しや、手古奈のむか

し昔こひしや、戀ごろも、氣もくるはしく追ふて行く。

ト、お郷からみ狂亂のふり事よろしくだんぐに松ヶ枝をまわり向ふへは入る。

【幕】



本社 東京市京橋區西紺屋町十番地
大阪支局 大阪市西區土佐堀船町貳拾四番地
電話長土佐堀一四八番

本紙八頁
日曜夕刊共
壹ヶ月定價
金八十錢

近畿大總發行所
名古屋市中區西川端町一丁目
都京市下京區島大通佛光寺上
大阪市北區堂島上三丁目三番地
神戸市市榮町五丁目
船井新聞舖
(遠隔ハ略ス)

編輯後記

松本泰三

爽やかな新秋―各座の休演で淋しかった道頓堀も九月にいと一齊に活氣づき、各座は表飾りに競争的デコレーションを施し、新しい櫓下がヘンボンとして翻る―劇界にもニュータームが参りました。

浪花座の第一劇場は林長二郎も加つて大變な人氣です。それに『マツ』は外國の舞台に演ぜられたバタ臭い「寺小屋」が、逆輸入されたといふので、これまた素晴らしい呼物になつてゐます。本誌は『マツ』に就いて、その脚本を田中氏から、演出手記を野淵氏から戴きました。尙この『マツ』に使ふコストームは寫眞版にして記事中に掲載しましたから、充分なる参考を得られると信じます。

中座は久しぶりの大歌舞伎で『板額』を除いては全部新作ものです。福助が父梅玉譲りの板額を初演するといふので、これに關する記事を高谷、森の兩氏にお願ひ致しました。『壇の浦』は作者高安月郊氏からその感想を執筆願ひました。『淺茅ケ宿』は食満氏の了解を得て、脚本を掲載致しました。

工事中の辨天座は愈よ竣工し三十一日より映畫常設館として開場。昔竹田の芝居といはれた劇場も、

振り袖から斷髮姿へ、あつぱれ時代の子として、モダンニズムを現出してゐます。辨天座改築について本社常務取締役福井福三郎氏より執筆願ひました。

三高の林氏からは「外國人は歌舞伎劇を如何に見るか」、中井浩水氏から「我輩の口もと」で執筆を願へた事は幸甚です。その他、樋口氏から「切れら與三と長二郎」、國島氏から「山口俊雄を見る」、鷺谷氏から「第一劇場に就いて」、大西氏から「船に就いて」等の玉稿を戴きました。

例によつて寫眞撮影には骨がおれました。いまま少し自由に寫眞をとらして戴ける方法はないものかと思ひます。本號から口繪の編輯を成山桂三兄に願ひました。本誌も時代に遅れないやう、その編輯方針に種々苦心して居ります。愈よ歌舞伎シーズンが訪れて來ます。次號に御期待下さい。

新刊紹介

◆鎌倉御所（氣賀君子著）史劇「鎌倉御所」外六編の戯曲集、その内「左門とお七」は既に東京松竹座に於て壽美藏、松蔭に依つて上演し好評を博したものの。歌舞伎出版部發行・定價二圓

◆舞臺戯曲（月刊雜誌）九月創刊號を出す。菊版二百餘頁、九ポイント二段組の内容同人は松竹關係の劇壇人を中心に於て優秀な舞臺戯曲の發表と無名作家の紹介をモットーとする雑誌・東京赤坂區米川町二八―舞臺戯曲社・一部五十錢

昭和四年九月一日發行

月刊『道頓堀』第四年第三十六輯

◆誌代は前金でお拂ひを願います。

◆郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

◆御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

定價 金參拾錢（郵發五厘）

昭和四年八月廿一日印刷
昭和四年九月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

編輯者 松竹土地建物興業株式會社

印刷者 鳥江 鏡也

大阪市東區船場南之町二丁目

印刷者 松本 米藏

大阪市東區船場南之町二丁目

印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹土地建物興業株式會社

道頓堀編輯部

電話 六六六五番

大 阪

東洋食料品研究所

謹製

・食慾
・營養の増進
・疲勞の回復
・沃度

カルシウム
の含有量
多量



(定價一瓶
大金拾五錢
小金拾錢)

・產前
・產後の
婦人には
特に毛髪、
齒牙に及す
惡影響を防止す
發育盛りの坊ち
やん嬪ちやんの
健康増進

煮佃子

美味しくて

輕便で

お安くて

經濟的です

著名の各百貨店・食料品店
乾物店・漬物店に販賣す

發賣元

川合商店

土話電 番一四六三
番一六八三

大坂市西區南堀二丁目
(大坂神宮前)

昭和二年十月廿五日第三種郵便特認可
昭和四年八月廿

道頓堀第四年九月號

第三十六輯

金參拾錢

(郵錢五厘稅)



るなに顔いる明く若

粉白トーレ

阪大店商平賛尾平京東